岩波文庫
33-656-2

アラン

幸福論

神谷幹夫訳

岩波書店

岩波文庫

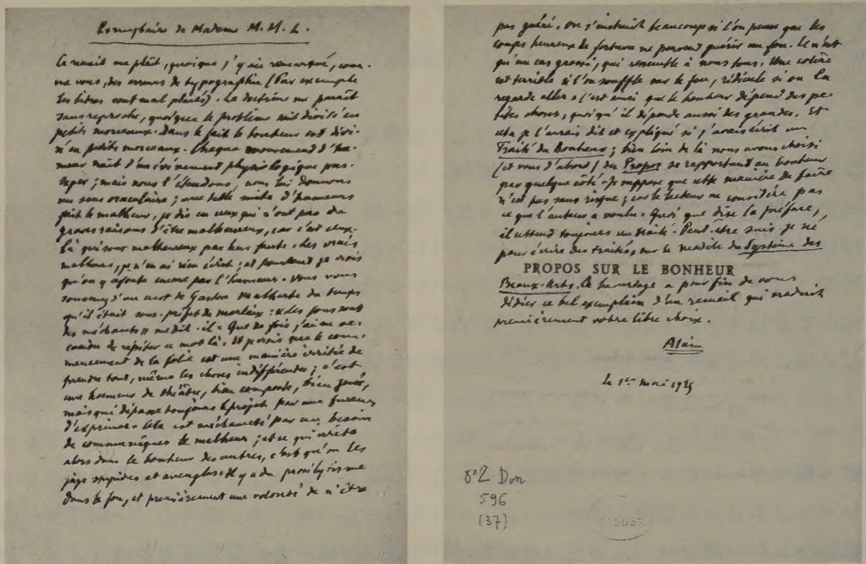
33-656-2

アラン

幸福論

神谷幹夫訳

岩波書店



Exemplaire de Madame M. M. L.

Ce recueil me plaît, quoique j'y aie remarqué, comme vous, des erreurs de typographie (par exemple les titres sont mal placés). La doctrine me paraît sans reproche, quoique le problème soit divisé en petits morceaux. Dans le fait le bonheur est divisé en petits morceaux. Chaque mouvement d'humeur naît d'un événement physiologique passager ; mais nous l'étendons, nous lui donnons un sens oraculaire ; une telle suite d'humeurs fait le malheur, je dis en ceux qui n'ont pas de graves raisons d'être malheureux, car c'est ceux-là qui sont malheureux par leur faute. Des vrais malheurs, je n'en ai rien écrit ; et pourtant je crois qu'on y ajoute encore par l'humeur. Vous vous souvenez d'un mot de Gaston Malherbe du temps qu'il était sous-préfet de Morlaix : « Les fous sont des méchants » me dit-il. « Que de fois j'ai eu occasion de répéter ce mot-là. » Et je crois que le commencement de la folie est une manière irritée de prendre tout, même les choses indifférentes ; c'est une humeur de théâtre, bien composée, bien jouée, mais qui dépasse toujours le projet par une fureur d'exprimer. Cela est méchanceté par un besoin de communiquer le malheur ; et ce qui irrite alors dans le bonheur des autres, c'est qu'on les juge stupides et aveugles. Il y a du [illegible] dans le fou, et précisément une volonté de n'être pas guéri. On s'instruit beaucoup si l'on pense que les coups heureux de fortune ne peuvent guérir un fou. Le [illegible] n'est qu'un cas grossi, qui ressemble à nous tous. Une colère est terrible si l'on souffle sur le feu, ridicule si on la regarde aller. C'est ainsi que le bonheur dépend des petites choses, quoiqu'il dépende aussi des grandes. Et cela je l'aurais dit et expliqué si j'avais écrit un Traité du Bonheur ; bien loin de là nous avons choisi (et vous d'abord) des Propos se rapportant au bonheur par quelque côté. Je suppose que cette manière de faire n'est pas sans risque ; car le lecteur ne considère pas ce que l'auteur a voulu. Quoi que dise la préface, il attend toujours un traité. Peut-être suis-je né pour écrire des traités, sur le modèle du Système des

PROPOS SUR LE BONHEUR

Beaux-Arts. Ce [illegible] a pour fin de vous dédier ce bel exemplaire d'un recueil qui traduit précisément votre libre choix.

Alain

Le 1er mai 1925

8°Z. Don
596
(37)

アランの手稿(モール・ランプラン夫人への献辞)

Alain

PROPOS SUR LE BONHEUR

1928

モール・ランブラン夫人への献辞

この本[1]はぼくも気に入っている。中身についてはおかしなところは何もないと思う。ただ、問題が細切れに分けられてしまっているが。ほんとうを言うと、幸福も細切れに分けられているものなのだ。気分の善し悪しはすべて、一時的なからだの出来事によるものだが、それをわれわれは異様に拡大して、そのことに神託のような意味を与えてしまう。そのような気分が最後に行き着くところが不幸である。ぼくが言うのは、重大な理由もないのに不幸な人たちのことだ。なぜなら、そういう人たちが不幸なのは自分が考えちがいをしているのだから。本物の不幸については、ぼくは何も書いていない。とは言っても、その時の気分によってはそれにも触れていたかもしれない。ガストン・マレルブがモルレーの副知事だった頃、ぼくに言ったことばを覚えているでしょう。「気ちがいは意地悪なものだ」と言ったのだ。いったい何度ぼくは、このことばを繰り返し言っただろう。いっさいを、まったくどうでもいいことまでも考慮していらいらすること、それこそが狂気の始まりであると思う。それはよく出来た、よく演じられた芝居気分ではあるが、表現に執着するあまり、いつも計画を台なしにしてしまう。それが意地

わしているから。

一九二五年五月一日

アラン

訳注

（1）六〇のプロポ（Propos「哲学断章」）からなる『幸福論』初版本。Edition des Cahiers du Capricorne, 1925, Nimes, Jo Fabre, 128 p.

悪だというのは、不幸を何としてでも伝えようとするからだ。その時、他の人びとの幸福を見ていらだつのは、あの連中はばか者で、盲目的な奴らだと判断するからだ。狂人は他人の考え方を変えさせることに無我夢中なのだ。まず第一に、救われたいと欲しないのである。たまたま良い運命にめぐまれたからといって気ちがいがなおるわけではないのを知るなら、人は大いなることを学んだことになる。それは極端なケースかもしれないが、だれにも当てはまる。怒りは、もしも煽り立てようものなら、恐ろしいものだが、もし怒りの進展を眺めているなら、怒りはじつに滑稽である。それと同じように、幸福は些細なことによっているものである。もちろん幸福はまた、重大な理由にも依るものではあるが、そのことは、もしもぼくが「幸福概論」のような書物を書いていたら、語っていただろうし、説き明かしてもいただろう。が、しかし、ぼくはそれをしなかった。われわれが(まず始めに、あなたが)選んだ「プロポ」は、何らかの意味合いで幸福とかかわったものである。このような方法に問題がないとは言い切れない。なぜなら、読者は著者が何を言わんとしたかなど考えないからだ。ぼくが序文でどう言おうとも、読者はいつも幸福概論を期待している。あるいはぼくが物を書くようになったのは、「芸術論」のような論文を書くためだったのかもしれない。最後にひとこと言って饒舌をやめる。あなたにこの美しい本を献ずる。この本は何よりもあなたの自由な選択を表

1　名馬ブケファラス

幼な子が泣いてどうにも泣きやまない時、乳母はしばしば、その子の幼い性格について、好き嫌いについてまことにうまい想定をあれこれとするものだ。これは親から受け継いだものだから、と言って、すでにその子のなかに父親の姿をみとめるのだ。こうした心理学的詮索が続いて最後にようやく乳母は、すべてのことが生まれたほんとうの原因、つまりピンを見つけるのである。

名馬ブケファラスが若いアレクサンドロス（紀元前三五六―三二三。マケドニア王アレクサンドロス三世）に贈られた時、どんな名人もこの荒馬を手なずけることができなかった。凡俗な者だったら、あきらめて「まったく性の悪い馬だ」とでも言っただろう。ところが、アレクサンドロスはピンをさがし、たちまち見つけた。ブケファラスは自分の影にひどく怯えているのがわかった。恐怖で飛び上がると影も跳ねるので際限がないのだ。アレクサンドロスは馬の鼻を太陽に向けた。この方向で支えると、馬は落ち着き疲れを示した。こうして、このアリストテレスの教え子はすでに、ほんとうの原因を知らないかぎり、情念を癒すことができないのを知っていた。

こねたピンを持っている。そこからヨーロッパの紛争が出てくる。一人が泣くと他の子たちも泣き出すことはよく知られている。さらにまずいことには、泣き出せばもっと泣けてくる。乳母たちは職業的な動作で、子どもを腹ばいにさせる。するとすぐに、ちがう動きが生まれて、あり方もちがってくる。これこそ一つの説得術で、けっして高いところをねらったものではない。一九一四年の不幸（第一次世界大戦）は、思うに、要人たちがみんな、不意打ちをくらったことから生まれたのだ。そこから彼らは怖がってしまった。人間が怖がると、怒りは遠からず起こる。興奮すると、すぐにいらだつ。自由にすごしている時から、休息している時から、突然よびもどされるのは好ましい状況ではない。そういう時はよく気分が変わる。変わりすぎる。寝ていて不意に起こされた時のように、目が覚めすぎてしまうのだ。でも、人間というのは意地悪なものだ、と言ってはだめだ。彼がこれこれの性格を持つ、と言ってはだめだ。ピンをさがしたまえ。

一九二二年十二月八日

多くの者が恐怖を、ことばでもってやっつけている。しかも強い論拠をもって。ところが、恐怖を感じている者はその理由など聞かないのだ。彼は心臓の鼓動と血液の波打つ音しか聞かない。もの知りぶる者は危険を感じるから恐怖が生まれるのだと言う。情念に囚われた者は恐怖を感じるから危険だと判断するのであると言う。二人とも自分の考えが正しいと主張するが、二人ともまちがっている。しかも、もの知りぶる者は二度もまちがいを犯している。ほんとうの理由を知らないのと、もう一方の誤りがわからないのである。人間は恐怖を感じると具体的な危険を考え出して、この恐怖がリアルなもので、十分確かめられたものだと説明する。ところが、どんな小さな驚きでさえも人をおびえさせる。まったく危険などないものでも。たとえば、非常に近くで不意にピストルの一発があった時、あるいは思いがけない人が現われただけでも。マッセナ元帥（一七五八―一八一七。フランスの軍人）は暗い階段の彫像におびえて、一目散に逃げ出した。

人がいらだったり不機嫌だったりするのは、よく長時間立たされていたせいによることがある。そんな不機嫌にはつきあわないで、椅子を出してやりたまえ。ものごとはどういう態度でやるかがすべてだ、と言った外交官タレランは、自分の思いもかけなかったほど深い意味を言っている。他人に不快な思いをあたえまいとして、彼はピンをさがし、ついに見つけたのである。現代の外交官たちはみんな、彼らのおむつの中に刺しそ

すべきかというと、からだ全体の力を抜くことである。とりわけ、強く息を吸ったらさわぎがひどくなるので、それをしないで、逆に、変なところに入りこんだ少量の流体を吐き出してしまうことである。言い換えれば、それは恐怖を追い出すことと同じである。恐怖というのはこの場合も、他の場合も同じだが、まったく仇するものだから。

風邪をひいて咳が出る場合にも、同じ類いの治療法があるのだが、あまりやられてはいない。人はたいてい、まるで怒り狂ったかのように自分の体をひっかくような咳をする。そこからどっと疲れが出ていらいらする。この症状にたいして、医者はトローチの効用を見つけた。トローチの主な働きは、何かを呑みこませることだとぼくは思う。物を呑みこむというのはすごく強い反作用なのだが、咳よりもさらに意志的でなく、もっとわれわれの手が届かない。この呑みこむという発作によって、あの咳をするという発作は制止せざるをえない。これもやはり赤ん坊を引っくり返して寝かせることである。ところで、ぼくが思うには、もし咳が出てもその悲劇を最初の段階だけにとどめておけたら、トローチはいらないだろう。もしどんな臆断も持たずに、始め、からだの力を抜いて冷静でいられたら、初期のいらだちはすぐに収まるであろう。

「いらだつ」というこの言葉は、人に何かを考えさせる。いらだちはまた、その叡知において、情念のなかでもっとも激しいものを指しているともいえる。怒りにわれを忘

2　いらだつこと

食物を気管に入れようものなら、からだ中が大さわぎを始める。まるで切迫した危険をからだの隅々にまで知らせているようだ。筋肉という筋肉がみんな、それぞれの仕方で引きつり、心臓もそれに加担している。これは一種の痙攣（けいれん）である。その時はどうしたらいいだろうか。いったい人間はこの種の反応（リアクション）に従いもせず影響を受けずにいることができようか。哲学者なら、そう考えるであろう。哲学者は経験のない人間だから。ところが、体操かフェンシングの先生だったら、もし生徒が「自分の力では、どうにもなりません。からだが自然と固くなって、筋肉が全部いっしょに引きつってくるのですから」と言ったら、大笑いするであろう。ぼくの知っている厳格な人物は、相手の同意を得た後で、剣（フルーレ）で相手をしたたか打ちのめした。理性に道を拓くために。次のこともよく知られている。筋肉というのは、おとなしい犬と同じように、その人の考えている〔欲している〕ことにおのずと従っている。自分が腕を伸ばそうとすれば、すぐに腕が伸びる。ぼくが先ほど考えたこの種の筋肉の痙攣や反逆のほんとうの原因は、まさに、一体どうすればいいのかわからないということである。そしてわれわれの例では、何をな

3　悲しみのマリー

躁鬱病について考えてみるのもむだではあるまい。とりわけ、ある心理学者がたまたま自分のクリニックで出会ったあの有名な話「悲しみのマリーとよろこびのマリー」について。この物語はもうすっかり忘れられているが、覚えておくだけの価値がある。この娘は一週間は楽しいのだが、もう一週間は悲しいのである。それが時計のように正確にやってくる。楽しみにある時は、すべてのことがうまく行っている。雨でも晴れた日と同じように大好きで、ほんのわずか友情のかけらでも見つけようものなら、もう嬉しさのあまりぼうっとしてしまう。もし何かの恋愛を考えると、「わたしって、何としあわせなのでしょう」と言う。彼女はけっして退屈することがない。どんなにつまらぬことでもバラ色のように思われた。まるで、一点のけちもつけようのない、生き生きとした美しい花のように。その娘は、まさにぼくが諸君に望んでいる理想の状態だった。なぜなら、賢人が言うとおり、どんな水差し壺でも二つの把手があるから。同じように、どんな出来事でも二つの視座があるからだ。そう言ってよければ、いつもふさぎこんでいる視座と、そう言ってよければ、いつも楽しんでいる、慰めにみちている視座とが。

れた人と、咳の発作に身をまかせている人との間に大きな相違があるとは、ぼくは思わない。同じように、恐怖はからだの不安であるのだが、これに対しては体操でもってたたかうことは必ずしもできない。これらの例のなかで、まちがっているのは、自分の考えが情念の言うなりになっていること、そしてどうにも手のつけられないような熱狂さで恐怖のなか、怒りのなかにとび込むことである。要するに、われわれの病気は情念によってもっと悪くなる。それがほんとうの体操を知らなかった者の運命である。ほんとうの体操というのは、ギリシャ人のよく知るとおり、正しい理性によってからだの動きを支配することである。もちろんそれはからだの全部の動きを、というのではない。激怒の発作に駆られてからだの自然なリアクションの邪魔をしないこと、ただそれだけの問題である。ぼくの思うところでは、これこそ子どもたちに教え込まねばならない。最も美しい彫像を、人間讃美のほんとうの目的を、いつもモデルとして示しながら。

一九一二年十二月五日

よろこびの季節が終わる頃になると、血球数が減少する。悲しみの季節の終わる頃になると、血球数が増大する。血球の減少・増大がその想像力の織り成す夢幻ドラマの真相だった。こうして医者は、彼女の熱狂的な訴えにたいして答えを出すことができた。「大丈夫ですよ。あすになれば、きっとよくなっていますから」。むろん、彼女の方はそんなことを信じるわけがなかった。

この話にたいして、ある友人は、実際に自分は悲しいのだと思いたがっている男なのだが、こう言った。「わかりきったことじゃないか。われわれの力ではどうすることもできないのだから。考えたところで血球数が増えるわけではないし……。要するに、どんな哲学もむだなことだ。この大宇宙というのはそれ自身の法則にしたがって、われわれに喜びをもたらすこともあれば、悲しみを与えることもある。まるで冬も来れば夏も来るように、また雨の日もあれば、晴れた日もあるように。僕がしあわせになりたいと望んだところで、そんなこと、散歩がしたいと思うのと大して変わらないではないか。僕にはこの谷間に雨を降らせることなどできない。自分の中に憂鬱をつくりもしない。耐えるだけだ。耐えることはよく知っている。すばらしい慰めだ！」と。

ことはそんなに単純ではないのだ。なるほど、つらい判断や、不吉な予言、いまわしい過去の出来事をくよくよと考えれば考えるほど、自分の悲しみがまざまざと蘇ってく

だから、しあわせになるために君がやったことは、けっしてむだにはならない。

ところが、一週間すると、人生の基調（トーン）が一変する。出口のない無力感にとらわれて、もう何も面白くない。何をみてもすべてが色あせてみえる。彼女はもう幸福など信じていない。愛情など信じない。だれからも疎んじられた。それももっともなことだった。彼女も自分の愚かさがつくづく嫌になっていた。考えれば考えるほど不幸は深刻になっていく。それは自分でもよく知っていた。彼女は一種の恐るべき方法で、小刻みに自殺していた。「みんなが私に関心をもっているように、私に信じこませようとする。でも私はそんな茶番劇にはだまされないわ」。ほめられると、笑い者にされているとみる。親切にされると、侮辱されているとみる。何か秘密を打ち明けられると、よからぬ謀（はか）りごとがあるとみる。こうした想像力の喚起する病については、治しようがないのだ。不幸な人間は、すばらしい出来事でさえもむなしいことだと一笑に付してしまうから。だから、幸福のなかには人の思っている以上に強靱な意志がある。

ところで、その心理学の先生は、そこから一層厳しい教えを引き出している。勇敢な魂にたいして驚くべき試練を見つけている。このような人間の季節のめまぐるしい交替にたいしていろいろ観察をかさね、さまざまな処置をほどこした後、ついに血液一立方センチメートル中の血球数の変化を調べたのである。そこには明らかな法則があった。

4　ノイローゼ

この時期のしぐれときたら、男の気分も、女のこころも、変わってしまう。まるで空模様のように。ぼくの友人で、立派な教養があり頭のいい男なのだが、彼がきのうこう言った。「ぼくは自分に不満なのだ。自分のやっていた仕事やトランプ遊びから離れるやいなや、自分の脳裏にたくさんのささいな理由が駆けめぐり、そのたびごとに喜んだり悲しんだりさせられている。それも鳩の胸の色が変わるよりもめまぐるしく、いろんな含みをもちながら。そんな理由というのも、手紙を出さねばならないとか、列車に乗り遅れたとか、オーバーが重すぎたとかいうことで、しかもそれがまるで不幸がほんとうに訪れたのと同じように、とほうもなく重大なことのように考えてしまうのだ。だめなのだよ、筋道を立てて考えて、そういったことはみんな、自分にはどうだっていいことだと言い聞かせても。ぼくの理屈はしめった太鼓のようなもので、もう心に響かない。つまり一言でいえば、ちょっとノイローゼになっているのだ」。

そこでぼくは言ってあげた。大げさに考えるなよ、ことの次第をよくみてごらん。君のようなことはだれだってそうなのだ。ただ不幸なことに、君は頭がよすぎる。自分を

る。それはつまり、悲しみを味わっているようなものだ。ところで、血球数が問題なのだと知ることは、自分の考えがばかげていたと笑いながら、その悲しみをつっぱねて、からだの中に押しやることだ。からだの中では悲しみはもう単なる疲労か病気にすぎない。何の飾りもなくなる。裏切られることよりも胃の痛みに耐えることのほうが楽である。だから、ほんとうの友人がいないというよりも、血球数が少ないというほうがいいではないか。情念に駆られた人は、人のもち出す理屈といっしょに、鎮静剤をもつっぱねている。ぼくの言うこの方法は、まさに一石二鳥である。すばらしいとは言えないだろうか。

一九一三年八月十八日

を語るだろう。たいへん美しい物語を、ただし問題のほんとうの意味からは逸れているが。

スピノザがこう言っている。情念をもたない人間などはいないだろうが、ただ賢人の場合、その魂のなかで、幸福な思惟が厖大な拡がりをもっているので、情念はみんな、まったく片隅に追いやられて小さくなっている、と。スピノザのように難解な道をたどらなくとも、彼のように、好きな幸福を山のようにつくり出すことができる。音楽でもいい、絵画でもいい、会って話すことでもいい。こういうものはわれわれの憂鬱を比べようのないほど小さなものにしてしまう。社交界の人間は小さな儀礼に熱心なあまり肝臓の病気を忘れている。われわれは大事な仕事から、また有意な道から、書物から、友人たちから生きるすばらしさを少しも見つけていないことを恥ずべきであろう。われわれは価値のあるものをよしとしているにもかかわらず、それの探求を絶対法則として課していないのは間違いであろう。この間違いはよくあるものだが、その結果は深刻である。自分がほんとうに得たいと思うものを欲すること、これは往々にして、人生の極意でもある。

一九〇八年二月二十二日

考えすぎる。自分が、なぜよろこんだり、悲しんだりするのかを知ろうとする。そこで自分自身にたいしていらいらしている。よろこびも悲しみも自分の知っている理由では、うまく説明がつかないものだから。

ほんとうのところ、しあわせだとか、不幸だとかいう理由には価値がないのだ。からだと、からだの働きですべてが決まってくる。ビクともしない人間のからだが、毎日、躁状態から鬱状態へと、また鬱から躁へと変わっている。多くの場合、食事の仕方によって、また歩き方や注意力、本の読み方、天候によって。そこで君の機嫌がよくなったり悪くなったりする。まるで波のうえの小舟のように。ふつうの場合、そのニュアンスに多少の差があるだけだ。何かに専念している限り気にもとめないが、暇になると、あまでもないこうでもないとやり始める。ささいな理由がどっと出てきて、これが原因でこれが結果であると考え出す。妙なる精神（エスプリ）はいつも、悲しい時には悲しい理由を、陽気な時には陽気な理由をうまく見つけるものだ。同じ理由が、しばしば、両方の目的で使用されたりもする。からだを病んでいたパスカルは、星の数があまりに多いのですっかり驚いてしまった。彼が星を見ながら感じた高貴なめまいは、おそらく、知らないうちに冷えこんだためであろう。ほかの詩人だったら、もしその人が健康であれば、星にたいして女友だちのように語るだろう。二人とも光り輝く空についてたいへん美しい物語

なるほど、次の点はみとめよう。自分自身が不幸のなかにある時、ある心象（イマージュ）には爪や棘（とげ）があって、想起しただけでもわれわれのからだは苦痛をおぼえると思わないのは至難のわざだ。

しかし、憂鬱症といわれている人たちのことを考えてみる。あの人たちはどんな考えに対しても悲しい理由をちゃんと見つけてしまうだろう。何を言われても傷ついてしまう。彼らを憐れめば、侮辱されたと思い、救われがたい不幸のように思ってしまう。何も文句を言われないと、今度は自分にはもう友だちなどいないのだ、この世でひとりぼっちなのだと思いこむ。こうして、考えれば考えるほど病み患っているその不快感をかきたてるだけである。自分自身と問答しているうちに、自分が心の奥で信じこんでいる悲しみの理由によっていとも簡単に押し切られてしまう。それで彼らはただ、ほんとうの食通（グルメ）のように、悲しみの味を賞味しているだけだ。ところで、憂鬱症に陥った人たちはわれわれに、深い悲しみにとらわれた者の姿を誇張したかたちで示している。彼らについてはっきり言えること、すなわち彼らの悲しみは病気であることは、どんな人についても言えることである。痛みがますますひどくなるのは、おそらく、痛みについてあれこれ思惟をめぐらすからであろう。言うならば、痛い部分に手で触れているからだろう。

5 憂鬱

ついこの間、腎臓結石を病んでいて、かなりふさぎこんでいる友人に会った。この種の病気が人を悲しみに陥れるのは、誰ひとり知らぬ者はいない。彼にそれを言うと、彼も「そりゃ絶対そうだよ」と言っていた。そこから、ぼくはこんな結論をついに引き出してみた。「この病気が人を悲しみに陥れるのを知っているのだから、君は自分が悲しんでいることに驚いてはならない。そのことで機嫌を悪くすることは何もないのだ」。この見事な論理に彼は笑いころげた。これはかなり効いた。少し変わった言い方ではあるが、ぼくの言葉はそれでもやはり、重大なことを、しかも不幸に陥っている人がまず思わないことを言っているのは確かである。

深い悲しみはいつも、からだが病んでいることから出てくる。心の悲しみは病気でない限り、やがて平安が訪れる。思ってもみなかったようなかたちで。不幸を考えることでさえも、それがつらいというよりも驚きである。疲労やからだの中に何か結石ができたことで、思惟の働きが麻痺しない限り。そう言っても、人はたいてい、そうは思わない。不幸がつらいのは自分の不幸をどうしても考えてしまうからだと言い張っている。

6 情念について

情念よりも病気のほうが我慢しやすい。その理由はおそらく次のようなものではないか。人間の情念はわれわれが人間であるところから、われわれが考えるところから、すべて出てきているように見えること、またそれとともに、情念は有無をいわさぬ必然のしるしを帯びているからである。からだの怪我が痛むとき、われわれはそこに、われわれがある必然性のもとにあることをみとめる。すべてがまったく具合よく行っているのだ、ただ痛みを除いて。あるものが目の前にあらわれて、その形が、その音が、その匂いがわれわれの心に強い恐怖感や欲望をかきたてるとき、それでもまだわれわれは、そんなことはおかしなことだと言って、それから逃れることができる。そうして心身の均衡を取り戻すのだ。ところが、情念については、何ひとつ期待することができない。なぜなら、自分が好きだろうが嫌いだろうが、ものが目の前にあらわれる必要がないから。ものを想像することもできる、否、まるで詩をつくるように心の働きでそれをちがうものにすることもできる。なにをやるにしても、そこに行き着く。ぼくの考え方はソフィスト(詭弁家)のようだが、間違ってはいないと思う。ぼくはしばしば、知の明晰さにほ

このような狂気は激怒と同じで、そこから解放されるためには、こう自分に言ったらいいのだ。「悲しみなんて、病気にすぎない。だから、病気を我慢するように我慢したらいいのだ。そんなに、なぜ病気になったのかとか、あれこれ考えないで」。そこから、つぎつぎ出てくる辛辣なことばをけちらすのだ。心の悲しみをおなかの痛みのように考えるのだ。そうすれば、憂鬱はもう何ともいわない。まるで茫然自失状態で、ほとんど何も感じないようになる。もう何ごとをも責めない。耐えているだけだ。でも、からだは休めること。こうして、悲しみを相手にふさわしい戦いをすることになる。それは祈りというものが最後に行き着くところである。これはすばらしい発見である。森羅万象の前で、いっさいを知悉し、いっさいをすでに量っているこの叡知の前で、人間の理解しつくすことのできないこの荘厳の前で、奥底まで見通すことのできないこの正義の前で、敬虔な人間は、もうあれこれ思いをめぐらすのをやめる。誠実な思いから捧げられた祈りで、すぐに豊かなめぐみのもたらされなかったような祈りなど、およそ存在しない。激怒に打ち勝つのも大したものである。しかし人はまた、良識によっても、このような一種の想像力のアヘンを投与することによって、人間の不幸をあれこれ数え上げる愚かさからまぬがれることができる。

一九一一年二月六日

出し、一言いわれただけで、一目みただけで悪い運命だと思いこんでしまうのは情念の力、つまり内部の隷属によってなのだ。情念にとらわれた者は、自分を病人と判断することができないので、自分は呪われた者と思いこむ。この考えはどこまでもどこまでも伸びていき、自分自身を責めさいなむ。どこにも存在しないこの深い苦しみについて、いったい誰が説き明かしえようか。だから、果てしない、瞬間ごとに深刻となっていく苦難のパースペクティヴは、人をよろこんで死のところへおもむかせる。

そのことについては、多くの人が書いている。ストア派は恐れと怒りについて数々のみごとな論証を残している。しかし、デカルトが最初の人であろう。『情念論』のなかでデカルトは、その問題を正面からとらえて論じているのを誇りとさえしている。情念は、所詮われわれの思惟の一様態にすぎないものだが、にもかかわらずわれわれの身体のうちに行なわれる動きに依存していることを明らかにしたのである。同じ考えがくりかえしわれわれの脳裏に浮かんでくるのは、しかも夜静かな時にはきわめて激しい考えが浮かんでくるのは、血液の運動によって、つまり神経と脳のなかを行き来するあるふしぎな流体の運動によってである。このような肉体の動揺に、ふつうわれわれは気づかない。結果を知るだけだ。否、それでもまだわれわれは、情念のせいだと思っている。ほんとうは反対に、身体の運動が情念を養っているのである。そのことがよくわかれば、

んとうにはっとするのだ。人は感動してもそれほど苦しむことはない。すごい恐怖に襲われたら逃げ出すわけだが、その時はまず考えない、自分自身のことは。ところが、怖がったことを恥ずかしく思うと、怒りが出てくる、あるいは言い訳が出てくる。とりわけ、自分自身から見て恥ずかしいこと。だれもいない時、ことに、夜、他にこれといってやることのない時、感じた自身の恥。これはじつに耐えがたいものだ。なぜなら、その時は、言うならば、暇にまかせて何を期待することもなく恥を味わっているのだから。君が射った矢は一本残らず君の上に落ちてくる。自分自身が敵なのだ。情念にとらわれた者は自分は絶対病気ではないと思い、そして差し当たりうまくやっていけない理由など絶対何もないと思いこみ、そこからついにこう考える。「情念といったって、自分自身のことにすぎない。でも自分の力ではどうすることもできない」。

情念にはつねに激しい恐怖と悔恨とが伴う。それもぼくにはわかる。なぜなら、われわれはこう考えるからである。「なぜこんなに自己コントロールが下手なのだろうか。なぜこんなに同じ愚痴を性懲りもなく繰り返すのだろうか」。自分というのが恥ずかしく情けなくなる。同時に、すごく不安になる。こう考えるのだ。「自分の考え方そのものが毒されている。自分自身の立てる理屈が自分に楯をつく。自分の考え方を操っているこの魔力は何だろうか」と。魔法がここでは所を得ている。人びとが隠れた力を考え

7　恐れは病気だ

手相を読むことができた砲兵のことを思い出す。樵を生業としていた男だが、その野生の生活からものごとのしるしをすぐに読みとる力が身についたのである。たぶんだれかほかの魔術師にならって、自分も手のひらを観察しはじめたのだろう。ちょうどわれわれがその人の眼差しや顔色から相手の考えを知るのと同じように。クレール・シェンヌの森のなかで、ロウソク一本の明かりで、彼は自分の至聖所をこしらえて、その荘厳な異能を発揮していたのである。人の性格についてはよく当たっていたし、ことばはいつも慎重であった。それぞれの人の近い将来のことや遠い未来のことも告げていたが、けっして単純に笑い飛ばすことのできないものだった。そして後にそれに気づく機会があったことだが、予言の一つがほんとうに起こった。むろんぼく自身も、記憶に尾鰭をつけていたかもしれない。予言の的中なんて、自分にとってもおもしろかったものだから。こうして想像力と戯れたことで、あらためてもう一度警告をうけた。想像力から身を守るためにはいつも取っている慎重な態度を堅持せよということだ。その砲兵にもほかの誰にも、ぼくは自分の手相をみせたことはなかった。安易に信じてはならないとい

あらゆる反省の判断をしなくてもすむようになる。夢についても、脈絡のもっとよくついた夢であるさまざまな情念についても。われわれはここに、すべての人間が服従している外的必然をみとめるであろう。そして自分自身を責めたり呪ったりすることはもうしなくなる。「ぼくは悲しいのだ。目の前が真っ暗だ。でも、これにはいろいろな事件など何の関係もない。自分の理屈も関係がない。理屈をこねようとするのは身体なのだ。それはいわば胃の考えたことだ」と思うようになるだろう。

一九一一年五月九日

ところからくる。この病気は想像以外のなにものでもない。受験生が突然おなかが痛くなるのも同じだ。答えをまちがえるかもしれないという恐れが、ひまし油と同じように強力にはたらくのである。こういう例から、絶えず恐れの状態にあったらどんなことが起きるか想像するがいい。慎重さに対して慎重になるために、最後はこういう考えになるほうがいい。恐怖から生まれる心の動揺はおのずと病気を悪化させることになる。不眠症を恐れている人は、からだが眠る状態になっていないのだ。胃痛を怖がっている人は、からだが消化できる状態にないのだ。だから、病気をではなく、健康を、自己の身のうえに考えて想起するがよかろう。このような心の体操のよさは、細かな点までは、よくわかっていない。でも相手に礼儀と親切とをつくすしぐさは、健康とかかわりがあるのは断言できる。それは、心が健康にふさわしい動作をすること、それが健康のしるしである、という一種の定理による。患者にすっかり気に入られて、患者が自身の苦痛に関心をもつように仕向けるような医師は下手な医者であろう。ほんとうの医者は、反対に、患者に「どうですか、おからだの具合は？」と決まり文句を投ずる。でも、患者の答えなどもう聴いてはいない。

一九二二年三月五日

うことのもっとも強い意味は、神託にうかがおうとするな、ということだ。うかがおうものなら、すぐに人は少し信じてしまうから。神託の終焉はキリスト教による革命をしるすもので、画期的な出来事である。

タレース（前六二五頃―五四六頃。哲学の祖。イオニア学派の第一人者）やビアス（前五七〇没。ギリシャ七賢人のひとり）やデモクリトス（前四六〇頃―三七〇頃。原子論〔唯物論〕哲学者）など古代の有名な耆宿（きしゅく）大賢も、髪がうすくなったころには、血圧も思わしくなかっただろうが、彼らはそんなことなどまったく知らなかった。それもまたすごくいいことだった。テバイドの隠者たち（ローマ皇帝デキウスの迫害を逃れてエジプトの奥地に隠遁した初期のキリスト教徒たち）の状況など、もっとめぐまれていた。死を恐れるどころか、死を望んでいたので長寿の人生を生きたのである。不安と恐怖とを生理学的に、詳細に研究すれば、不安も恐怖も病気であって、しかも他のいろいろな病気に加わり、さらに病気の進行をはやめるのもわかるだろう。だから、自分が病気であると知る人は、しかも医師の託宣にしたがって、あらかじめそれを知っている者は、二重の意味で病気なのである。病気が怖いから食事療法や投薬を受けたりして病気とたたかうのはよくわかるが、いったい、恐怖心をいやしてくれる療法があるだろうか。薬があろうか。

高所でおそわれるめまいは、正真正銘の病気である。この病気の原因は、ある人がそこから落ちていくこと、彼が絶望的な動作で動き回っていることをわれわれが模倣する

よりもラム酒の方がずっと説得力がある。

そこからぼくはこう理解する。われわれの同胞はわれわれに対して大いなる力を有している。ただ彼らがいるというだけで、彼らの衝撃や情念のしるしをみるというだけで。同情や恐怖とか、怒りや涙は、ぼくが理知によって自分の見るものに興味を感ずるのを待っていない。おそろしい怪我を見ると、見た人の顔が変わる。そしてこの顔色の方が恐怖を告げて、見た人からさらにそれを見た人へと横隔膜において感動を与える。相手が何を見ているかを知らなくとも。だから、記述された出来事は、どんなに立派に記述されていても、この衝撃を受けた顔ほどには人の心を動かさない。顔は表現のタッチが直截で、迫真力があるのだ。だから、同情した人が自分のことと考え他人の位置に自分を置いてみるのだともし人が言うなら、同情を記述したことにはならないだろう。同情を経験した後にそう考えるようになっただけだ。同胞の苦しみを見ると、すぐにそれにつられて、自分のからだも苦しみはじめる。これは最初、言いようのない不安にかられる。そして人間は心のこの動きの弁明を自分自身に求める、まるで自分が病気にでもなったかのように。

なるほど、めまいを論理でもって説明することもできよう。深い穴の前に立つ人は、落ちるかもしれないと思うだろう。でも手すりにつかまっていれば、反対に、自分が落

8　想像力について

何かちょっとした不慮の事故があって、病院で顔の皮膚を縫ってもらう時、いろんな道具のなかに気付け薬として使うラム酒が一杯置いてある。ところで、ふつう、このラム酒を飲むのは患者ではなく、立ち会いの友人のほうだ。そのような処置を自分でよく考えて覚悟してきたわけでないので、顔面蒼白となって気を失ってしまうからだ。そこから、モラリストのことばとは逆に、われわれのなかには他人の苦痛に耐えるだけの力があるとは必ずしもいえないことがわかる。

この例はよく考えてみるだけの価値がある。そこにはわれわれの意見に左右されぬ種類の憐憫があるからだ。出血を目のあたりにすると、しかも皮膚が針に強く逆らっているのをじかに見たら、まるで自分自身の血を抑えるかのごとく、自分自身の皮膚をこわばらせるかのごとく、一種の拡散した恐怖感が生まれる。こうした想像力のなせるわざは、思惟の力ではどうしようもない。想像力はここでは思考力を伴わないからだ。叡知の教える道は明白で、それに従うのはまことにたやすい。皮膚を傷つけられたのは立ち会い人ではないから。でもこの論理は今起きていることにはまったく無力なのだ。それ

9　想像上の苦痛

想像力（イマジナシオン）という奴は、中国の死刑執行人よりももっと性（たち）がわるい。奴は恐怖の量を塩梅（あんばい）するのだから。われわれがグルメのように恐怖を味わうようにさせるのだ。〔人は二度死ぬことがないように〕ほんとうの大団円（カタストロフィ）が二度同じ点を襲うことはない。出会ったらお仕舞いである。カタストロフィの一瞬前まで、彼は災厄を考えぬときのわれわれと同じ状態であった。歩いていた人が自動車にひかれ、二十メートル飛ばされ即死した。ドラマは終わった。もう始めもなければ、続きもないのだ。続きが生まれるのは思念によってである。

だから、ぼくが今事故のことを考えたら、まちがった判断をしているのである。ぼくの判断は、いつもひかれる寸前の、だが決してひかれることのない人間の考えなのだ。その車が走ってくるのを思い浮かべる。現実において、ぼくがそんなものを見たら身をかわすだろう。でもひかれた人の立場で考えるから、身をかわさない。映画で自分のひかれるシーンを見ているようだ。しかもスローモーションで、ときどき一時停止させることもある。また、くりかえすことも。千回も死んで、まだ生きたままだ。パスカルが

ちることはないだろうとも思う。めまいは、それでもやはり、踵から頭のてっぺんまで駆けめぐる。想像力の最初のはたらきは、いつもからだの中にあらわれる。ある人がこんな夢をみたという話を聞いたことがある。夢のなかで彼は、ただちに死刑に処せられるというのだが、それが自分の死刑なのか、ほかの人の死刑だったのかわからなかった。そのことについて何かはっきりしたことを言うこともできなかった。ただ彼が感じたのは、頸椎の痛みだけであった。これはまったく想像力のなせるわざである。肉体から区別された魂は、いつも高邁で、感性ゆたかなものと予想したがるが、それは「何にでも興味をもつ想像力とは」正反対に、自己の利益をこまかく考えようとはほとんどしないもののように、ぼくには思われる。生きた人間の身体はより美しい。考えに引きずられて悩むが、行動することによってふっきれるのだ。むろん心の揺れがないわけではない。だが、本物の思惟が乗り越えねばならない問題は論理のそれではない。混乱の残りが思考を美しくする。隠喩とはこのような半神的な営為において人間の身体があかしするものである。

一九二三年二月二十日

いったい、青虫はどの塊で苦しんでいるというのか。

ある人が老いて子どもみたいになったり、ある友人がアルコール中毒になって友人の抜け殻のようになるのをみるのはつらいものである。なぜつらいかと言うと、彼らが今のままでも生きていてほしい気持ちと同時に、もうそれには戻れないのだが、昔の彼らであってほしいと思うからだ。自然はその道を容赦なく突き進んだ。幸いにしてその歩みは、やりなおしがきかない。新しい状態が出来上がるたびごとに、次の状態がまた可能となっている。君が一つの点に拾い集めるあの苦悶のすべては、時間の通った道の上に数珠のように一つ一つ繰られたものだ。今この瞬間の不幸こそ次の瞬間を担うのだ。老いた人間というのは、老いを苦しんでいる若者ではない。死んだ人間というのは、死んでいる生者ではない。[1]

死をうけとめることができるのは生きている人だけである。悲運の重圧をうけとめることができるのは幸福な人だけである。つまり、すべてを言ってしまえば、人間は自分の苦悩よりも他人の苦悩に対して敏感になっている。それは欺瞞でもなんでもないのだ。そこから人生についてまちがった判断を下してしまう。よく注意しないと、一生を台なしにしかねない。全力をもって、真の叡知をはたらかせて、実際の現在を考えねばならない。悲劇を演じようとしないで。

こう言った。病気とは、元気な人にとっては我慢のならないものだ。それというのも、彼がまさに元気だからだ、と。重大な病気になったら、おそらく、われわれはすっかり参ってしまうので、最後にはもう病気の症状以外のことは感じなくなるだろう。事実というものには、それがどんなに悪いことであろうとも、益となる一点がある。可能性のゲームを終わりにし、もう期待するものはない。事実はわれわれに、新しいパースペクティヴでとらえた新しい将来を示してくれる。病んでいる人というのは、きのうだったら不幸だとおそらく言っていたような取るに足らぬ状態でさえも、まるですばらしい幸福のように期待している。人間というのは、われわれが思っている以上に賢いものである。

現実の不幸は突然やってくる。まるで死刑執行人がやってくるようなものだ。髪を切られ、シャツを切られ、両手をしばられて、追い立てられる。その時間がすごく長く思われる。そのことを頭で考えているからだ。何度も思い浮かべているからだ。あの髪を切るハサミの音を聞こうとしたり、自分の腕に助手の手を感じようとするからだ。現実の問題としては、一つの印象が生まれたら、それまでの印象は消えてしまう。刑を待ち受ける側の切実な思いは、戦慄以外の何ものでもないだろう。輪切りになった青虫のようだ。青虫はずたずたに切られて苦しんでいるのではないかと人は思うわけだが、では

10 アルガン(1)

まったくつまらぬことがもとで、あたら一日を台なしにしてしまうことがある。たとえば、履いている靴がきつくて痛い。そんな時はもう何をやってもおもしろくない。頭がぼうっとしているのだ。なおすのは簡単だ。着物を脱ぐようにそんな不幸を全部取り去ればいい。そんなことはだれでもよく知っている。そのような不幸は、今そういう状態であっても、なぜそうなったかを知っているので深刻な事態とはならない。ピンの先にふれた乳飲み子は、たいへんな病気になったかのように、泣きさけぶ。なぜなのかも、どうしたらいいのかも知らないからだ。時には泣きすぎて悪くなり、もっと泣くだけだ。これがいわゆる気の病である。気の病というのもまた、正真正銘の病気なのだ。ただそれが気のもの(想像上のもの)だというのは、自分でその病気を飼っていながら、それを外的なもののせいにしているからである。泣くからいらいらしてくるわけだが、それはなにも乳飲み子に限ったわけではない。

機嫌がわるいのは病気だから、手のほどこしようがないと、よく言われている。だから、ぼくは最初に、ちょっと心のあり方を変えれば苦しみやいらだちがすぐになおる例

一九一〇年十二月十二日

訳注

（1）人間の死は、生物学的あるいは動物的な死をなす、有機的な個体性の解体とは別のものである。

叡知をもっている。倒れ方にもうまい倒れ方というのがあるものだ。酔っ払いには驚いている。うまく倒れようとはまったく思っていないのだから。消防夫には恐れ入っている。からだのトレーニングによって恐怖を感じることなく落ちる術を知っているのだから。

われわれはほほ笑みなど大したものではない、それで不機嫌がなおるというものでもないと思っている。だからひとつほほ笑みをやってみようなどとはしない。ところが、礼儀作法はしばしば、われわれをすっかり変えてしまう。ほほ笑むから、いんぎんな挨拶をするからだ。心理学者はその理由をよく知っている。ほほ笑みはあくびと同じように、からだの奥まで行きわたるからだ。のど、肺、心臓と次々にときほぐす。医者の薬箱のなかにもこれほど迅速にほどよく効くものはないだろう。ここでは想像力によってわれわれは苦痛をまぬがれ、ほっとする。この安堵感は想像力によって苦しむのと同じように、リアルなものである。また、お好きなように、という人が肩をすくめることがある。これもよく考えると、肺の空気を入れかえて、cœurを、まさにこの言葉のすべての意味において、穏やかなものにする。なぜなら、cœurというこの言葉にはたくさんの意味(心臓、胸、心、気持ち、やる気)があるけれども、心臓はただ一つしかないから。

を出したのである。だれでも知っているように、ふくらはぎが痙攣したら、どんなに我慢強い人でも悲鳴をあげる。でも地面にぴったり脚をつけて踏みしめたまえ。すぐになおるから。目のなかに小さな虫やゴミが入ってそれをこすったら、二時間も三時間もわずらわされる。しかし、手は使わないでじっと鼻の先を見つめたらいい。すぐに涙が出てきて楽になるから。この実に簡単な治療法をおぼえてから、ぼくは二十回以上もためしている。それがあかしているのは、自分の周りの人々や事物のせいにしないで、まずは自分自身に注意を向けるのが賢い道であるということだ。他の人びとをみると、時として不幸が好きで好きでたまらないような人がいるようだ。それを誇張したものがあるタイプの狂人にみられる。そこから、ある思いが、神秘的であると同時にサタン的な思いが生まれるのであろう。想像力のまやかしである。我が身を引っ掻いている人が深く考えてやっているわけがない。苦痛が好きでやっているわけがない。そうではなく、カッカして、イライラしてやっているから、長引いているのだ。ほんとうの原因を知らないで。馬から落ちるのではないかという恐怖は、ぎこちない、均衡を欠いた動きから生まれるのだ。それによって、落馬から救われると、自分では思いこんでいる。最悪なのは、このような動きをすると、馬のほうがおびえてしまうことだ。そこからぼくはスキタイ人みたいな結論を出す。馬に乗れる人はいっさいの叡知を、ほとんどいっさいの

11 医学

学者はこう言う。「私はたくさんの真理を知っている。知らないものについてもよく納得している。機械（マシーン）とはどんなものかわかる。マシーンとはナット一本がはずれただけで、全体がこわれてしまうものだ。それもほんのちょっとケアを怠ったり、二、三分注意をそらしていただけで。つまりいつもメカニックにしかるべき時にみてもらわなかったからである。だから私は「からだ」というさまざまな部分からなるこのマシーンの監督に自分の時間を割くことにしている。だからこのマシーンに何かこする音とかきしむ音が出始めたと感じたら、すぐメカニックにかかって悪いところを、悪いと思われるところを調べてもらうのだ。あの有名なデカルトの教えにしたがって、このような生き方をしているので、運命的出来事は別であるが、祖先から受け継いだこの器がもってくれるかぎり、自分の命を延ばせる自信がある。それが私の知恵である」。そうは言っていたものの、彼の人生は寂しいものだった。

読書家はこう言った。「ぼくは何でもすぐ信じた時代に人間の生活を複雑にした誤った思想をたくさん知っている。こうした誤りから、ぼくは重大な真理を学んだ。実は、

一九二三年九月十一日

訳注

（1）モリエールの喜劇『気で病む男』（一六七三）の主人公。

彼の丸薬からどんな効力を期待できるか。そもそも医学に何を希望できるか、ぼくはあまり知らない。医学に対して警戒すべき点はたくさん知っているけれど。ぼくはこう思っている。ぼくが自分自身だと言っているこのマシーンの中にどんな狂いを感じようとも、ぼくがもっともよく慰められる考えは、混乱が引き起こされているほとんどすべての原因は、自分自身を考えすぎるということ、自分自身を思い込みすぎるということだ。第一の、もっとも確実な治療方法は、したがって、胃や肝臓の痛みを感じても、足に魚の目ができているのと同じようにしか考えないことだ。少し皮膚の表皮が固くなっただけでも胃や肝臓の痛みと同じほど苦しむことがあるというのは、忍耐にすぐれた勇気を与えてくれる教えではないか」。

一九二二年三月二十三日

これについては学者たちもあまり考えていない。ぼくの読んだところでは、想像力こそ人間の営むこの世界を司っている者なのだ。なぜそうなのかを、あの偉大なデカルトは『情念論』のなかで十分に説明してくれた。一度不安に駆られると、たとえそれをうまく乗り越えたとしても、自分の腸に炎症を起こさずにはいないのだ。不意を突かれ驚愕すると、心臓の鼓動までもが変わってしまうのだ。だから、サラダの中にミミズがいたと考えただけで、私のからだはほんとうに吐き気をもよおす。こうしたばかげた考えは、本気にしなくてもぼくの心を深いところで、生命的生理的レヴェルで捕らえてしまい、血液や体液の流れを突然変えてしまう。それは自分の意思ではどうにもならない。ぼくの口を通って入ってくる見えざる敵は、どんな奴も、不機嫌になったり想像力に喚起されて夢をみるのと同じように、ぼくの心臓や胃にはたらきを及ぼしている。そこでまず第一に、できるかぎり自分に満足する必要がある。第二に、自分のからだを対象としたこの種の気遣いをやめねばならない。それは確かな結果として必ずすべての生命機能を狂わすことになるから。自分が呪われていると思ったが故に死んでしまった人間、そんな人びとはどんな民族の歴史のなかにもみられるのではないだろうか。当事者にそのことを意識させるだけで、呪いは大成功であると言えないか。はたして名医はぼくが自分自身に呪いをかけること以外何ができるか。名医の一言で心臓の鼓動が変わるとしたら、

よく言ったものだ。大きく息をしなければならないその瞬間に、想像力の働きで息が止まってしまうからだ。それから、怒りは正真正銘の病気なのだ。咳とまったく同じものだ。咳は典型的ないらだちとみなすことさえできる。なぜなら、咳が出るのは体調によるわけであるが、すぐに想像力が咳を待ち受け、否、咳を求めてさえいるから。自分のからだを引っかく人と同じように、痛みを激化させることによって痛みから解放されると愚かにも考えるからだ。動物もまたからだを引っかき、しまいには自分で傷をつけてしまうのはよく知っている。しかし、あえて言い切るならば、思考力だけによってからだを引っかき、そして直接情念のままに心臓を興奮させ、血液の波をあちこちに押しやることができるのは人間だけに与えられた危険な特権である。

情念の方はまだましである。のがれようと欲するから、のがれられないのだ。うまくやる方法は、思惟の長いまわり道を経るしかない。それはちょうど、かなりの賢者になると、名誉欲に陥らないために名誉など求めないようなものだ。ところが、不機嫌になると、われわれは束縛され、窒息させられ、息の根がとめられてしまう。それはわれわれが悲しくなるような体調に合わせて自らを処し、その悲しみを維持するように自らを処するというただそれだけのことからだ。退屈している人には、退屈を維持するにふさわしいような座り方、立ち上がり方、話し方がある。いらいらしている人はまた独特の

12　ほほ笑みたまえ

ぼくは不機嫌のことを言いたい。どんなに不機嫌になっているかということよりもむしろ、不機嫌からいったいどういうことが生まれるのかを言いたいのだ。われわれの病気はたいてい、礼儀正しさを忘れてしまったところから生まれているのだ、とぼくは信じている。ぼくの言うのは、「からだ」が「からだ」自身を疎んずるところ、無理強いするところから、という意味である。職業柄、動物をたくさんみていた〔獣医だった〕父は、動物はわれわれと同じ状況下にありながら、同じように無理な行為に及んでいるものの、ほとんど病気にはならないと言い、驚嘆していた。それは動物は不機嫌になるというのがないからだ。つまりわれわれのように思考のはたらきによって、いらいらしたり、疲れたり、うんざりしてしまうということがないのだ。たとえば、だれでも知っているように、われわれは眠たい時に眠れないものならば、われわれの思惟のはたらきはパニック状態となる。そしてこの不安にとらわれると、ほんとうの不眠状態に陥ってしまう。あるいはまた、最悪の事態を心配するため、不吉な空想にかられ、それによって不安をかき立て、病気の回復が遅れることもある。階段を見ただけで、胸がつまるとは

まれるのである。

一九二三年四月二十日

心の動かし方で自分を締めつけている。意気消沈した人は、からだの筋肉からできるかぎり力をぬいている、そう言ってよければ、馬を車のくびきからはずしているようなもので、これでは何かをはじめることで、今まさに必要な元気を出すマッサージを自分でするどころではない。

気分に逆らうのは判断力のなすべき仕事ではない。判断力ではどうにもならない。そうではなく、姿勢を変えて、適当な運動でも与えてみることが必要なのだ。なぜなら、われわれの中で、運動を伝える筋肉だけがわれわれの自由になる唯一の部分であるから。ほほ笑むことや肩をすくめることは、思いわずらっていることを遠ざける常套手段である。こんな実に簡単な運動によってたちまち内臓の血液循環が変わることを知るがよい。伸びをしたいと思えば伸びをすることができ、あくびも自分ですることができる。これは不安や焦燥から遠ざかるためのもっともいい体操である。ところが、いらいらしている人には無関心を真似ることなど思いもつかない。同じように、不眠症になやんでいる人の心には眠る真似をしようという考えなど浮かばないのだ。否、それどころではない。不機嫌という奴は、自分に自分の不機嫌を伝えるのだ。だからずっと不機嫌が続いて行く。それを克服するだけの知恵がないので、われわれは礼儀正しさに救いを求め、ほほ笑む義務を自らに課すのである。だからこそ、無関心な人たちのつき合いがあれほど好

算されないのだ。人間の苦悩はすべて、われわれがそれについてあれこれと思惟をめぐらしたがるか、それとも苦悩はまったく感じられないか、どちらかである。ほんの一瞬痛みを感じるだけで、すぐに忘れられてしまう苦痛なんて、いったい何なのか。歯の痛みでもわかるように、われわれが苦悩と考えるのは、それを予感し、待ち受け、現在の前後に若干の時間が延びているものだ。現在だけの苦しみなんて無にひとしい。われわれは痛みを苦しむことよりも痛みを恐れる気持ちの方が強い。

今ぼくが書いたことは、意識そのものの正確な分析にもとづいている。だからそれは、ほんとうの慰めとは何かという問題にふれている。ところが、想像力がだまっていない。恐怖をつくり出すのは想像力のしわざなのだ。それがわかるにはある種の経験がいるだろう。しかし、経験はまったくないわけではない。ある時ぼくは、劇場で、ちょっとした突然の恐怖から知らないうちに自分の席から十メートル以上も先に行っていたことがある。焦げついた匂いがして、だれかが逃げ出し、すぐにみんなが釣られて逃げ出しただけのことだった。はたして、このようなとほうもない人波にのみ込まれて、どこに行くのかもなぜなのかもわからないことほどおそろしいことがあるだろうか。ぼくにはどこに行くのかもなぜなのかもまったくわからなかった。その時も、そしてあとになって考えてみてもわからなかったのである。ただぼくはちがう場所にきていた。思案する必

13 事故

ぞっとする転落事故について、ちょっとの間思いめぐらしたことはだれでもあろう。大きな車の車輪が車道を踏みはずした。おそらく最初はかなりゆっくりと傾いたであろう。事故の遭難者たちは深淵の上で一瞬宙づりにされ、断末魔の叫びをあげた。こんな光景はだれでもかなり簡単に想像がつく。このような転落しはじめた時や衝突する直前の時を、夢の中で味わう人もいるだろう。しかし、そんなふうに想像できるのは、じっくり考えてみる時間があるからなのだ。事態を再現して、恐怖を味わっている。落ちていくのをやめて思いめぐらしているのだ。ある時、ある女性がぼくにこう言った。「わたしって、何でもすぐこわがってしまうのよ。それでもやっぱりわたしも死ななくてはならないのですね」。まことにありがたいことに、ことがらの勢いがわれわれをつかまえたなら、われわれに考えている暇などくれないのだ。瞬間と次の瞬間とを結びつけている鎖は切断されている。だから最大の苦しみも微細なちりにすぎない。恐怖感は催眠作用をもっている。クロロフォルムがわれわれを眠らせるのはきっと、思考作用のもっとも深い部分だけである。からだの諸器官は混乱し、右往左往している。その全体は計

んだ」。こうしてぼくは、地獄から逃げもどったあのエル（プラトンの『国家』に出てくる勇士の名）のような男のおかげで、想像上の苦痛から現実の苦痛に引きもどされた。そこからぼくは、最大の苦痛とはものごとを正しく考えることができないことではないかと思った。そう思ったからといって、突然の衝撃や頭の骨が砕ける音を想像しないですむというわけにはいかないのだ。苦痛がありのままに想像されることなどありえないのだ。これを知っただけでもすでに大したものである。

一九二三年八月二十二日

要がなかったのだから、思考がはたらく余地などまったくなかったのだ。予想も記憶も何もかも同時に欠けていた。だからもはや知覚もなければ感情さえもなかった。ただぼくに生じたのは、数秒間の睡眠状態だけである。

戦争に出かけていく夜のことだった。あの憂鬱な汽車のなかは、人びとのざわめきと、興奮したしゃべり声と異様なイマージュでみたされていて、ぼくは不快な思いになやまされていた。そこにはシャルルロワ（第一次大戦の戦場となったベルギーの都市）から逃げてきた脱走兵たちがいた。連中は恐怖を抱くだけの暇があったのだ。おまけに片隅には真っ青な死人同然の顔をし、頭に包帯を巻いた男がいた。こんな光景をみているので、語られているおそろしい戦闘場面にも迫力がこもっていた。話し手が言う、「奴らの攻撃といったら、まるで蟻みたいなものだった。撃っても撃ってもへこたれない」。みなの想像力は敗走のように混乱していた。うまい具合に、死人同然の男が口を出して、自分がアルザスにいた時、後頭部に砲弾の破片をくらってやられた時のいきさつを語ってくれた。この苦痛はもう想像的なものではなく、真実味があった。男は言った、「森にまぎれ込んでおれたちは走っていたんだ。おれは森からとび出した。ところが、そこから先のことはどう言ったらいいのかわからねえ。まるで大自然がおれを眠らせたとでも言おうか。目がさめたら病院のベッドの中さ。なんでも親指ぐらいもある破片を頭からぬき取ったと言われたも

つわるあのさまざまな思い出においても、一つひとつの瞬間は次に起こったことがらによって照らされている。だから明かあかと照らし出されて、海面にどっしりと静かに浮かんでいたあの船の姿は、その時にはたのもしい姿だった。それがあの人たちの思い出や夢のなかでは、またぼくの描くイマージュのなかでは、次を待っている恐怖の瞬間となってしまう。今やこの悲劇は、事情を知り尽くしていて、一刻一刻断末魔の苦しみを味わっている見物人のために展開している。しかし、悲劇の進行そのものの中には、こんな見物人は存在しない。ふり返って考えてみることなどありえないのだ。見ている光景が変わると印象も変わってしまう。もっと正確にいえば、じっと見られている光景など存在しないのだ。ただ予期されない知覚、意味のわからない、脈絡のない知覚があるだけだ。とりわけ、思考を押し流してしまう行為があるだけだ。一瞬ごとに思考が難破している。イマージュが一つひとつ現われては消えて行く。なまの出来事が悲劇を葬り去ってしまった。死んで行った人たちは何かを感じるどころではなかった。

感じることはふり返って考えてみることであり、思い出すことである。大小さまざまな出来事にぶつかって、だれでも同じことを経験しているはずである。はじめての出来事、予期せぬこと、急を要することなどが注意を占領している。だからどんな感情も生まれないのである。出来事そのものを正直に再構成しようとする人は、わけがわからず、

14 悲劇

あの難船（タイタニック号）で救われた人たちの心には、ぞっとするような思い出が残っている。舷窓に迫りくるあの氷の壁、あの刹那的なためらいと期待。次に、あの静かな海の上に明るく照らし出された船の巨体。それから、傾いていく船首。突然消えてしまった明かり。たちまち起こった千八百人の悲鳴。塔のようにそそり立って行く船尾と、万雷のようなひびきを立てて船首の方になだれ落ちて行くさまざまな機器。最後は、ほとんど渦も巻き起こさずに水中にすべり込んで行くあの巨大な柩。寂しく静まりかえっていた冷たい夜。そのあとの寒さと絶望。そしてようやくやってきた救助。これは夜々、一睡もせずにいくたびとなく見つづけた悲劇なのだ。そのときの思い出は今や脈絡がつき、どの光景にも悲劇的な意味があって、まるでよく出来た戯曲のシーンのようだ。

シェークスピアの『マクベス』のなかに、城館に朝がきて門番が夜明けの光とツバメとを眺めているシーンがある。淡々とした風景で、さわやかさと清らかさのあふれている光景である。だがわれわれには、犯行がすでに行なわれてしまったことがわかっている。悲劇としての恐怖感はここで最高にたかまってくる。これと同じように、難船にま

15　死について

一人の政治家（合衆国大統領ハーディング）の死がきっかけで、人びとが死について考えこんでいる。にわか神学者たちがいたるところに見える。だれもが自分のことをかえりみ、死という共通の条件を考えている。しかし、この考えはそれ自身、何を考えているのかわからぬあいまいなものだ。われわれは生きている自分についてしか考えることができない。そこでいらだってくる。このようなあいまいな、海のものとも山のものともつかない脅威に対して、われわれはどうすることもできないのだ。デカルトは優柔不断こそ最大のあやまちであると言った。さて、われわれはそのような状態に投げ込まれ、救いの道はどこにもない。首をくくろうとする人たちの方が、まだましな立場にある。釘も綱も自分で選ぶし、最後に足を浮かしてしまうまですべて自分の意志でやっている。それから、痛風患者が足のうまいおき方に気を使っているのと同じように、人間の状況というのは、どんなに悪い状態であっても、いくらかでもましな実際上の配慮や工夫をしてみたくなるものである。ところが、ぴんぴんしているのに死を考えている人間の状態というのは、どうみても滑稽である。明確な死の危険がないからだ。まったく規則をもたないで、や

どうなるのかもわからず、まるで夢のなかにいるようでしたと伝えようとするだろう。ところが、出来事を考えることによって今恐怖感が湧いてきて、物語は劇的なものとなってしまうのだ。病人を死ぬまでみとった時、深い悲しみにとらわれるのも同じことである。その時はただぼうっとしていて、瞬間瞬間の知覚や行動にすっかり心がうばわれている。たとえ恐怖や絶望のイマージュを他人に伝えているとしても、苦しんでいるのはその瞬間ではない。自分の苦労をあまりに長い間考えすぎた人たちが、相手に涙を流させるほど切実に語っている時でも、そう語ることで少しの安らぎを見出しているのである。

とりわけ、死んで行った人たちがどんな感情を抱いていたとしても、死はいっさいを消し去ってしまったのである。われわれが新聞を開く前に、あの人たちの責め苦は終わってしまった。苦しみはいやされていたのである。これはだれにでも親しい思想である。この考え方から思うに、人はほんとうのところ、死後の生を信じていないのだ。生き残った人たちの想像力のなかでは、死者たちは死への道を歩み続けているのである。

一九一二年四月二十四日

証法神学を救いうる唯一のものは戦争ということになるかもしれない。幻影を追い求めているあの人たちは、最後にはかならずわれわれを戦争へとみちびくことになる。なぜなら、恐怖をいやしてくれるものは、この世には現実の危険以外にないからである。

病気にかかった人を見たまえ。病気になることによって、自分は病気ではないかという恐怖から、いかにたちどころにいやされてしまうことか。われわれの敵はいつも想像上のものなのだ。なぜなら、想像上のものにはとらえどころが何もないから。仮定のことを相手にしていったい何ができるか。ある人が破産したとする。すぐになすべきこと、急を要することがいくつも出てくる。そうすることで彼は自分の生活をもとどおり無疵のままとりもどすのである。ところが、革命や為替相場の変動や証券の下落をただ想像しているだけで、自分は破産して零落しそうだと心配している人には、いったい何ができるか。本気になって何かをやろうとしているのか。どんな考えが頭に浮かんでも、すぐに反対の考えによって否定されてしまう。起こりそうなことは、際限なく出てくるからだ。こうして、不幸な事態はあとからあとから生じてきて、何ひとつ進展しない。彼のやることといったらなんでも始めの思いつきばかりで、しかもすぐやめたり、またちょろちょろやり始めたりしているだけだ。恐怖のなかには意味のない動揺のほかには何も存在しないとぼくは思う。そして考えこめばかならず恐怖がつのってくるものだと思

がて節度を超えてしまうこのつかの間の心の動揺、これこそまったく裸の情念である。ほかにもうすこしましなものがないのだったら、トランプ遊びでもいい、積極的に考える人は、さいわいにも明確な課題や取るべき決断やためらいを許さない時間的限界が与えられるのである。

人間には勇気がある。たまたまそうだというのではなく、本質においてそうだ。行動することはあえてやることなのだ。考えることはあえてやることなのだ。危険はどこにでもある。そんなことで人間はたじろぎはしない。死を求め、死に挑戦するのを見たまえ。ところが、人は死を待つことができない。自分の仕事をもたない人たちはみんな、すぐ戦いをいどむ。いらいらしているからだ。死にたいからではない。むしろ生きたいからである。戦争のほんとうの原因が少数の人たちの退屈にあることは間違いない。彼らはトランプ遊びのように、はっきりした危険がほしいのだ。否、自分から危険を求めて行き、意味づけたいのである。自分の手を使ってはたらいている人たちが平和愛好者であるのはけっして偶然ではない。彼らは瞬間ごとの勝利者なのだから。彼ら自身の人生は充実して、泰然自若としている。彼らは死を乗り越え続けている。そしてこれが、死を考えるほんとうの考え方である。兵士の頭のなかにあるのは、死をまぬがれ得ないというあの抽象的な状況ではなく、これはあぶない、あれはあぶないということだ。弁

16　心のしぐさ

どんなに俗っぽい人であっても、自分の不幸を演じさせたら、たちまち大芸術家となる。胸がしめつけられるというようまい言い方があるが、そんな場合、彼は腕で胸をますます締めつけ、すべての筋肉がたがいに引っぱり合うようなしぐさをするのを見たまえ。どんな敵も見えないのに、歯をくいしばり、胸を防禦し、拳骨をふりまわす。たとえこういう大げさなしぐさが外部に現われなくても、どっしりと動かない肉体の内部ではそういうしぐさの下書きがやはりあるので、そのためさらに強い効力が生じていることをよく知るがいい。時どき、眠れない時、同じ考えが、それもたいてい不愉快な考えがくり返しくり返し浮かんでくることに驚くことがある。そういう同じ考えを思い出させるのは、まずまちがいなく下書きされたしぐさである。心の領域の病気にも、また肉体の病気の初期症状にも同じく、リラックスさせることと体操とが必要なのだ。たいていの場合、この治療法だけで十分だろうとぼくは思う。ところが、だれもそんなことを考えないのだ。

礼儀作法の習慣はわれわれの考えにかなり強い影響力を及ぼしている。優しさや親切

う。人間は死を考えるやいなや死がこわくなるものだ。その通りなのだ。しかし、考えるだけで何もしなかったら、どんなことでもかならずこわくなる。思考がたんなる可能性の領域に迷い込めば、どんなことでもこわくなる。試験のことを考えただけで下痢をすることもある。内臓がこんなふうにもがくのを感じると、そこに何か焼きごてでもあてられているようについ思ってしまう。とんでもない。腹に火をつけるのは、何を考えているのかはっきりしないために生ずる優柔不断なのだ。

一九二三年八月十日

今みているのとはちがう知覚、ちがう夢が得られるように、頭をぐるぐるまわしている。気ままなしぐさで心配事を遠くへ投げ棄てて、指を鳴らしている。これはダンスの始まりのしぐさである。もしこの時、ダビデの竪琴が彼の心をとらえ、こういうしぐさに節度と柔和さとを与えて、すべての憤りやいらだちを遠ざけるならば、この憂鬱病患者はすぐに直ってしまうのだ。

ぼくは途方にくれている人間のしぐさが好きだ。首のうしろの髪をかくしぐさである。はたしてこのようなごまかしのしぐさには、何よりもおそろしいしぐさである石や槍を投げつけるしぐさをはぐらかし、だましてしまう力がある。ここで、人間の心を解放する演技が人を引き込んで夢中にする動作ときわめて近いのがわかる。数珠は、珠を数えることに人間の思考と指とをいっしょに忙しがらせる見事な発明である。しかし、賢者の心にある秘訣はもっとすぐれたものだ。意志は情念に対してはまったく無力であるが、運動に対しては直接の支配力をもっていることを見抜いているのである。いわゆるどうにもならないことをあきらめることよりも、ヴァイオリンを取って演奏する方が早道である。

一九二二年二月十六日

やよろこびのしぐさを演じるならば、憂鬱な気分も胃の痛みもかなりのところ直ってしまうものだ。こういうお辞儀をしたりほほ笑んだりするしぐさは、まったく反対の動き、つまり激怒、不信、憂鬱を不可能にしてしまうという利点がある。だから社交生活や訪問や儀式やお祝いがいつも好まれるのである。それは幸福を演じてみるチャンスなのだ。この種の喜劇はまちがいなくわれわれを悲劇から解放する。これは大したものである。

宗教の与えているしぐさは、医者も考えてみるだけの価値がある。なぜなら、ひざまずいたり、からだをかがめたり、また楽な姿勢にもどったりしながら、あの肉体は、諸器官を解放し、生命の機能をいちだんと高めているからである。「心おごりたるシカンブル人（フランク王クロヴィス）よ、頭を垂れよ」という言葉は、怒りや傲慢を直せと要求しているのではなく、まず黙って、目を休めて、柔和な心で生きることを求めているのである。こういう方法によって、性格のもつ粗暴なところはすべて消えてしまう。長期間そうなったり、永久にそうなったりするわけではない。なぜなら、そんなことはわれわれ人間の力では出来ないことだから。でもすぐに消えて、当分の間消えているのである。宗教の奇蹟というのはいわゆる奇蹟というほどのものではない。

ある人がどうやってしつこい考えを追い払っているのか見るのはいいことだ。肩をすくめ、胸を揺り動かし、まるでもつれた筋肉をほぐすようなしぐさをするのを見たまえ。

もって考えようとするのはやめたまえ。なぜなら、自分の理屈で自分自身の方が責め立てられることになるから。それよりもむしろ、今ではどこの学校でも教えているあの腕を上下に伸ばしたり左右にまわしたりする体操をやってみたまえ。その効果におどろくだろう。こうして、哲学の教師から体操の教師のところへ行くようになる。

ある飛行士がこんな話をしてくれた。草の上にねころんで、晴れ間を待ちながら、どうすることもできない危険をあれこれ考えていた時には、大変な恐怖にとらわれた。飛び立って、愛機を操作しはじめたら直ってしまった。この話を思い出したのは、有名なフォンク（一八九四－一九五三。フランスの飛行士）の冒険をいくつか読んでいる時だった。ある日フォンクは、砲を積んだ飛行機に乗って、高度四千メートルの上空にあったが、操縦がきかなくなって機体が降下しはじめていることに気づいた。原因をさがしているうちに、砲弾が一つ弾薬盆から落ちて、そのために何もかも動かなくなっていることがわかり、機体が降下しつづけるなかで、それをもとにもどし、機体を立てなおし、別に損害もなかった。今日でもまだ、この勇敢な男にとって、この数分間というのは、思い出す時でも夢みる時でも、恐怖でおののかざるをえない。しかし、思い浮かべながら恐怖を感じたのと同じように、当時恐怖を感じたと考える人がいたら、それはまちがっていると思う。人間のからだはやっかいなものだ。命令を受けなくなるやいなや自分が指揮官となるのだから。

17 体操

舞台に立つのを死ぬほどこわがっていたピアニストが、演奏しはじめるやいなやたちまち直ってしまうのをどう説明したらよいのか。その時はもう恐怖など考えていないのだというかもしれない。その通りなのだ。でもぼくは、恐怖の正体を仔細に考えて、ピアニストはあの指の柔らかい運びによって恐怖を揺り動かし、追い払ってしまうのだと理解したい。なぜなら、われわれのからだの中では、すべてがつながっているので、胸が締めつけられていたら、指はよく動かないから。柔らかさは、硬さと同じように、からだの全体に浸透して行く。だから、よく制御されたこのからだの中では、恐怖はもう存在しえない。ほんとうの歌やほんとうの雄弁もやはり心を落ち着かせるものだ。適度な運動がすべての筋肉に課されているからである。すばらしいことなのに、ほとんどだれも考えようとしないことがある。われわれが情念から解放されるのは思考のはたらきによってではない。むしろからだの運動がわれわれを解放するのだ。人は欲するようには考えないものだ。しかし、からだの動きが慣れてきて、筋肉が体操によって鍛えられ、柔らかくなると、欲する通りに動くようになる。不安になやまされている時は、理屈で

18 祈り

口を開いたままで「イ」という音を出そうと考えることは絶対できない。やってみたまえ。音を出さないで想像しているだけの「イ」は、「ア」のような音になるのがわかるであろう。この例からわかるように、想像力というのは、肉体の運動器官がそれと正反対の運動を実行している時にはそれほどの働きはしないものだ。この関係というのは身ぶりによって直接あかしされる。なぜなら、身ぶりは想像されている運動をすべて描き出してしまうから。もしぼくが怒っているとしたら、ぼくは拳骨を握っているはずだ。そんなことはだれでもよく知っている。しかし、そこから情念を制御する方法を引き出す人はほとんどいない。

宗教というものはすべて、おどろくほど現実的な知恵を含んでいる。たとえば、ある不幸な人が事実を認めまいとしてむだな骨折りをし、そのむだな努力のためにへとへとになり、不幸を倍加させている時、この反抗的運動に対処するのに、彼をひざまずかせ、両手で頭をかかえこませてしまう。その方が理屈で説得するよりもずっと効果がある。なぜなら、この体操——至言である——によって想像力が暴れまわるのを防ぎ、絶望や

しかしその代わり、同時に二つの態度を取ることはないように出来ている。一つの手は開いているか握っているか、どちらかのはずだ。手を開いてしまったら、握りしめた拳骨のなかにしまい込んであったいらいらした思いをすべて、出してやることになる。肩をすくめるだけで、胸郭のなかにつめ込んであった心配事は飛び去って行くにちがいない。ものを呑み込むのと咳をするのが同時にできないのも同じ道理である。ぼくがトローチの効能を説いた理由もそこにある。同じような方法でもって、うまくあくびが出れば、しゃっくりは直っている。しかし、どうやったらあくびが出るか。うまくあくびを出すためにはまずあくびを真似ることだ。伸びをしたり、あくびをするふりをしたりして。姿のみえない生き物が、ことわりもなくしゃっくりを与えてくるわけだが、この生き物もあくびの姿勢をとらされることになり、あくびをするだろう。しゃっくりにも、咳にも、心配事にもきく治療法である。しかし、十五分ごとにあくびをしなさいと命令する医者がどこにいるであろうか。

一九二二年三月十六日

情念のやわらぎを得、解放されるたびごとに、神の恵みの奇蹟をみていた。ひどくいらだっている人がひざまずき、柔和な心をもとめる。もちろん彼はやさしくなる、もしほんとうにひざまずくならば。つまり怒りを追い払う姿勢をとるならば。すると彼は、慈悲深い力が自分を悪から救い出してくれるのを感じたと語る。神学の展開がどんなに自然的なものであるかを見たまえ。もし彼の心が何ひとつ変わらなかったならば、すぐに助言者が現われて、あなたは心から求めなかったからだとか、ひざまずき方を知らなかったからだとか、自分の腹立ちをあまりにも好んでいたからだとか教えるであろう。神学者はこう言うだろう。ここで真にあかしされているのは、神々は正しいお方であり、人間の心をお読みになっている方であることだ、と。司祭も、信者に劣らずナイーヴな人であったのだ。人間は長い間情念の苦しみに耐えてきた。その原因は人間のからだの動きにあり、だから適当な体操こそ治療法であることに気がつかなかったからだ。姿勢や祭儀すなわち礼儀作法のすばらしい効能がわかったので、回心といわれるあの突然の気分の変化は、長い間奇蹟であったのだ。迷信の中身はいつも、おそらく、実際の結果を超自然的な原因によって説明することであろう。今でもまだ、情念の焔の中にある時、最高の教育を受けている人でさえも、自分がいちばんよく知っていることをなかなか信じようとしないのである。

一九一三年十二月二十四日

激怒の症状を一時的に停止させてしまうからである。

しかし、人間は情念に身をまかすやいなや驚くほど単純（ナイーヴ）で愚かな人となってしまう。こんな簡単な療法でさえなかなか信じないのだ。失礼なことをされた人は、まず侮辱を確認するためにいくつもいくつも理屈をこねる。事態をますます悪くする事情をさがし、それを見つける。先例をさがし、見つけるのだ。彼はこう言うだろう。おれが怒り出すのは当たり前だ、これだけの理由があるのだ、武装解除したり思いをやわらげるつもりは毛頭ないぞ、と。これが第一段階。続いて理性の番だ。なぜなら、人間というのは驚くほど哲学者なのだから。その人間がもっとも驚くことは、理性は情念に対して何ひとつすることができないということだ。「理性は毎日自分にそう言うのだが……」。これは誰しも言うことである。悲劇が本物となるためには、独白している主人公が自分を弁護するものをすべて語りつくさねばならない。このような人間の状況は懐疑論者たちによって明確に論じられたもので、それこそ論破できない宿命の観念に加勢することになる。なぜなら、懐疑論者は何かを発明したのではけっしてなかったのだから。もっとも古い神の観念は、もっとも洗練された観念と同じように、人間が自分を裁かれた者、断罪された者として感じるところからつねに出てきている。人類には長い幼年期があった。その間人間は、情念が夢と同じように、神々から出てきたものと信じていたのだ。だから、

た大きくあくびをするための最良の姿勢でもあるのだ。このことから、どんな心配事でも文字どおり、われわれの心臓を締めつけ、動作の下準備だけでたちまち胸郭に圧力がかかり、期待とは兄弟であるような不安の心を生み出してしまう理由がわかるであろう。なぜなら、われわれは待っているだけでも不安にかられるし、問題が取るに足らないことであっても同じであるから。この苦しい状態からすぐにいらだちが生じてくる。いらだちは自分自身に対する怒りであるから、何ひとつ楽にはならない。儀式というのは、このようなさまざまな拘束からなっており、拘束は服装のおかげでさらにひどくなり、また人から人へと伝染することによってもひどくなる。なぜなら、退屈さは広まるものだから。ところがまた、あくびも伝染性の儀式に対する伝染性の治療法なのだ。どうしてあくびが病気のようにうつるのかとふしぎに思っている人がいる。ぼくは、病気のようにうつるのはむしろ、事の重大性であり、緊張であり不安の色であると思う。あくびは反対に、生命の報復であり、いわば健康の回復のようなものである。あくびがうつるのは深刻な態度を放棄するからであり、何も気がかりがなくなったことを大げさに宣言するからのようだ。それは整列している人たちを解散させる合図のようなもので、だれもが待ち受けている合図なのだ。この気楽な気分が拒否されることはありえない。そこから、深刻な気分はふっ飛んで行く。

19　あくびの技術

犬が暖炉のそばであくびをしている。これは猟師たちに気がかりなことは明日にしなさいと言っているのだ。気どりもせずどんな礼儀もなしに、伸びをするあの生命力は、見ていてもすばらしいし、引き込まれ真似をしたくなる。周囲の人たちはみんな伸びをし、あくびをしたくなるはずだ。これが寝支度の開始となる。あくびは疲労のしるしではないのだ。あくびはむしろ、おなかに深々と空気を送り込むことによって、注意と論争に専念している精神に暇を出すことである。このような大変革(精神のはたらきをばっさり切ること)によって、自然(肉体)は自分が生きていることだけで満足して、考えることには倦き倦きしていることを知らせているのである。

だれでも知っているように、不意をつかれた時には、まさに息がとまるものである。この点について、生理学が与えている説明には、どんな疑念の余地もない。すなわち胸郭には防禦のための強い筋肉がついていて、これが動くとたちまち胸郭を締めつけ麻痺させてしまうのである。腕を高く上げる動作は、降伏の合図ということになっているが、胸郭を解放するいちばん有効な動作でもあるのは注目すべきである。しかし、これがま

20 気分

激昂の段階を追って行くと、自分のからだをひっかくことよりもすぐれた動作は何もない。それは自分の苦痛を自分の意志で選びとることである。自分で自分に復讐することでもある。子どもはまず最初にこのやり方を試みる。泣いているからもっと泣き出す。自分の怒りにいらだち、慰められてたまるかと誓うことで心が慰められる。つまり、すねているのだ。自分の愛する人びとを苦しめて、そしてその自分を罰するためにさらにその人たちを苦しめる。自分を罰するためにあの人たちを罰するのである。無知であることを恥じると、もう何も読まないと誓う。頑なに強情を張りとおす。いきりたって咳をする。思い出の中にまで侮辱をさがす。自分で針をとがらす。悲劇役者の巧みさで傷つき辱しめるようなことを、自分に向かって繰り返し独りごつ。最悪が真実だという原理ですべてを解釈する。自分が悪い奴だと断ずるために悪い人たちを想定する。信じていないのに試みて、失敗したあと言う、「それに賭けるところだった。これがおれの運なのさ」と。どこに行ってもいやな顔をしてみせ、また人をいやがる。人のいやがることに専心しているくせに、気に入ってもらえないことに驚いている。眠れないとむきに

笑いとすすり泣きも、あくびと同じ種類の解決法であるが、あくびよりもひかえ目で、抑えられている。そこには二つの思考、すなわち拘束しようとするものと解放しようとするものとの間の戦いが現われている。これに対し、あくびをすると、拘束するものであれ解放するものであれ、いっさいの思考が逃げ出してしまう。生きることの気安さがいっさいの思考を消し去っている。これもやはり犬のあくびなのだ。だれでも見たことがあるように、思考がもとで病気となる、神経症と呼ばれるこの種の病気のなかで、あくびが出ることはつねによい徴候なのである。しかしぼくは、あくびはあくびが知らせている眠りと同じように、すべての病気に効能があると思う。それはわれわれの思考がいつも病気の中で大きな役割をはたしているしるしである。これは自分の舌を噛みながら味わう苦痛を考えるならば、それほど驚かないであろう。この表現(噛む)の比喩的な意味からよくわかるように、「悔恨」とうまく形容された後悔は、損傷にまで及ぶのである。反対に、あくびにはどんな危険もない。

一九二三年四月二十四日

は一二〇。ストア派の哲学者）は言っている。そこから彼が言わんとするのは、何でもよろこびなさいというのではなく、とりわけ、ほんとうの希望はいっさいをリアルなよろこびとするということだ。ほんとうの希望は出来事を変えるからである。もし君が退屈な人に出会ったら、必ず彼は自分でも退屈しているのだが、まずほほ笑む必要がある。眠りたいと思ったら、眠りを信じたまえ。要するに、どんな人でもこの世の中に自分よりもおそろしい敵は見つからないのである。ぼくは冒頭で一種の狂人のすがたを書いた。しかし、狂人とはわれわれの誤った考えが拡大したものにほかならない。ほんのわずかな気分の動きのなかにも、被害妄想の縮図があるのだ。この種の狂気は、われわれの反応を司っている神経器官の知覚されない病変のせいであることを、ぼくもたしかに否定しない。あらゆる刺戟はついに己が道を穿つにいたるものだ。ただし、狂人のなかにわれわれが学ぶべきものがあると、ぼくは考えている。あのおそるべき思い違いを、彼らはわれわれに拡大して見せてくれる。まるでルーペで見るように。この気の毒な人たちは自問自答をくり返し、悲劇を独演している。それは呪文だ。そこにはいつも効能がある。しかし、それはなぜなのか知りたまえ。

一九二一年十二月二十一日

なって眠ろうとする。どんなよろこびでも疑う。どんなことにも憂鬱な顔をして文句をつける。自分の気分から不機嫌となる。そういう状態なのに、自分自身を評価する。「おれは臆病だ。不器用だ。もの忘れがひどい。年齢(とし)だ」と考える。自分ですっかり醜いすがたになって、自分の顔を鏡に見ている。これが気分の罠なのだ。

だからぼくは、「寒いな。身を切るようだ。これが健康にはいちばんだ」という人たちを軽蔑しないのである。なぜなら、これにまさる態度はないからだ。風が北東から吹いてくる時、両手をこすり合わせることは、二重の意味でよい。ここでは本能に生きることが知恵と同じ意味である。肉体の反応がわれわれによろこびを教えている。寒さに抵抗する方法はただ一つしかない。寒さをいいものだと考えることだ。よろこびの達人スピノザが言ったように、「からだが暖まったからよろこぶのではなく、私がよろこんでいるからからだが暖まるのだ」。したがって同じような考え方で、「うまく行ったからうれしいのではなく、自分がうれしいからうまく行ったのだ」といつも考えねばならない。どうしてもよろこびが欲しいというならば、まずよろこびを蓄えておきたまえ。いただく前に感謝したまえ。なぜなら、希望から求める理由が生まれ、吉兆から事が成就するのだから。だから、すべてのことがいい予感であり、吉兆である。「君がそれを欲するならば、カラスが君に告げているのはしあわせなのだ」とエピクテトス（五五頃―一二五あるい

香りが鼻につき我慢のならないことがある。花束や香水に対する気分は、いつも同じように感じるものではない。ほんのわずかな香りでもさぐり出してかぎつけ、これでは絶対頭が痛くなると断言する。この風景はよく見られる。煙が立てばむせて咳き込むように、何事でも絶対そうなると言うのだ。家庭の中のこういう暴君はだれでも見たことがある。不眠になやんでいる者は、始めから絶対眠れないと言うのだ。どんな小さな物音でも目がさめるのだと宣言している。音という音をすべて待ち受けて、家中のことに文句を言っているのである。そしてとうとう最後には、自分の重大な性格を見落してしまったかのように、今度は眠れたことに腹を立てているのである。あらゆることに対して過度なまでの自負心をもっている。すでにわれわれが見たように、トランプに負けることにさえも、である。

もの忘れがひどくなったとか、言葉が出てこなくなったとか思いはじめている人たちがいる。その証拠はどこにでもあるので、この大まじめな喜劇が時として悲劇となってしまう。ほんとうの病気とか、年齢の徴候とかは否定のしようがないものだ。しかし、医者はすでに以前から、病人が病気の徴候を自分でさがし、いとも簡単にみつけてしまうあのおそるべき「型にはまった考え方（エスプリ・ド・システム）」（個々の知識をまとまった全体と関連づける傾向）を指摘していた。このような誇大妄想から、ほとんどすべての情念が生まれている。また病気の大部分、とり

21　性格について

風向きや胃の具合で不機嫌になることはだれでもある。ドアをけっとばす者もいれば、意味のないことでは足蹴りとひとしい悪口を吐き出す人もいる。高貴な魂をもつ人は、このような偶発的なことなどとり合わず忘れてしまう。偶発的なことは、人のしわざであろうが自分のしわざであろうが、完全にゆるしてしまう。そんなことをあれこれ考えないからだ。ところが、ふつうの人の場合、不機嫌を是とし、気分通りにすることを言わば誓う、ある意味でそれを絶対的なものとしてしまう。こうして、自分で一つの性格をつくり上げている。ある日ある人に対して不機嫌な態度を見せたことから、その人が嫌いになってくる。このような状況で、自分をゆるすことは予想外に少ない。他人のことをゆるしたいと思うならば、そのことはしばしば第一条件となるものだ。ところが反対に、何か悔恨のようなものがあとからあとから湧いてきて、しばしば他人のあやまちを拡大してしまう。こうして、人はみんな、自分でつくり出した不機嫌をひきまわし、「おれはこういう人間なのだ」と言っている。この言い方はいつも自分の知らないことまでも言っている。

22 宿命

われわれが始めることのできるものは何もない。腕を伸ばすことさえもできない。神経や筋肉に命令をくだして始める人はだれもいない。運動がひとりでに始まるのだ。われわれの仕事は、運動にしたがって、できるだけうまくそれを仕上げることである。だから、ものを決定するのはわれわれではない。われわれはいつも方向を与えてやるだけだ。勢いのついている馬の首を向けなおす馭者のようなものだ。しかし、勢いづいている馬でなければつれて行くことができない。これが「出発」という意味である。馬はさっと緊張して逃げ去ろうとする。馭者はこの跳躍に方向を与えるのである。同様に、船も推進力がなければ、舵のいうことはきかない。要するに、なんとしても出発することが必要である。どこへ行くかを考えるのは、まず出発してからのことである。

いったいだれが、行く道を選んでから出発したか。ぼくはそれを尋ねる。だれも選択はしなかった。なぜなら、われわれはみんな、最初は子どもであるから。だれも選択はしなかった。みんな、まず行動したのだ。こうして、職業は天性と環境の結果である。だから、あれこれと考え込んでいる人はけっして決めることができない。理由や動機を

わけ精神的なものが生まれている。シャルコ（一八二五―九三。フランスの神経病学者）は病人が自分の症状について言っていることは何ひとつ信じようとしなかった。医者が病気だと思わなかったために消えて行った病気、あるいはほとんど消滅してしまった病気はきっといくつかあるはずである。

一時期有名だったフロイトの巧妙な学説がすでに信用を失っているのは、不安にかられた精神、スタンダールの言うとおり、想像力がすでに敵にまわってしまった精神には、何でも欲することを信じさせるのはあまりにやさしいことだからだ。この考え方の基礎にある性欲の問題はまさしく、人が言っているとおり重要な問題であり、そこにはだれもが知っているように、一種の野性的（ソヴァージュ）な詩があるが、そのことは問題外とする。医師の考えはけっして患者にとっていいものではない。それはだれでもよく知っている。あまり知られていないのは、患者の知らないはずのあの考えをすばやく見抜き、自分の考えにしてしまうことだ。これによって、どんなにすばらしい仮説であってもすぐに真実のものとみなされてしまう。ある部分の記憶だけが系統的にまとまって失われるというおそるべき記憶喪失症が報告されたのも、こうした事情からである。患者の心のなかにはあのおどろくべきエスプリ・ド・システムもまたあるということは、長い間忘れられていたのである。

一九二三年十二月四日

なことだ。なされてしまったことについては、それに安んじ得ることほどりっぱなものはなにもないし、それを繕えないほどみにくいものもない。ぼくには、好運に身を委ねるのは不運に身を委ねるよりもむずかしいように思われてならない。もし自分の揺りかごが妖精たちによって飾られたとしたら、気をつけたまえ。ミケランジェロのような男にあってぼくがすばらしいと思うのは、自然の賜物を手に取りなおして、容易な人生を困難な人生に変えて行くあの客気あふれる意志である。自分に満足することを知らないこの男は、彼自身の語るところによれば、学校へ行って何かを学ぼうとした時には髪が真っ白だったという。そのことは優柔不断な人たちに、いつだって、今こそ意志する時であることを教えている。最初の舵の動かし方で一航海のすべてが決まると言ったら、船乗りはきっと笑うだろう。ところが、子どもたちに信じ込ませようとしているのはそれなのだ。さいわいにして、子どもたちはほとんど聞いていない。もし子どもたちがb（ベー）aは「バ」といった具合に自分の一生を決める形而上学的観念をつくるようにでもなれば困ったことだ。こういう有害な観念は、幼い頃にはほとんど彼らを変えないが、もっとあとになって害となる。なぜなら、弱者の言い訳が弱者をつくるのだから。宿命とはメドゥーサ（ギリシャ神話。ゴルゴン（蛇の頭髪をもち、見る者を石に変えてしまう）三姉妹の怪物）の一つで唯一の可死的存在）の頭（こうべ）である。

一九二二年十二月十二日

穿鑿する学校の分析ほど滑稽なものは何もない。そんなものだから、文法の先生の匂いのしみ込んだ、抽象的な伝説によって、悪徳と美徳との間を選んでいるようなヘラクレス像を教えることになるのだ。だれも選んではいない。みんな歩き出している。どんな道もいい道なのだ。思うに、処世術とはなににもましてまず、自分とけんかをしないことである。自分が下した決心や今自分のやっている仕事において。自分とけんかをするのではなく、自分の決心や職業をりっぱにやってのけることだ。われわれは出来上がったこれらの選択、われわれ自身が選んだのではない選択の中に、宿命をみたがるものだが、これらの選択はわれわれを拘束するものではない。なぜなら、悪い運命などないから。どんな運命もそれをよいものにしようと欲するならば、よい運命となるのだ。自分自身の性質についてとやかく言うことほど自分の弱さをあかしているものは何もない。だれも選びとることはできない。天から与えられたものはじつに豊かなものだから、どんな大きな野心をもつ者にも満足を与える。必然を美徳とすることこそ、美しい仕事、偉大な仕事なのだ。

「ああ、どうしておれは学んでおかなかったのか」。これは怠け者の言い訳である。それなら学ぶがいい。学んだといっても、もう今やめてしまったならば、それは大したことではないと思う。過去を当てにするのは、過去を嘆くのとまったく同じように愚か

い」と彼は言った。眠らないばかりか、実際に事を行なうこともないだろう。取り除き、単純化し、抹消する必要がある。思うに、人間の本分とは、あらゆる種類の半睡半眠を眠りの中に葬り去ったことであろう。ほんとうに健康であるしるしとは、夢想にとどまらないで、すぐに眠りに入ることである。そして、目がさめることは、眠りを棄て去ることである。反対に、巫女の心は半分しか目覚めていず、もう一度夢を見直しているのである。

そういう風に生きることもできる。何も妨げるものはない。われわれは驚くほどものごとを予感するようにつくられている。この生きた肉体の構造をよく考えるならば、どんなに小さなしるしでもわれわれの中に入り、そこに刻印されるのがわかる。ある風の音は遥かかなたから嵐を告げている。たしかに、しるしに注意を払うのは悪いことではない。しかし、だからといって、ほんのわずかな変化に驚き飛び上がってはならない。ぼくは非常に大きな自動記録の気圧計をみたことがある。感度がすごくよくて、馬車が近くを走ったり、人間が歩いたりしただけで、その針が跳ねる始末だった。もしわれわれが印象のままになっていたら、そうなるだろう。太陽が回っていくに応じて、われわれの気分は変わるだろう。しかし、地球の王者、人間はこうしたものにいちいちつき合ってはいない。

23 巫女の心

あまり知られていないある哲学者が、注意深い受身の状態の一種、いうならば、われわれの思考がまるでポプラの葉のように世界のあらゆる力のままに動くといった状態を、巫女（みこ）の心と呼ぼうとしたことがある。それは聞き耳を立てている心のことだ。横たわり外からの衝撃に身を委ねている。すごくおびえている状態。シビュラ（巫女の名）の気持ちがよくわかる。その三脚の椅子や彼女の痙攣（けいれん）が。すべてのことに注意を向けていること、言い換えれば、あらゆることを恐れていること。この広大な宇宙のいっさいの音や動きを消し去ることのできない人たちを、ぼくはあわれだと思う。

時として芸術家は、すべてのことに、すべての色や音や暑さや寒さに耳傾けようとするそういう状況に自分からなりたいと思う。その時芸術家が驚くのは、自然の中に深くひたって、職業柄自然に依存しきっている農夫や船乗りが、こうした自然に全く気がついていないことである。こうしたことを振り落としてしまうように、肩をすくめるというみごとなしぐさがある。これは王者の身ぶりである。聖クリストフォロス（キリスト教伝承の伝説上の人物）が水を渡った時、波など眼中になかった。「人は霊でみたされていたら、眠らな

カッサンドラたちに気をつけたまえ。ほんとうの人間は、自己を揺り動かし未来をつくり出すのである。

一九一三年八月二十五日

臆病な人間は人中で、なんでも聞きとり、なんでも心にとどめ、なんでも意味づけようとする。すると、彼にとって会話はまったくばかげたもので、内容は支離滅裂になる。みんながその心に浮かんだことを勝手に言っているのと同じようなものだ。ところが、賢者はさまざまなしるしや話を刈り込む。腕のいい庭師のようなものだ。これは外に出た時にさらによいやり方だ。なぜなら、あらゆるものがわれわれに触れており、われわれを立ち止まらせるから。地平線はわれわれの目の前に、まるで壁のように立ちはだかっている。しかし、われわれはすべての事物をそれらの本来の場所にもどすのである。考えることはすべて、印象の殺戮である。

開墾である。ぼくは木の幹一本、枝一本が切られるのを見るだけで胸が痛む繊細な女性を知っているが、木こりがいなければ、藪や蛇や沼や熱病や餓えがすぐにまた現われるであろう。同じようにして、人はおのおの自分の気分を開墾する必要がある。自分の気分を否定すること、それはまさにものごとを軽々しく信じないことである。この世界は鉈鎌(なたがま)と斧(おの)によって開かれている。夢や幻を追い払ってできた並木道なのだ。まるで予兆への挑戦のようなものだ。反対に、自己に甘くなり、印象の前にぬかずくようになるやいなや、世界はわれわれに対して閉ざされたものとなる。世界があるとわかるのはその現前によってである。カッサンドラは不吉なことを告げている。横たわった魂である

つぎのような理屈で、避けられない未来という幻想をうちこわすのである。たとえば、ぼくが、ある日ある時間にある壁によって押しつぶされるだろうということを知るとする。それを知ることによって、まさに予言をはずすことができる。われわれの生き方というのはそういうものだ。一瞬一瞬われわれは不幸をまぬがれている。あらかじめ知っているからだ。したがって、われわれがあらかじめ知っている、しかもきわめて合理的に知っていることは起きないのだ。ぼくが道路の真ん中にいたら、ぼくはあの車にひかれるだろうが、ぼくはそんなところには立ちどまらない。

ではいったい、どこからあの運命を信じる心はやってくるのか。主な源泉は二つある。まず、恐怖を感じてしまい、待っていたかのように不幸に陥ることがしばしばある。もしぼくが車にひかれると予言されて、具合の悪い時にその考えが浮かんだら、それだけでぼくはしかるべき行動をとることができない。その瞬間にぼくに有用な考えは、自分の命を救うという考えで、そこからすぐ行動が出てくる。反対に、そこを動けないという考えは、同じメカニスムでぼくを麻痺させてしまう。これは一種のめまいであるが、これによって魔法使いたちは財産をつくりあげたのである。

また、われわれの情念や悪徳には、どんな道を通ってでも同じ目的を達成するというあの力がたしかにあると、いわねばならない。賭博師に「お前は賭博をやる」と予言し、

24　われわれの未来

すべてのものの関連や、原因と結果のつながりをよく知らないうちは、未来に押しつぶされる。夢や魔法使いの言葉によってわれわれの希望は抹殺されてしまう。前兆は至るところの街角にある。この観念は神学的なものである。家がつぶれて死ぬという予言を聞かされたある詩人の寓話は、だれでも知っている。詩人は屋外に出ていたが、神々は彼を見逃そうとはせず、一羽の鷲が彼のはげ頭を石だと思って、その上に一匹の亀を落としたのである。また、ライオンによって殺されるという神託を受けた王子の話もある。王子は家の中にいて女たちによって護衛されていたが、ライオンの姿を描いた壁掛けに腹を立てて、拳でたたき、さびた釘ですりむき、壊疽にかかって死んだ。

これらの物語から出た観念が、のちに神学者によって予定説として理論化されたものである。その内容はつぎの通りである。すべての人の運命は、その人が何をやろうとも定められている。まったく科学的な考え方ではない。なぜなら、このような宿命論は結局は「たとえ原因がどんなものであれ、生じる結果は同じものである」という結論だから。ところがわれわれは、原因がちがえば結果もちがうことを知っている。われわれは

25 予言

運勢を知るために占い師に手相を見てもらった人を知っている。彼の話だと、いたずらにしてみただけで、信じなどしていないというが、もしぼくが相談を受けたなら、やめさせただろう。なぜなら、それは危険な遊びであるから。まだなんにも聞いてない時なら、信じないのはいとも簡単である。その時は信じることは何もないのだから。おそらくだれだって信じまい。懐疑的な態度をとることは最初はやさしいが、やがて至難となる。占い師たちもそのことはよく知っている。「信じておられないのなら、何をご心配なさるのですか」と誘う。これが罠なのだ。ぼくとしては信じるのを心配する。なぜなら、彼がどんなことを言い出すのか知らないから。

たぶん占い師は自分でも信じていたのだろう。ちょっと笑わせたいぐらいのつもりなら、予測できるありきたりの出来事を、あいまいな形で言うだろうから。「途中困ったことになり、時々失敗しますが、大したことはありません。最後にはうまく行きます。敵もできますが、いつかはあなたが正しいとわかってくれます。その間、あなたの友人の変わらぬ気持ちがあなたを慰めてくれるでしょう。今、気になっておられることにつ

守銭奴に「お前はお金をためる」と予言し、野心家に「お前は策を弄し求める」と予言することは簡単だ。魔法使いでなくとも、自分自身で一種の運命に陥って、「おれはこういう奴なのだ。どうすることもできない」と言っている。それもまた、めまいで、これによっても予言を成功させる。もし自分のまわりで起きる絶えざる変化をよく知り、もろもろの小さな原因の多様性とその絶えざる開花を知るならば、自分で運命をつくり出すようなことはなくなるだろう。ルサージュ（一六六八―一七四七。フランスの作家）の『ジル・ブラース』を読みたまえ。硬い本ではないが、好運も不運も当てにせず、底荷を棄てて、風向きにしたがうべきであることを教わるであろう。われわれのあやまちは、われわれよりも先に消え去るのだ。それをミイラにして保存するのはやめよう。

一九一一年八月二十八日

どんなに勇気のある人でも結果を見てからという気持ちになるだろう。われわれの不安というのは、だれでも知っているとおり、破局そのものと同じようにわれわれを苦しめるものである。二人の予言者がお互い知らずに、同じことを予言することだってある。こういう一致にもかかわらず、あなたの知性の許す以上に、あなたを不安にしないなら、ぼくはあなたに脱帽する。

ぼくの考えをいうと、未来は考えないで、目の前のことだけを見ている方が好きだ。ぼくは占い師に自分の手相を見せに行かないばかりでなく、事物の本性のなかに未来を読もうともしない。なぜなら、われわれがどんなに物知りになり得るとしても、われわれの目がそう遠くまで届くとは思わないから。だれの身に起ころうと重要な出来事はすべて予測を超えていて、予見できないものだと知った。好奇心がなおったとしても、おそらくまだ用意周到の慎重さをなおす必要がある。

一九〇八年四月十四日

いては、近く手紙を受け取るでしょう云々……」。こうして、だれにも迷惑とならないような話が長々と続くことになる。

しかし、もし占い師が自分を本物の占い師だとみているならば、おそろしい不幸をあなたに告げることもできるのだ。強靱な精神をもっているあなたは笑うだろう。でも、占い師の言ったことが心の中にのこっていて、とりとめのない思いや夢の中で不意にあらわれてきて、あなたの心をほんの少しかき乱し、ついには言われた言葉が当てはまりそうな出来事が起こってしまうというのは、やはり本当なのである。

ある時、手相を見てもらった占い師から、こう言われた若い娘を知っている。「ご結婚なさって、お子さんができますが、亡くなります」。こういう予言は、最初の道のりのあいだは心の重荷とはならない。でも、時がたって結婚し、最近子どもができた。すると、予言はもう前よりは心の重荷になっているのだ。子どもが病気にでもかかると、いまわしい言葉が母親の耳に教会の鐘のように鳴り響くであろう。おそらく昔は、彼女は占い師をばかにしていた。占い師の復讐はみごとなものである。

この世ではどんな出来事が起こるかわからない。だから、どんな強靱な判断力をも揺るがすような偶然の一致も起こる。あなたは不気味だが起こりそうもない予言を笑っている。でも、その予言が一部分でも成就したら、もう笑わないだろう。そうなったら、

よろこびもない。なぜなら、周りの事物や人びとが不幸な人間を考慮しないことはあまりに明白だから。そういう人の考えは、したがって、このごろの厳しい季節の木の葉のように、風に吹かれて飛んでいく。自分の外に弁解の口実をもとめる人たちはけっして満足しない。一方、自分の犯したあやまちを直視して、「おれはじつにばかだった」という人たちは力強い自分を見出し、彼らが消化したこの経験をよろこんでいるのだ。ぼくはこのことには感心している。

経験には二種類ある。心が重くなるものと心が軽やかになるものである。陽気な猟師と陰気な猟師のように。陰気な猟師はうさぎに逃げられると、「これがおれの運さ」と言い、そしてすぐに「ちくしょう。おれだけがこんな目にあう」と言う。陽気な猟師はうさぎの狡猾さに感心する。なぜなら、なにもうさぎは好き好んで鍋に駆け込むわけでもないことはよくわかっているから。ことわざの中にはこのような男らしい知恵がいっぱいある。ぼくの祖母は、雲雀（ひばり）は焼き鳥になって落ちてはこないと言ったが、ここにはたしかに深い意味がある。床の敷き方で寝心地が決まる（自業自得、身から出た錆の意）。「音楽が好きになりたいなあ」と愚か者は言う。しかし、音楽をやってみなければだめだ。それがどこかにあるのではない。

すべてのものがわれわれには障害である。もっと正確にいえば、すべてのものは無関

26　ヘラクレス

人間に苦境を脱出する力があるとしたら、人間自身の意志の中だけだ。この観念は宗教や奇蹟や不幸と同じくらい古いものである。その代わり、その本質上、意志が打ち負かされるのといっしょに放棄される観念でもある。なぜなら、魂の力は結果によってあかしされるものだから。ヘラクレスはこの種の証明を自分自身に与え続け、とうとう最後には自分は奴隷だと思うに至ったのだ。しかし彼はみじめに生きるよりは華々しく死のうとこの時決心したのである。この神話ほど美しい神話はない。外部の力に打ち勝つことを学ぶために、ぼくは子どもたちにヘラクレスの業を暗誦させたい。なぜなら、それこそが生きるということであり、もう一つの道、怯懦の道を選ぶことはだらだらと死に向かって歩いているにすぎないから。

ぼくは、障害に打ち勝つことを考えている少年が、そして曲がり角をまちがった時にはまず、「これはぼくのあやまちだ」と言って、自分の犯したあやまちをさがし、心から自分の胸を打つような少年が好きだ。周りの事物や人びとの中にいつも言い訳をさがしている人間の姿をしたロボットなど、どうしようもないではないか。そこにはどんな

27 欲すること

「葉が出てきた。もうすぐ、小さな緑の毛虫ハシバミハムシが楡(にれ)の葉について食ってしまうだろう。木は肺を取られたようなものだ。見たまえ。息がとまらないように、木は新しい葉を出し、もう一度春を迎えるのだ。しかし、そういう努力で木は力をすべて使い果たしてしまう。ごらんなさい。一年か二年たつと、新しい葉が出なくなって、枯れてしまう」。

ある木の好きな友人が、彼の庭を一緒に歩いている時、こんなことをこぼしていた。彼は樹齢百年の楡の木を指して、近いうちに寿命がつきるだろうと言った。ぼくは彼に、「戦わなければだめだ。この小さな毛虫にはそんなに力があるわけがない。一匹殺せるなら、百匹でも千匹でも殺せるよ」と言った。

「千匹ばかりの毛虫がなんだい。何百万といるんだぜ。そんなこと考えない方がいい」と答えた。

ぼくは言った。「でも、君にはお金がある。お金があれば人をやとって仕事ができる。十人が十日働けば、千匹以上の毛虫を殺すことができる。これだけ立派な木を生かして

心であり、何のかかわりもないのだ。大地の表面は人間の営みがなければ藪と疫病になる。敵でもないが、味方でもないのだ。人間の味方をしてくれるのは人間の営みだけである。希望があるから、不安が生まれるのだ。だから、始めたまたまうまく行くというのは、たいへんまずい出発である。神々を讃える者がやがて神々を呪うであろう。区長や教会の守衛に好感をもつ新郎新婦たちのように。新郎新婦たちは教会の小使がどんな顔をしてロウソクをふき消すのか見なかったのである。ある日ぼくは、ある香水店の売り子のほほえみに気がついた。彼女は扉を閉めると、そのほほえみもぴったりと閉ざした。商人が店の鎧戸を閉めるのを見るのと同じように、見事な光景である。外の物なり人なりにわれわれが無関心になり、その引力の固有の法則を明かすやいなや、われわれは人間の仕事に返る。ある存在がわれわれに好意を約束するやいなや、われわれの認識能力はすぐに停止し、期待すること以外の力は働かなくなる。存在はみな、そのような前兆や反映をとおして見る時よりも、鎧戸の背後にある豊かな在り方の中でみる時の方が、はるかに美しく、はるかに友好的なものである。

精力的な人たちは、さまざまな相違や多様性を好むことを、ぼくは知った。真の平和は力と力の間にある。

一九二二年十一月八日

図太さにぼくはまいった。十年も前のことだ。きっと彼はその穴をあけ、ほかにもたくさんあけたであろう。毛虫から学ぶべきではないか。楡の木からみれば、毛虫の一匹ぐらい物の数ではない。しかし、こうしてほんのわずかずつ噛みつくのが積もり積もって、森をひとつ食いつくしてしまうのだ。小さな努力を信じて、毛虫にたいしてこちらも毛虫になって戦わねばならない。無数の原因が君の味方をしている。それがなかったら、楡の木も存在しないだろう。運命とは移り気なものだ。指先の一はじきでもって新しい世界が出来上がる。どんな小さな努力でも、それをすることで、無限の結果が生まれてくる。これらの楡の木を植えた人は、人生の短さなどをあれこれ考えたりしなかった。彼のように、自分の足もとだけをみて、行動を開始したまえ。そうすれば、楡の木を救うことになる」。

一九〇九年五月五日

おくために、数百フランのお金をつぎ込んでみないか」。

「毛虫が多すぎる。でも、職人が足りない。高い枝にどうやってとどかせるのだ。枝おろしの職人が必要だ。この土地にはぼくの知っている職人は二人しかいない」。

「二人いれば、立派なものだ。彼らに高い枝を切ってもらうのだ。腕の劣るほかの連中は梯子を使う。もし全部の木を救えないとしても、少なくとも二、三本は救えるだろう」。

最後に、言った。「勇気がないんだ。自分がどうするかわかっている。しばらくの間どこかに行ってるだろう。毛虫に食われるところを見たくないから」。

ぼくは答えた。「想像力のはたらきはすごいものだ。君はもう戦う前から逃げている。自分の手の及ばないところは見ない方がいい。仕事のとほうもなさと人間の弱さを考えたなら、人は何もできない。したがって、まず行動し、自分のやることだけを考えるべきだ。あの石工を見たまえ。彼は落ち着いてハンドルをまわしている。大きな石はほんのわずか動くだけだ。それでもやがて家は出来上がるし、子どもたちが階段でとびまわるようになる。ある時ぼくは、厚さ十五センチもある鋼の壁に穴をあけようとしている一人の職人が、そこに座って曲り柄錐を扱っているところを見て感心した。口笛を吹きながら錐をまわしているのだ。鋼鉄のこまかいくずが雪のように舞っていた。この男の

と言っている怠慢な人びとを、ぼくはたくさん知っている。彼らはほんとうは静かにしておいてもらいたいのだ。そして実際そうなっている。だから、彼らは自分で思い込んでいるほど不幸ではない。ばか者とは、鳶のように、一攫千金をねらって、二日間に突然十個所も奔走する人たちのことである。ろくに準備をせず、やたらに飛びまわったところで何ひとつ期待できるものはない。たとえば、爪で金庫をあけようとした有能な人間を、ぼくは何人も知っている。そこから人はよく、世の中はまちがっているという。そう考えるのが、ほんとうはまちがっているのだ。われわれの社会は、求めようとしない者には何ひとつ与えない。辛抱強く、途中で放棄しないで求めようとしない者には、とぼくは言いたい。そういう社会のあり方は正しいものだ。なぜなら、知識や才能がすべてではないから。政治をわかってはいるのだが、政治の職業の垢がどうも好きになれないという——どんな職業にもそれはあるが——何も本気になって求めようとしない人たちもいる。知識や判断力があっても、仕事がきらいだったら、何にもならないだろう。バレス（一八六二—一九二三。フランスの小説家、評論家、政治家）はよく人と会い、推薦文を書き、記憶した。彼が偉大な政治家にふさわしかったかどうか知らないが、でもきっと彼は仕事が好きだった。

要するに、豊かになりたいと欲すれば、だれでもそうなれるのだ。そういっても、金持ちになりたいと夢みてそれができない人たちは承知しない。彼らは山を眺めた。でも

28　人はみな、己が欲するものを得る

人はみな、己が欲するものを得る。若者はそのことをまちがって考えている。マナ（奇蹟の食物すなわち饒倖）を望んで待つことしか知らないからだ。はたしてマナはひとりでにころげ込んではこないものだ。望んでいるものは何でも、人を待っている山のようなもので、とり逃がすこともない。しかし、よじ登らねばならない。ぼくの知るかぎりでは、たしかな足どりで出発した野心家はだれでも、目的を達成している、それもぼくの予想よりも早く達成している。彼らはたしかに、有益なことはすぐに行動に移したし、ためになると判断した人たちとは定期的に必ず会っていたし、また心地いいだけのあのむだなことは疎んじていた。そして最後に、必要とあれば、お世辞をいうこともあったのだ。ぼくはそれを咎めたりはしない。好みの問題だから。ただし、あなたに出世の道を開いてくれそうな人間に、不愉快な真実をあえて口に出す時には、自分は出世したかったなどとは言わない方がいい。鳥になった夢をみることがあるように、あなたは出世した夢をみたのだ。まるで人々に面会する苦労もせず、また何ひとつ準備しないで、大臣となった夢のようなものである。「今におれを迎えにくるさ。おれは指一本動かさなくとも」

ねなければならない。そうしないと、踏み出す一歩一歩を気にとめないで登ることになる。ところが、すべての石がよいわけではなく、重力から解放されることだってありえない。破産というのは至言である。なぜなら、損失は商人とは切っても切れないものであり、いつも彼をひきつける引力だから。このもう一つの重力を感じない者は、むだ骨を折る。

一九二四年九月二十一日

山の方は彼らを待っているのだ。どんな利益もそうであるが、お金を得るためにはまず忠実でなければならない。ただお金が必要だから金儲けがしたいと思っている人が多い。しかし、ただ必要だけで求めている人のところにはお金はたまらない。財産をつくっている人は、何事につけても儲けることを考えたのだ。しかし、友だちづき合いのように気分よく、自分の趣味や気まぐれのままに、楽々と、鷹揚にさえもやれる恰好のいい商売を求める人は、焼けた舗道に降った雨のようにお金が消えてしまう。厳しさが必要なのだ。勇気が必要なのだ。結局、かつての騎士たちのように、困難のなかで自分の真価をあかしすることである。水銀が金とたちまち結合するのと同じように、毎日毎時間かせいでいる人のところにはたちまち福がもたらされる。しかし、拝金主義者には裁きがくだされる。使いたいと思っている者にはお金はたまらない。当然のことだ。なぜなら、彼の望んでいるのはお金を使うことであって、儲けることではないから。ぼくは、道楽で、いわば健康のために種蒔きをしていた素人百姓を知っている。彼は大きな損をしなければそれでいいと思っていた。しかし、こういう均衡はうまく行かないものだ。ものの見事に彼は財産を使い果たした。老人の欲張り、乞食の欲張りさえあるが、これはマニアである。しかし、商人の吝嗇は職業そのものから出てきている。儲けたいと思うなら、すぐにその手段をも欲しなければならない。すなわち小さな利益をいくつも積み重

くだし、成功だとか失敗だとか言っているが、仕事と取り組んでいる人間は、成功だろうが失敗だろうが、ねずみが穴を掘るのと同じように、いつも自分のからだだけの穴をつくっている。よく見たまえ。彼は欲するところを行なったのである。

「青春が追いもとめるものを、老年は豊かに得ている」。ゲーテはこのことわざを、彼の回想録の冒頭に引用している。ゲーテという男は、あらゆる出来事を自分自身のものに仕上げるあの強靱な精神の見事な例である。だれでもゲーテというわけではない。なるほど。でも、だれでも自分自身なのだ。押された刻印は美しくないにせよ、彼はそれを至るところに残す。彼の欲するところはそう高いものではない。しかし、欲するものは手に入れているのだ。この男はゲーテでもない。だからゲーテになりたいとも思わなかった。このような鰐（わに）のような不屈の精神を、だれにもましてよく感得したスピノザは、「人間は馬の完全性を必要としない」と言った。同様に、ゲーテの完全性を持ってもだれにもそれを役立てる術がない。しかし、商人はどこにいても、廃墟の上でも、売買をし、手形仲買人は金を貸し、詩人は歌い、怠慢な者は眠る。あれがない、これがないと不満をいう人が多い。しかし、その原因はいつも、彼らが本気になってそれを求めなかったからである。田舎に引っこんでしまったあの大佐は、できることなら将軍になりたかった。もしぼくが彼の生涯を調べたら、彼はなすべきことがあったのに、やらな

29　運命について

「運命はわれわれを引き廻し愚弄する」とヴォルテールは言った。あれほど見事に自分自身であり続けた男のこの言葉に、ぼくは驚くのである。外的必然は手荒な手段を使ってやってくる。石や砲弾が飛んできたら、デカルトだって粉砕されるのは明白である。こういう力は一瞬のうちにわれわれを一人残らず消し去ることができる。しかし、人間をいとも簡単に殺す出来事も、人間を変えることができない。個人がいかに自分自身の目的を達成し、どんなチャンスものがさないことに、ぼくは感服する。犬が鶏を食ってそれを自分の肉や脂肪とするのと同じように、個人もまた出来事を消化してしまう。このねばり強い意志すなわち固有の強靱な精神によって、何が起こるかわからない万物の変転のなかで、必ずついには道を見つけるのである。強靱な人間がさすがだと思われるのは、どんなものにでも自分の刻印をしるしていることだ。この力は人が思うよりは珍しくないのである。人間にとってすべてのことが着物のようだ。折り目筋目がつくのは体型や動作からである。机や仕事場や部屋や家などは人の手によってすみやかに整頓され、また散らかされる。大小の問題が相次いで起こると、われわれは外から見て判断を

瓦が当たり死んだ）を殺したあの偶然の瓦との間には「運命」という呼び名以外に何も共通するものはない。この点では、ある賢者がぼくに説明してくれたところでは、カルヴァンの予定説は自由そのものと似ていないこともない。

一九二三年十月三日

かった、やろうと欲しなかった点をいくつか見つけるであろう。彼には将軍になろうとする意志がなかったことを、ぼくは彼に証明できるだろう。

十分な手だてをもちながら、つまらない収入の乏しいポストにしかつけなかった人たちを知っている。彼らはいったい何を望んでいたのだろうか。歯に衣を着せない率直な発言か？　彼らはそれをなし得ている。人にへつらわないことか？　彼らは人にへつらったことはないし、今もへつらわない。判断をくだしたり、忠告を与えたり、拒否する時に発揮される能力か？　彼らはそれをなし得ている。彼にはお金がないのか？　しかし彼はいつもお金を軽蔑していたではないか。お金はそれを崇拝する者のところへ行く。裕福になろうと欲してなれなかった人間が一人としているだろうか。「なろうと欲して」とぼくは言うのだ。期待を抱くことは意志をもつことではない。詩人は十万フランが入るという期待を抱くが、だれから、どうやって入るのか知らない。彼はその十万フランを得るためにほんのわずかな行動も起こさない。だから手に入らないのだ。しかし、彼は美しい詩をつくりたいと思っている。だからそれをつくるのだ。その詩は彼の詩人である性質に従っているので美しい。鰐がワニ皮になり、鳥が羽毛になるのと同じように。だから、最後には自分の道を見出すあの内部の力は、運命とも呼ぶことができる。しかし、十分に武装されて構成のがっちりしたこの生と、ピュロス（前三一九―二七二。エペイロスの王。アルゴスの市街戦で、

る。反対のこともまた起こる。ぼくは酒を飲まないでいる。でも、何の苦もなくたちまち酔っぱらいになるかもしれない。ぼくは賭け事が好きだった。周囲の事情が変わったので、もう賭け事をやりたいとは思わなくなった。もしそれに手を出したら、また好きになるであろう。情念のなかには頑固なものがある。とりわけ、とほうもない誤りがあるようだ。われわれは情念にとらわれていると思い込んでいるのだ。チーズの嫌いな人たちは、チーズを味わってみようともしない。チーズは嫌いだと頭から思い込んでいるからだ。独身者は、結婚は我慢のならないものだと思い込んでいることがよくある。不幸なことに、絶望には確信がつきまとう。いや、確信どころか、やわらかな思考を拒絶する絶対的断定が。この幻想（イリュージョン）は——なぜなら、これこそ一つのイリュージョンだと思うから——ごく自然なものである。人は自分のもっていないものについては判断を誤るのだ。ぼくが酒を飲んでいるかぎり、禁酒のイデーをもつことができない。ぼくが現に飲んでいるという行為が、しらふのぼくを考えることはできない。禁酒するが早いか、今度はその行為だけで飲酒癖をしりぞける。憂鬱な気分についても、賭け事についても、あらゆることについて、同じことがいえるのだ。

引越しが近づくと、やがて別れるこの壁にさよならを告げる。家具はまだ運び出されていないのに、もう新住居が好ましく思われる。古い住居は忘れられてしまう。すべて

30　絶望しないこと

誓約によって酔っぱらい癖をなおそうとするあの警察のやり方は、行動を重んずるしるしである。学者ぶった人ならば、それを信用しないだろう。なぜなら、彼の目からみれば、習慣や悪徳はたいへん明確なもので、その根は深いから。事物に関する知識によって推論するので、彼が言わんとするのは、鉄や硫黄が固有の性質をもっているように、すべての人間は自己のうちにその固有の行動様式をもっているということだ。しかし、ぼくの思うにはむしろ、美徳や悪徳はほとんど、われわれの本性に根ざしたものではない。それは鍛造されたり圧延されたりするのが鉄の性質から出たものではなく、また火薬や棒状硫黄にされるのが硫黄の性質から出たものでないのと同様なのだ。

酔っぱらいの場合には、なぜ酔っぱらうのかぼくにはよくわかる。そこでは飲みたい欲を作りだすのは習慣である。なぜなら、飲みつけているものを飲むことによってのどが渇き、理性を失ってしまうから。しかし、飲むようになる最初の原因はとるに足らないものだ。飲むまいと誓っていれば、それは消えてしまうだろう。この小さな心の努力をすれば、この男はまるで二十年来水しか飲まなかったように、酒をつつしむようにな

31　大草原の中で

プラトンにはおとぎ話がいくつかある。それは結局は、どんなおとぎ話にもありそうなものだが、ついでに語られたちょっとした言葉によって、われわれの心の底にひびき渡り、突然よく知られていなかった心の隅々が照らし出されてくる。それがあのエルのような物語である。エルは戦いで死んだと思われている。でも審判の過失がわかって、もう一度地獄からもどってきて、あの世でみたことを語っている。

もっとも恐ろしい試練はつぎのようなものだった。魂たちは、あるいは亡霊たちは、あるいは何と呼んでもいいが、大草原に連れて行かれる。そしてその目の前にはいくつかの袋が並んでいて、彼らはそこでそれぞれの運命を選び取らねばならなかったのだ。この魂たちはまだ、過去の生涯の思い出をもっている。それぞれの欲望や悔恨を手がかりに選択しているのだ。何にもましてお金の欲しかった人たちは、お金のいっぱい入った運命を選んでいる。お金をたくさんもっていた者は、もっとたくさん手に入れようとする。酒色にふけった者は快楽のたっぷりつまった袋をみつけようとする。野心に生きた者は王様になる運命をもとめようとする。最後にはそれぞれみんな、必要なものをみ

のことが、やがて忘れられてしまう。現在には力と若さがある、どんな時も。だから人は、たしかな足どりで現在と順応して行く。だれでも経験していることだが、だれ一人それを信じていない。習慣は偶像（イドラ）のようなもので、イドラが力をもつのは、われわれがそれに服従しているからだ。ここではわれわれを欺いているのは思考の方だ。なぜなら、考えることのできないことは、また行なうこともできないように見えるから。人間の世界が想像力によって牛耳られているのは、想像力はわれわれの習慣から自由になれないからだ。だから、想像力は創り出すものではないと言わねばならない。創り出すのは行動である。

ぼくの祖父は七十歳の頃、固形の食物が嫌いになって、少なくとも五年間牛乳で生きていた。人はこれを異常な習慣（マニア）だと言った。その通りだった。ある日、家族そろっての昼食で、祖父が突然鶏のモモ肉を食べ始めるのを見た。そして祖父は、われわれと同じ食事で、あと六、七年生きながらえた。勇気のある行為だった、たしかに。しかし、何に対して彼は挑んだのか。臆見に、否むしろ、自分がもっていた臆見の臆見に。また自分のもっていた自己についての臆見に。何としあわせな性質というかもしれない。とんでもない。だれもみんな、そうなのだ。ただ、それを知らない。そして銘々、人は自分の人柄にしたがっているのである。

一九二二年八月二十四日

無知と虚偽と不正とを選びとること以外に、いったい何を選ぶことができるだろうか。こうして彼らは、どんな裁判官によって罰せられるよりも以上に苛酷な仕方で、自分自身を罰することになる。あの百万長者は今ごろ大草原の中に、おそらく、いるだろう。何を選びとるだろうか。しかし、比喩はやめよう。プラトンはいつも、われわれが思っているよりもはるかにわれわれの近くにいるのだ。ぼくには、死後の新しい生をみた経験などまったくない。だから、ぼくが死後の生を信じないと言ってもほとんど意味がない。それについては、ぼくは何ひとつ考えることができないのだ。ぼくはむしろ、来世とは、つまりわれわれが自分の選んだ通りに、また自分で立てた掟にしたがって罰せられる未来とは、われわれがたえず滑り込んでいく、各自がみんな、自分の選んだ袋を展開させるこの未来そのものであると言いたい。そしてまた、われわれがあの河で、神々や運命を非難しながら忘却の水を飲むのをやめないことも疑いの余地がない。野心を選びとった者は、自分では卑劣な追従や妬みや不正を選びとるつもりはなかった。しかし、それらは袋の中にあったのだ。

一九〇九年六月二十五日

つけて、新しい運命を肩にしてそこを立ち去り、レーテ河の水、すなわち忘却の河の水を飲み、自分の選択にしたがって生きるため、もう一度人間の世界をめざして出発するのである。

これは奇妙な試練であり、風変わりな刑罰であるが、しかし、見かけよりもずっと恐ろしいものだ。なぜなら、幸福や不幸のほんとうの原因を深く考える人間は少ないのだから。そういう人間の思惟は源泉にまでさかのぼる。すなわち理性を敗北させる抗しがたい欲望にまでさかのぼるのだ。そういう人たちは富を警戒する。富は追従に弱くなり、不幸な人びとの言うことが聞こえなくなるからだ。彼らは権力を警戒する。権力はそれをもつ者をすべて、多かれ少なかれ、不正にするものだから。彼らは快楽を警戒する。快楽は知性の光を暗くし、ついには消してしまうから。だからこういう賢者たちは、見かけの立派な袋をいくつもいくつも用心深く裏返してみるだろう。精神の均衡を失わないように、そして輝かしい運命の中で、さんざん骨を折って獲得し保持しているわずかばかりの正しい判断力を危険にさらすことがないように、絶えず気づかうのである。こういう人間は、だれも欲しないような地味な運命を背負っていくだろう。

ところが、一生涯自分の欲望を追いかけまわしたほかの人たちは、おいしそうな御馳走をよろこび、お皿しか目にはいらなかった。そういう人たちは、さらに多くの盲目と

しゃれ女や金利生活者は、そんなことなどまったく考えたことがない。それでいてだれも皆、犬がいなくなったり、馬が足を痛めたりすると、かわいそうだと思う。自分の召使いたちにはやさしく丁寧で、彼らが目を赤くしたり、不満そうな顔をすると、我慢ができない。チップを渡す時には気持ちよくはずんでやる。カフェのギャルソンや使い走りの者や駅者がよろこぶのを見るからである。駅の赤帽にたっぷりチップをはずむ人間、その同じ人間が、鉄道員たちは会社のくれる給料で飢えずに生きていけると主張している。だれでもみんな、遠くの中国人なら平気で殺すだろう。社会は善男善女たちがそれと知らずに無慈悲となっている驚くべきマシーンなのだ」。

さらにもう一人の人間が言った。「あまりよく知らない人たちと暮らすのは何といいことだろうか。だれもみんな、言葉や動作をつつしみ、そのこと自体で怒りもおさまる。機嫌のよい顔となって、すぐに心もよくなる。言わなければよかったと思うようなことは、言おうとさえも考えない。人は自分をよく知らない人間の前ではよく見せようとする。そのような努力によって、われわれはしばしば、他人に対しても、また自分自身に対してもいっそう正しくふるまうようになる。知らない人からは何も期待していないから、わずかなことをしてもらっても、すっかり満足してしまう。外国人が愛想がいいのはよく知っている。外国人にはさしさわりのない挨拶しかできないからだ。そこから、

32　隣人に対する情念

ある人が言った。「知りすぎている人たちとではなんと暮らしにくいことだろう。自分のことを嘆くのに慎みがないから、そのため小さな不幸を大げさに言っている。相手だって同じである。相手の行為や言葉や気持ちに対してすぐに文句を言う。情念の爆発を押さえないのだ。くだらぬことで怒り出す。相手の親切や愛情や寛容を頼りすぎているのだ。自分のことを知られすぎていて、気どることもないのだ。こういう四六時中気がねなしの態度では、かえってそれがうそになる。すべてを誇張してしまう。そこから、どんなに気持ちの合った家族のあいだでもびっくりするような棘々(とげとげ)しい口調や乱暴な身ぶりが出てくる。礼儀作法や儀式は人の思っている以上に有益なものだ」。

もう一人の人が言った。「全然知らない人たちと暮らすのはなんと折り合いにくいことだろう。金利生活者のために地下でつるはしをふるっている坑夫たちがいる。デパートのおしゃれな顧客のために身をすりへらし働いている居職の女裁縫師たちがいる。今この瞬間にも金持ちの子どもたちを楽しませるために何百というおもちゃを、安い手間賃で組み立て糊づけしている、今のところ不幸な人たちがいる。お金持ちの子どもやお

33　家族の中で

人間には二種類あって、騒がしさになれてしまう人間と、他人を沈黙させようとする人間がいる。仕事中だとか眠ろうとしている時にひそひそ話す声が聞こえたり、ちょっと乱暴に椅子を動かす音がすると、ひどく怒り出す人をたくさん知っている。一方、行動に制約を加えることを自分に対して絶対に許さない人たちもまた知っている。彼らにすれば、隣人の会話や笑いや歌をやめさせるくらいなら、貴重な思いつきがひとつ消えたり、睡眠時間が二時間少なくなった方がいいのだろう。

これら二種類の人間はどちらも、どこへ行っても、自分と反対の人びとを避けて、自分と同じような人びとを探しもとめる。だから、人は共同生活の規則や方針がたがいに大変ちがうさまざまな家族を見るのである。

だれか一人に不愉快を与えることは他の全員がしないように、という暗黙の取りきめができている家族がある。花の香りがいやだという者もいれば、声高な話し声がいやだという者もいる。夜の静けさを求める者もいれば、朝の静けさを求める者もいる。この人は宗教に触れるのをいやがり、あの人は政治の話になるやいなや歯ぎしりする。みん

外国で生きるのは好きだという者もいる。外国にいれば意地を悪くする機会もないし、よりいっそう自分自身に満足できる。人と言葉をかわさなくても、あの歩道の上にはいかに友情があり、いかに気楽な人の結びつきがあることだろう！　老いも若きも、犬までもがくつろいで往き来している。反対に、町なかでは駄者どうしがののしり合っている。だれもが、相手を見ようともしない見物人たちにせき立てられている。機構（メカニスム）はいたって簡単なのに、もうぎしぎししている。社会の平和は、人と人との直接の触れ合いやみんなの利益の交錯や直接に言葉をかわし合うことから生まれるであろう。組合や法人団体のようなメカニスムとしての組織によってではなく、反対に、大きすぎも小さすぎもしない隣人の結びつきによって、である。地域ごとの連合が本物なのである」。

一九一〇年十二月二十七日

34 心遣い

だれでもあの有名なシーンをよく知っているだろう。それはボーマルシェ（一七三二―九九。フランスの劇作家）の『セビリアの理髪師』の中でバジールがみんなから「あなたの顔はぎょっとするほど真っ青だ」と何度も何度も言われているうちに、とうとう最後には自分は病気なのだと思い込んでしまうところのことだ。めいめいが他の者たちの健康を見守っている、親密すぎるほど結ばれた家庭に行くたびに、この場面がぼくの頭に浮かんでくる。ちょっと顔が青かったり、ちょっと赤かったりすると、その人はたいへんな目にあう。家族中が気をもみ始めて、「よく眠れたの？」「きのうはどんなものを食べたの？」「勉強がすぎますよ！」と訊いてきて、励ましの言葉を言ってくる。そしてすぐに「早目に手当てをしなかった」病気の話が続く。

こんな風に愛され、かわいがられ、過保護にされ、世話を受けている感じやすく少し気の弱い人をみると、かわいそうだと思う。下痢や咳やくしゃみやあくびや神経痛のような毎日起こるちょっとした不快でも、彼の場合、やがて恐ろしい症状となっていく。家族の力で助長され、医者の冷淡な目つきの下で、彼は徴候が進行するのを見守るだろ

なおたがいに「拒否権」をみとめ合って、みんなこの拒否権を厳粛に行使している。ある者は「この花のおかげで一日中頭痛がするよ」と言い、またある者は「十一時ごろこのドアをひどく乱暴に閉める音がしたので、ゆうべは一睡もできなかった」と言う。みんなが苦情を言うのは食事どきで、それはまるで議会のようなものだ。みんなそのうちにこの複雑な憲章を知る。教育の目的とはまさにそれを子どもたちに教えることにほかならない。最後には、だれも身動きしなくなり、互いにうかがいながら、無意味なことを言うようになる。そこから陰鬱な平和と退屈な幸福ができる。ただ、結局みんな、自分が与えている迷惑より以上に他者から迷惑を与えられているので、だれも、自分は寛大であると思い、「自分のために生きてはならない。他人のことを考えるべきだ」と、信念をもってくりかえしている。

また、それぞれが気ままに生きることが尊重され、よろこばれているような家族もある。そこでは自分のよろこびが他人の迷惑になりうるとはだれも考えていない。でも、そういう人については触れない。それはエゴイストというものである。

一九〇七年七月十二日

35　家庭の平和

ジュール・ルナール（一八六四―一九一〇。フランスの作家）のあの恐るべき小説『にんじん』を、ぼくはもう一度取り上げる。この本には寛大さというものがない。その点について、ものごとの悪い面というのは、すぐに目に入りやすいものだと言いたい。ふつう情念は目立つものだが、友情は隠れてみえない。しかも親密さが深まれば深まるほどますます避けることができない。それのわからない人はどうしても不幸となる。

家族の中では、とりわけ家族どうしが深い愛情で結ばれている時には、気がねをする者も、仮面をかぶる者もいない。だから、母親は自分の子どもの前で、自分がよい母親であることをあかししようなどとは考えない。もしそんなことをする場合には、子どもがどうしようもないワルだからであろう。しっかりした子は、時にはそっけなくされることもあると覚悟してなければならない。それこそまさに、しっかりした子の受け取る褒美なのである。礼儀作法は親密なかかわりをもたない人たちのためにあり、機嫌は、上機嫌も不機嫌も、親密な者のためにある。

不機嫌な顔をナイーヴな形で見せ合えるというのは、愛をわかち合っている証拠であ

う。医者は、知っての通り、ばかだと思われるのもかまわずに、この人たちみんなを何としても落ち着かせようとはしないのだ。

人は心配事ができれば眠れなくなる。もうあの気を病む男だ。彼は夜々、自分の呼吸を聴いてすごし、昼はその夜のことを語っている。やがて彼の病気が特定化され、みんなから知られる。沈滞しきった会話が新たな活気をおびる。この不幸な男の健康には証券取引所の相場のように相場表ができあがり、上がったり下がったりする。彼もそれを知っている、あるいは見抜いている。これでまた、もう一人、神経衰弱の患者である。

治し方？　家族から逃げることだ。無関心な人たちの間で生活することである。気のない調子で「お元気ですか」と訊くが、相手がまじめに答えようものなら、逃げ出すような人たちの間でである。彼らは人の不満など聞かないし、胸のつまるような優しい心遣いのこもったまなざしであなたの胃袋をしめつけることもない。こういう状況の中で、すぐに絶望に陥らなければ、あなたは治るだろう。教訓――人に対して「あなたは顔色が悪い」などと言ってはならない。

一九〇七年五月三十日

によって解消されている。一つの動きが他の動きを排除する。友情の手を差しのべる時には、拳骨は排除されている。感情についても同じことが言える。感情がもっとも激しくなるのは、しぐさを始めてそれを抑えるときである。多くの客がきている女性が、怒りを中断して不意の来客を迎え入れるのをみても、ぼくは「何という偽善だ」とは言わない。むしろ「怒りをいやす何というみごとな方法だ！」と言う。

家族の秩序とは法の秩序のようなものだ。ひとりでにつくり出されたものではない。意志によってつくり出され保持されているのだ。最初の動作がどんなに危険なものかを知っている人間は、自分のしぐさに規律を与え、こうして自分の愛着する感情を保つ。だから、結婚は意志に照らし合わせて考えると、解消されるべきものではない。どんな嵐も乗り切って結婚を良いものにしますと誓約するのはその理由からである。これが誓約のほんとうの意味である。

一九一三年十月十四日

る。賢者はそこに、たがいの信頼と心安さの証拠を見るだろう。夫に対して他人行儀となり、注意深さがもどってくる時、それこそ妻の不貞がはじまったしるしであると、小説家はよく書いている。しかし、そこに妻の策略があるとみるのは正しくない。屈託のなさがもうなくなったということだ。「ぶたれてうれしいなんて」。この芝居のせりふには人間の心の真実がみごとに拡大されていて滑稽とさえみえる。ぶったり、ののしったり、非難するのは、いつも最初の動きである。このように信頼関係が行きすぎると、家族は崩壊する。すなわち、張り合う声がひとりでにけんか腰となる嫌なところとなると言いたい。それは当然のことだ。そのように四六時中なれ合っていると、一人が怒ると相手も怒りを抱き、ほんのわずかな情念もふくらんでくる。だから、こういう棘々しい気分を描写するのはいとも簡単である。それを説明することさえできれば、療法は病気のすぐそばに見つかるだろう。

人はみんな、よくぼやく気むずかしい知人のことを、まったくナイーヴな判断で、「そりゃあ、あいつの性格だよ」と言う。しかしぼくは、性格というものをあまり信じない。なぜなら、経験によってわかるように、いつも決まって抑え込まれているものは重要性を失って行き、ほとんど存在しないも同然であるから。王様の面前では、家来は不機嫌な心を隠しているのではない。不機嫌な心は、気に入られたいという激しい欲求

「悪魔に食われてしまえ」と言ったら、彼は自分の考えたところを言ったつもりであるが、もう情念の罠にはまっている。われわれの生活のその時その時に、まず心に浮かんでくることはみな偽りである。ぼくは朝、目ざめとともに目をあけるが、ぼくの見ているものはすべて虚偽なのだ。ぼくがしなければならないことは、判断をくだし、評価を与え、ものごとをその本来の距離までもどすことである。最初に見たものはどんなものであれ、一瞬の夢である。夢はおそらく、判断のない束の間の目ざめであろう。それならなぜその時の自分の直接の気持ちの方が自分にはよくわかると言いたがるのか。

ヘーゲルは、直接の、あるいは自然の魂はいつも深い憂鬱にみたされていて、重さにひしがれていると言った。この言葉の美しい深さがぼくには感じられる。自己省察がもしそれだけに終わって自らを奮い起こす力がないならば、それはよくない戯れである。自分に問いかける者は必ずまちがった答えを出す。自分だけを考える思弁は退屈するだけである。あるいは悲しみ、不安、いらだちに陥るだけだ。やって見たまえ。「暇つぶしに何を読んだらいいだろうか」と自らに問うがいい。もうあくびが出ている。読みはじめることが大事なのだ。意志になりおおせなければ、いったん起きた望みも失われてしまう。心理学者たちを批判するためにはこの点を考えればよい。心理学者たちは各自がみんな、自分の考えを好奇心をもって調べることをもとめている。まるで草や貝殻を

36 私生活について

「よい結婚はあるが、すばらしい結婚などは存在しない」と言ったのは、たしかラ・ブリュイエールだと思う。幸福を、一個のくだもののように味わったり語っているあのにせモラリストたちの泥沼から、人間精神を引き出さねばならない。くだものであっても、世話することによってうまいものとなるのだ。結婚や人と人とのいろいろなかかわりについてはなおさらのことだ。これらのものは味わわれ、経験されるだけのものではなくて、つくり出して行かねばならないのだ。社会というのは、天気や風向きだけで心地よかったり悪かったりする木陰のようなものではない。それは反対に、魔法使いが雨を降らしたり、よい天気にしたりする奇蹟の起こる場所である。

だれでもみんな、商売のため、職業のためだったら、大いに努力をする。ところが、ふつう自分の家に帰って幸せであるためには何もしないものだ。ぼくは礼儀作法について、すでによく書いてきた。しかし、それをふさわしい仕方でたたえてきたとは言えないだろう。ぼくは、礼儀とは虚偽であり、ただ外国人にはいいものだなどとは言わない。心が誠実かつ貴重であればあるほど、ますます礼儀正しさが必要となる。ある商売人が

遊びをやり始めたら、いらいらしたり退屈したりする最初の衝動で投げ出したりはしない。ピアノに向かって出まかせに弾こうと考えた者などだれもいない。音楽は、あらゆる例のなかでもっともすぐれたものだ。なぜなら、音楽が支えられているのは、声楽の場合でさえも、意志にほかならないから。その後にはじめて快さが生まれるのである。神学者も折々にいうけれども、自分でその点がよくわかっているわけではない。

一九一三年九月十日

調べるように、である。しかし、考えることは意志することだ。

ところで、取り引きや生産といった外での生活では各自みんな自己制御ができて、一瞬一瞬自分をとりもどしている。そういう場ではきわめてうまく行っていることが、私生活においては同じようには成功しない。だれでもみんな、自分の感情の上に横たわる。眠るにはよかろうが、家族という夢うつつの中では、見たものすべてがすぐに棘々しくなる。そのために、どんなに立派な人でも恐るべき欺瞞にしばしば陥るのである。注意すべきは、体操の教師のように全身運動でもって、意志的に感情を変えるべきなのに、意志のようなものをもち出して自分の感情を隠してしまうことだ。不機嫌や憂鬱や退屈は、雨や風のように変えられぬ事実だとみるこの観念は、実際のところ、最初の観念であり、誤ったものである。要するに、ほんとうの礼儀正しさとは、何をなすべきかを感覚的に知ることだ。敬意を払うこと、慎み深い態度、正しい行為などは、まさに自分のなすべきものだと知る。この最後の例は、よく考えてみる価値がある。情念の最初の思いつきを克服してすみやかに正義に帰る人、これはもちろん泥棒にできることではない。それはむしろ、誠実そのものであり、自己のいつわらざるすがたである。なぜ人は、愛についてはそうはいかないと考えたがるのか。愛は自然的なものではない。欲望さえもいつまでも自然のままではいない。ほんとうの感情は人のなすわざのことだ。トランプ

ように見える。自分をいつわりかくしているわけではまったくない。なぜなら、自分の気分の動きをその真の原因から説明するためには深い知恵が必要であり、それは実際にはきわめてまれのことであるから。ほんとうの原因はまた、われわれの動機をも変えてしまうからである。ほとんど感じられないような疲労が、散歩をしたいというぼくの意欲を奪い去ったとする。疲労はまたすぐ、ぼくは家にとどまるべきだという理由をみつけ出してしまう。ほんとうの原因に気づかぬふりをしていることを、人はしばしば羞恥心という名で呼ぶ。ぼくは、それはむしろ、真の原因を知らぬため、身体のことを魂の言葉に自然に置き換えるよりほかないためだと思う。そのようなテクストの前では、恋をしている男はわけがわからず、茫然自失となる。

男は行動に現われないかぎり何も理解できない。彼特有の機能は猟をしたり、建てたり、工夫したり、試みたりすることである。これらの道を離れると、男は退屈する。ただ、自分ではそのことに気づかないのがつねである。だから、ちょっとしたことにも絶えず不機嫌になり、それを隠そうとする彼の善意がいっそうそれをひどくする。男に必要なのは政治という食物、あるいは生産という食物である。そして、女もまた男のこの自然のすがたを欺瞞と思うのがふつうである。バルザックの『二人の若妻の手記』や、とりわけトルストイの『アンナ・カレーニナ』のなかには、この種の危機の深い分析が

37 夫婦

ロマン・ロランの立派な作品を読みながら、われわれは、よい夫婦なんてめったにない、それにも自然な原因がある、ということを理解するのである。同じ考え方にしたがいながら、その作品の登場人物を観察しながら、とりわけ自分の生活の中で出会う実在の人びとをよく見ながら、ぼくは、なぜだか当人たちにもその理由がよくわからないのに、男女が敵(かたき)どうしになるように仕向けるそれぞれの特徴に気づくのである。一方は感情的情緒的(アフェクティフ)で、他方は行動的積極的(アクティフ)なのだ。このことはしばしば指摘されてきたことだが、説明されたためしはまずない。

アフェクティフは情愛が深いのとはちがうのだ。この言葉によって理解しなければならないことは、思考が生の源泉とより緊密に結びついていることである。このような結びつきは、男であれ女であれ、どんな病人にも見られるものである。しかし、ふつう女性においてはより緊密なのだ。女性は、妊娠と授乳の機能、そしてそれにかかわる自然の諸機能がまさっているからだ。そのために気分が変わりやすい。気分の変わる原因は自然なものであるが、結果はしばしば、外から見ると、気まぐれで、無定見で、強情の

38 退屈

男は、つくり出したり壊したりするものが何もない時、まことに不幸である。女は、といってもつくろい物や赤ちゃんの世話に追われている女のことだが、女はおそらく、なぜ男がカフェに行ってトランプ遊びをするのかよくわからないであろう。自己と親密に生きて、自分に思いをめぐらすことは何の価値もないのである。

ゲーテの傑作『ウィルヘルム・マイスター』のなかに「あきらめの会」というのが出てくる。メンバーは未来のことも過去のこともけっして考えてはならないことになっている。この規則は、守ることができる間は大変よい規則である。しかし、それを守るためには手や目を使って何かをしている必要がある。知覚することと行動すること、これこそほんとうの療法なのだ。反対に、何もしないで指をひねくりまわしているとやがて、すぐに不安と悔恨に陥るであろう。思考というのは、それほど健全と必ずしもいえぬ一種の遊戯なのである。ふつう堂々めぐりばかりしていて前進しない。だから、あの偉大なジャン＝ジャック〔・ルソー〕は、「瞑想している人間は自然に反した生き物である」と書いたのだ。

ある。

このような病に対する治療法は、外での生活のなかにあるように思われる。これは二つの面で作用する。まず、家族や友人としての人間関係によって作用する。この人間関係は夫婦のあいだに、自分の気分をあらわにしすぎるだけのあの気まぐれな感情に気づかぬふりをするために、絶対必要な礼節の交わりをもたらす。「気づかぬふり」に注意して欲しい。たんなる衝動的気分など外にあらわさなくなれば、すぐに感じられさえもしなくなる。だから、愛しているかぎり、気分よりも礼儀作法の方がより真実な意味がある。それから、外の生活は男を忙殺し、彼の意を迎えるこの閑居に陥るのを救っている。あの閑居のすがたは、男がどんなに意欲的行動的であろうとも不自然なのである。だから、外の生活からあまりに孤立した愛情だけで養われている夫婦には、いつもなにか心配なことがある。それはバラストを積んでいない、軽すぎて波に揺れすぎる小舟なのだ。だからあれこれ考えても、そこでは知恵など大した意味がない。制度の方が感情を救ってくれるのだ。

一九一二年十二月十四日

多い人たちは、狩猟や戦争や冒険旅行に出かけて行く。自動車を乗りまわしたり、飛行機に乗って骨折するチャンスを待ちこがれている者もいる。彼らは新しい行動を、新しい知覚をもとめているのだ。彼らが生きたいと思っているのは世界のなかであって、自分自身のうちではないのだ。古代の巨大なマストドンが森を食い荒していたように、彼らは目で世界を食い荒している。もっとも単純で愚直な連中ときたら、顔やおなかをぶんなぐられてよろこんでいる。それによって彼らは目の前の事物に連れもどされて、たいへん幸福となるのである。戦争とはおそらく、何にもまして、退屈を癒すものである。そこから、戦争を望む気持ちはなくとも戦争をいちばん受け入れやすい人たちはたいてい、戦争によって失うものをいちばんたくさんもっている者であることも説明がつくであろう。死に対する恐怖は暇人の考えることである。さし迫った行動があれば、その行動がどんなに危険なものであってもすぐに消されてしまう考えである。戦闘はおそらく、死を考えることがもっとも少なくなる状況の一つである。そこから次のような逆説が生まれる。すなわち、人はその生が豊かになればなるほど、それを失うことを恐れなくなっていく。

一九〇九年一月二十九日

生活上の必要がわれわれをそこから救い出してくれる、たいていの場合は。われわれはほとんど皆、自分の果たすべき職業をもっている。それは大変よいことである。われわれに欠けているのは、その職業から息抜きさせてくれるような小さい仕事である。ぼくはしばしば、女はいいな、と思う。女は編み物や刺繍をしているからだ。彼女たちの目は追っていくべき具体的なものを持っている。そのために、過去や未来のイマージュが強烈にあらわれても稲妻のように一瞬にすぎないのだ。ところが、男が集まって暇つぶしをする時は、何もすることがなく、壜のなかの蠅のようにぶんぶんうなっているだけだ。

病気でなければ、眠れない時間はそれほど恐ろしいものではないと思う。ただ、想像力が自由奔放になりすぎて、考えるべき具体的な対象をもっていないだけであるから。ある人は十時に床につきながら、十二時まで、眠りの神に加護を祈りながら鯉のように寝返りを打っている。同じ人間が、同じ時間に劇場にいたら、自分自身の存在をまったく忘れているであろう。

こうした省察から、金持ちの生活には多種多様な用事がいっぱいあるのがわかってくる。彼らは無数の義務や無数の仕事を自らに課して、まるで火事場に行くように奔走している。一日に十件もの訪問をこなし、コンサートから劇場へまわる。もっと血の気の

なのか。

おかしなことだが、列車が遅く走れば退屈してしまう乗客が、この列車はほかの列車よりも十五分早く着くのですと、出発する前、あるいは到着後に説明するのに十五分かけてしまう。人はだれでも、一日に少なくとも十五分は、この列車の威力のことを言ったり、トランプ遊びをやったり、夢見心地になったりするものだ。それと同じ時間を、汽車のなかでむだに過ごしてはなぜ悪いのか。

汽車のなかよりもいいところはどこにもない。特急列車のことである。座り心地は、どんな安楽椅子よりもずっといい。広い窓から、川や谷や丘や村や町が通りすぎていくのが見える。目は、丘の中腹に出来ている道路や、その道路を走っている車や、川面に浮かぶ船の列を追いかけている。田舎のはぐくんでいる豊饒さが、これでもかこれでもかと目のあたりに拡がる。あるときは小麦とライ麦、あるときはテンサイ畑と製油所、続いてみごとな大樹林、それから牧場、牛、馬である。切通しには地層が露出している。これこそすばらしい地理のアルバムだ。ページをめくる必要もなく、季節や天候によって日ごとに変わるアルバムである。丘の向こうには雷雨の気配が見え、まぐさを積んだ車がいくつも道を急ぐのが見える。また、ある時には、刈り入れをする人たちが金色の埃のなかで働いていて、差し込む陽光に空気が震えている。これだけの光景がどこにあ

39 スピード

フランス西部を走っている新型機関車を見た。従来の機関車にくらべて車両がずっと長く、丈が高く、形もシンプルである。使用されている機械の部品は、時計の部分のように精巧だ。ほとんど音を立てずに回転する。すべての力が有効に作用し、一つの同じ目的に集中している。蒸気は、外に出るまでに、火力から受けた全エネルギーをピストンのために消費してしまう。滑らかなスタート、安定したスピード、揺れもなく作動する圧力、そして時速百二十キロで走る重量列車が目に浮かんでくる。その上、その巨大な炭水車は、どのくらい石炭を焚くものかを雄弁に物語っている。

これこそまさに科学の成果、研究・探求の成果、ハンマーとやすりの大いなる業である。これらすべては、いったい何のためなのか？　おそらく、パリとル・アーブルの間の旅行時間が十五分早くなるためだろう。では、幸福な乗客たちは、これほど高価な代償を払って手に入れたその十五分をどうするのだろうか。その時間を、プラットホームでの時間待ちに使ってしまう人が多いであろう。もう十五分カフェに座って、新聞を広告欄まで読んでしまう人もいるだろう。いったいどんな益があるのか。だれのための益

40 賭け

ある人がこう言っていた。「ひとりで生活していて、欲求でも不安でもすべてお金の力で片付けている人はかわいそうだと思う。ちょっと年齢をとったり病気にでもなると、本当に気の毒だ。なぜなら、自分のことを考えすぎるからだ。一家の父は、いつも心配事はあるし、借金もなくならないが、見かけによらず、はるかにしあわせだよ。自分の胃のぐあいを考える暇などないのだから」と。ここに少しばかりの借金を残しておく理由があり、借金があったらそれをよろこぶべき理由がある。

人は平凡で穏やかで安定した生活を求めなさい、と言うけれども、それを支えていくためにはまた、多くの知恵が必要なのだとはあまり言わない。富や名誉を軽蔑することは、要するに簡単なのだ。ほんとうにむずかしいのは、一度それらを軽蔑した以上はあまり退屈しないということだ。野心家はいつも何かを追いもとめている。そこには世にもまれな幸福があると思っているから。しかし、野心家の幸福はそのことで頭がいっぱいだというところにある。何か失敗があって不幸に陥っている時でさえも、その不幸のゆえにまだしあわせなのだ。なぜなら、彼はその解決策を考えるからで、不幸の真の解

るだろうか。

ところが乗客は、新聞を読んだり、おもしろくもないのに印刷の悪い写真版を眺めたり、時計を出したり、あくびをしたり、スーツケースをあけたり、しめたりしている。到着するが早いか、辻馬車を呼んで、まるで家が火事にでもなっているかのように飛んで帰る。夜になって、芝居におさまったりしているそういう風景をみると、ボール紙に描かれた木々や、刈り入れのまねや作りものの鐘楼を感心して眺めるのだ。刈り入れのまねをする者たちはがなり立てている。そこで彼は、牢屋に閉じ込められたような狭い座席で膝をぶつけ、膝をこすりながら、「刈り入れの連中の歌は調子はずれだが、舞台装置は悪くないな」と言うのである。

一九〇八年七月二日

戦争にはおそらく、何か賭け事に似たものがある。戦争が生まれるのは退屈だからだ。戦争をもっとも好む人間はいつも、仕事や心配事のもっとも少ない人たちであることが、そのことをあかししている。こういう原因をよく理解したら、演説などにまどわされることも少なくなるであろう。金持ちで暇のある人間が、「生きることなんて、おれにはたやすいことだ。おれがこれほど多くの危険にあえて身をさらすのは、おれがほんとうにこういう恐ろしい危険を求めるのは、そこに何か打ちかちがたい理由を、不可避の必然を見ざるをえないからだ」という時、すごい奴のように見える。だが、そうではないのだ。彼はただ退屈しているにすぎないのだ。彼が朝から晩まで働いていたら、それほど退屈することもないであろう。こうして、富の不平等な分配には、何にもまして、たらふく食っているたくさんの人間には退屈を与えるというこの不都合がある。だからそういう人たちは、自分で不安や怒りをつくり出して、それに夢中になるのである。こういうぜいたくな感情が、貧しい人びとにとって最大の重荷となっている。

一九一三年十一月一日

訳注

（1）これは外的必然の法則のもとで、世界として考えられた印象である。正しい知覚への目ざめ。

決策とは、それを考えるということに存する。われわれの外側に、あからさまに〔概念の光のもとで〕、大きな国のように拡がった必然[1]は、われわれの内部のくぼみの中に感じられる包み隠された必然[2]よりもはるかにましである。

賭け事にのめり込んでいく心には、あの冒険に対する欲求が見える。いわばむき出しの形で、よけいな飾りは何もつけない姿で。なぜなら、賭けをする人間にはけっして安全というものがないから。だからこそ彼にはおもしろいのだと思う。ほんとうの賭博師は、注意力や慎重さやかけ引きによって幸運が左右されるような賭け事をあまり好まない。反対に、ルーレットのような賭け事は、待っていて危険を冒すだけで何もできないから、それだけにいっそう彼を熱狂させる。ある意味で、自分から破局を求めることである。なぜなら、彼は一瞬一瞬、「つぎの玉でおそらくおれはおしまいだろうな、もしおれが賭けたら」と思っているのだから。たいへん危険な冒険旅行のようなものだ。だが、ただ一つ条件がある。自分が賭けるのをやめようと思ったら、それだけでいつでも安全無事にわが家にもどれるという条件だ。しかし、この点もまた偶然の賭け事のおもしろさを言い表わしているものなのだ。なぜなら、強制するものは何ひとつないのだから。そうしようと思いさえしなければ、危険を冒すことはないのだ。この見えない可能性がうけるのである。

41 期待

火事からぼくは保険について考えた。保険は女神のようだが、好運の女神のようにはとうてい愛されていない。こわがられている。何の熱意もなく、けちな供物をささげる。そのことはすぐ理解できる。保険の御利益が発揮されるのは不幸に見舞われた時だけだから。いちばんいいのは、言うまでもなく火事を出さないことだ。しかしこれは、四六時中ついてまわる幸福で、手や足がある幸福と同じように、それと感じることのないものだ。こうした消極的な幸福について、そのためにお金を払うなんて、ばかげた出費のように見える。保険料を惜しげもなく支払うのは、何にでも金を出す大企業くらいのものだと思う。しかし、一日の終わりに自分が損をしたのかもうけたのか知らない大企業の幹部たちもかわいそうだと思う。たぶん彼らのほんとうの楽しみは、主に、たくさんの従業員に対して命令できることから出てくるのだろう。

期待は大きいが貧弱な手段より持たぬ人たちは、保険が好きになれない。破産保険をかけているような商人なんて考えられない。一定の規準を上まわった利益をみんなで共同して積み立てることよりも簡単な方法は何もないだろう。こうすれば、加盟した企業

(2) それ自体として味わっているサンサシオン(感覚性・外部印象)、われわれ自身の感情(よろこびや苦しみなど)として包み隠されたサンサシオン。

はだれでも、毎日の仕事のなかで、自分が没頭してみたくなるような別の仕事を見出すものだ。期待をもつことによって、もうおしまいかと思われた壁が崩れ、雑草やいばらのあったところに野菜や花々が整然と並んでいるのを見る。保険は閉じ込める。

賭博心を観察してみると、面白い。そこで人間がたたかっているのははだかの偶然である。自分一人が欲しつくり出した偶然なのだ。賭け事のリスクに対しては無料の保険がある。しなければよいのだ。しかし、暇のある人間はほとんどみんな、トランプやさいころに飛びつき、切り離すことのできない双子の姉妹、期待と不安とを愛してやまないのである。そしておそらく人間は、上手な勝負よりも幸運な勝利の方を誇りにするものだ。「おめでとう」という言葉はそのことを言い表わしている。なぜなら、「めでたい」というのは、本来の意味において成功をたたえることであって、功績をたたえることではない。これは神々の好意が寄せられたという古代人の考え方であり、神々の死後も生き残っているのだ。もし人間がそういうものでなければ、平等の正義はとうの昔からあまねくゆきわたっていたことだろう。なぜなら、それはむずかしいことではないから。ところが、人間はむずかしくないことはあまり好まないのだ。カエサルの支配は万人の野心によるものだ。カエサルは王冠をかぶったわれわれの希望なのだ。

一九二一年十月三日

は全体として、かなり繁盛するだろう。加盟した企業主は公務員のように固定給と恩給が保証されるであろう。希望すれば、医者も外科医も保養所も保証されるだろう。ハネムーンも観光旅行も保証されるだろう。じつにみごとな知恵だ。理屈の上ではまことにすばらしい。しかし、物質生活がそのように、語のまったき意味で保証されたとしても、幸福はやはりすべて創り出さねばならぬことを忘れてはならない。自分の心の中に財産を持っていない者は退屈によってねらわれ、すぐにとらえられてしまう。

古代人たちが盲目の運命神と呼んだ宝くじの女神は、もっとはるかに深い愛情であがめられている。そこには途轍もない希望があり、代償としては、はずれるかもしれないという不安があるだけで、そんなことは何でもない。あらゆる保険を綜合した事務所を想像するならば、その入口にはこう書くべきであろう。「ここに入る者はいっさいの希望を棄てるべし」(ダンテ)。期待をこめている商人はだれでも、それよりも有利な立場にあるのだ。それは野心からだけでは出てこない。野心はほんとうのところ、虚栄心にすぎないから。野心からではなく、むしろいつも行動を生み出すあの疲れを知らない創意工夫から出てくるのだ。この創意工夫はどんな仕事の上にも光とよろこびをもたらすものである。ペレット(ラ・フォンテーヌの『寓話』に出てくる牛乳売り)は牛乳壺の中に休息をみているのではない。反対に、仕事をみているのだ。仔牛、牝牛、牛、豚、仔豚、これには世話がかかる。人

する。ぼくはこのようなプロポ(哲学断章)を書いている。「そりゃ、骨の折れるたいへんな仕事だ」と、文筆で食っている者なら言うだろう。ただ、だれもぼくにそれをやりなさいとは言っていないのだ。自分が好きでやっているこういう仕事は楽しみであり、もっと正確に言えば、幸福である。ボクサーは逃げにまわって受けるパンチはいやだが、積極的に出て受けるパンチは好きだ。戦いが自分の意志で行なわれるならば、困難な勝利ほど楽しいものは何もない。ほんとうのところ、人間が好きなのは力(可能性)にすぎない。ヘラクレスは怪物どもを探し求め、退治することによって、自分の力を自分自身にあかしている。しかし、彼が恋におちいったとたんに、自分が奴隷状態にあることを感じ、快楽の力を知った。人間はみんなそういうものなのだ。だからこそ、快楽は人間を憂鬱なものにするのだ。

守銭奴は多くの快楽を自分に禁じている。まず快楽をおさえることによって、また力をたくわえることによって、強烈な幸福をつくり出すのだ。しかし、彼はその力が自分自身の力によるものであることを欲する。遺産のおかげで金持ちになった人間が、もし守銭奴であれば、これはあわれな守銭奴だ。なぜなら、幸福とはすべて、本質的な意味において詩なのだから。そして詩とは行動を意味するのだから。人は、棚からぼた餅のように落ちてきた幸福はあまり好まない。自分でつくった幸福が欲しいのだ。子どもは

42 行動すること

あの競技ランナーたちはみんな、おおいに刻苦する。あのサッカー選手たちはみんな、おおいに刻苦する。あのボクサーたちはみんな、おおいに刻苦する。人間は快楽を求めるものだと、どの本にも書いてあるが、そうとはかぎらない。むしろ人間は労苦を求めている、労苦が好きであるようにみえる。老いたディオゲネス（シノペのディオゲネス、前四・三頃―三二七頃。キュニク学派のギリシャ哲学者）は、「もっともすばらしいもの、それは労苦だ」と言っている。この点について、人間は労苦を求め、その労苦の中に快楽を見出しているのだ、と言うかもしれない。しかし、それは言葉の遊びにすぎない。そう言うならば、幸福というべきであって、快楽というべきではない。幸福と快楽とはたいへん異なった二物で、隷属と自由ほどの相違がある。

人間は自分からやりたいのだ、外からの力でされるのは欲しない。自分からすすんであんなに刻苦する人たちも、強いられた仕事はおそらく好まない。だれだって強いられた仕事は好きではない。だれだって身にふりかかる不幸はいやだ。止むを得ないと感じてよろこぶ者はいない。しかし、自分の意志で労苦をつくり出すやいなや、ぼくは満足

のはその結果である。その結果としてのみだ。

一九一一年四月三日

われわれ大人の庭など虚仮にするだけだ。子どもは自分で、砂山と麦藁とでりっぱな庭をつくっている。自分の手で収集したことのない収集家など想像できるだろうか。

戦争のなかで人が気に入っている点は自分が戦争をやっていることだ。人は武装するやいなや、各人の自由が明白なものとなる。だから司令部など虚仮にするだろう。司令部は戦闘を強制しようとしているだけだ。しかし、兵士たちは自分の自由を感じるやいなや、新しい生活に入り、その生活がおもしろくなる。死を恐れる気持ちはいつだってあるはずだ。死を待って、最後には死を受け入れるであろう。しかし、死と立ち向かい、いわば決闘場に死を呼び出すような人間は、自分は死よりも強いと感じている。だれでもよく知っているように、兵士にとって死を待つよりも死を呼び出すことの方が容易なのだ。人は時間がもたらす運命よりも自分がつくり出す運命の方を好むものだ。したがって戦争の中には一つの詩がある。その詩のために、敵をもはや憎いとは思わなくなる。戦争やあらゆる種類の情念を理解させるのはこうして自由に酔ってしまうからである。ペストは外から押しつけられたものであるが、戦争は、賭け事のように、人の考え出したものなのだ。だから、慎重な知恵があればそれだけで十分な平和の保障になるとはぼくには思えない。平和を支えるのは正義を愛する心である。正義をまっとうするのはむずかしいからだ。橋やトンネルを作ることよりもむずかしいのだ。平和が生まれる

きない与件の上に、すばやく一つの行動の構想を描き、即座に実行すること、これは人間の生を申し分なく満たすことである。その時はもう、何も望むことはないだろう。何も恐れるものはないだろう。時間に追われ、後悔している暇などまったくないのだ。人はよく、泥棒や追いはぎは心の中で何を考えているのだろうかと思うが、彼らには心の生活などないとぼくは思う。獲物をねらっているか、眠っているか、いつもこのどちらかだ。彼の予見する力は、自分の足許や手先までを照らして見るにすぎない。だから、彼の心には罰せられるという考えも浮かばなければ、ほかのどんな考えも浮かばない。こういう聴く耳をもたない、見る眼をもたないマシーンほど戦慄すべきものはなにもない。しかし、どんな人間においても、行動する時には意識を消し去る。情容赦のないこのヴァイオレンス〔荒ぶる力〕は木こりの斧の一撃に通じるものがある。政治家の考え方のなかには、このヴァイオレンスはあまり顕著ではないが、その結果の中ではこの力はしばしばはっきりと感じられる。斧のように厳しく非情な人間に出会っても、彼がそれほど身を惜しんではいないのを知る時、人はあまり驚かないだろう。力というのは情容赦をしないものだ。自分自身に対してもまた、情容赦をしないのだ。

なぜ戦争が起こるのか。人間は行動のなかにおぼれてしまうからだ。人間の思考は電車の電燈のようなもので、発車時には光が弱くなる。ぼくがいうのは反省する思考のこ

43 行動の人

警視総監というのは、ぼくの好みからいうと、もっともしあわせな人間である。なぜか。いつも行動しているからだ。しかも新しい予見することのできない状況の中でいつも行動しているからだ。相手は火事のこともあり、水害のこともある。土砂崩れのこともあり、建造物の倒壊のこともある。また泥や塵埃や病気や貧困のこともある。そして最後には怒っている人間を相手にすることもよくある。否、熱狂している人間を相手にすることも時にある。こうして、このしあわせな人間は、勤務時間中ずっと一瞬のすきもなく、明確な問題と向かい合って、明確な行動が求められている。したがって、一般的な規則など存在しない。役所の書類もない。お役所の書式で苦情や気休めを書くこともない。そういう類いのことはその辺のお役人にまかせておく。彼のほうは、知覚と行動そのものである。知覚と行動というこの二つの水門が開かれる時、生命の大河が人間の心情を、軽やかな羽のように運び去っていくのである。

そこに賭け事の秘密があるのだ。ブリッジをすることは、知覚から行動へと生命を流れさせることである。サッカーをするとなれば、その流れはもっといい。新しい予見で

44 ディオゲネス

人間が幸福であるといえるのは、何かを欲する時と、つくり出す時だけである。そのことはトランプ遊びをみるとよくわかる。トランプ遊びではみんな、自分の熟慮する力を、決定する力を十分味わっているのが、それぞれの顔色からはっきり見てとれる。切り札を手にしたカエサルが何人もあらわれて、ふだんにルビコン河を渡っている。偶然の賭け事においてさえ、賭け事をする人間は賭ける力も賭けない力もすべて自分が握っている。ある時は、どんなに危険があっても思い切って賭ける。ある時は、どんなに期待がもてても賭けるのをやめる。彼は自分で自分を支配している。彼は統括する。欲望と不安は、日常生活のことではうるさく口を出してくるが、ここでは予見することができない状態にあるため、ひとことも口を出すことができないのだ。だから、賭け事というのは、自負心の強い人間をとりこにする。あきらめて服従しながら稼ぐ人たちには、バカラ（トランプ遊びの一種）で勝負をする楽しみなど想像もつかない。しかし、やってみたら、しばらくの間でも力の陶酔とは何かを知るだろう。

仕事というのはすべて、自分が支配者であるかぎりはおもしろいが、支配されるよう

とだ。そこから行動の恐るべき力が生まれる。行動の力は思いのままに自己を正当化してしまう。なぜなら、この力は心のあかりを消し去るからだ。そのために、つまらない情念の群れが消える。反省の中ではぐくまれていたいっさいの情念が消え去る。憂鬱や厭世感や陰謀や欺瞞や恨みや小説めいた愛情やぬけ目のない悪徳のようなものがすべて消え去るのである。しかし、正義もまた行動の流れの中で消え去ってしまうのだ。警視総監は、水害や火事とたたかうのと同じように、暴動ともたたかう。暴徒もまた、心のあかりを消し去っている。野蛮な夜。だから、責め道具を打ち込むような刑吏がいたり、強制された自白を受け入れてしまう裁判官がいたのである。それゆえにまた、ベンチにしばられ、断末魔の苦しみを味わいながら、櫂の動きにしたがって死んでいく漕役囚がいたのである。しかも、漕役囚を鞭打つ者までもいた。鞭を打つ人間は鞭のことしか頭の中になかったのだ。野蛮な状態というのは、どんなものであっても、一度生じてしまうと、なかなか終わることがない。警視総監はもっともしあわせな人間である。でもぼくは、もっとも有用な人間であるとは言わないだろう。閑暇はあらゆる悪徳の温床である。また同時にそれは、あらゆる徳の温床でもある。

一九一〇年二月二十一日

むことはできない。だから、楽しみを予期した見通しに裏切られるというのはほんとうである。しかし、その欺かれ方には二種類ある。もらいものの楽しみは約束どおりのものなどけっして与えてくれない。反対に、行動する楽しみの方は、いつも約束以上の楽しみを与えてくれる。スポーツ選手は報酬を得ようとしてトレーニングをする。しかしやがて、自分の技が進歩し、困難を克服すると、もう一つの報酬を、つまり自分のなかにあって、自分自身によって決まる報酬を勝ちとる。これは怠慢な者には想像だにできないものである。なぜなら、怠慢な者の目には苦労ともらいものの報酬しか見えないからだ。苦労とその報酬とを天秤にかけて、どちらとも決めかねている。ところが、スポーツ選手はきのうの練習によってやる気になっているから、すでに立ちあがり、トレーニングに入る。そしてすぐに自分の意志と力を楽しむのである。楽しいのはまさにトレーニングをすることだといった具合である。しかし、怠慢な者にはそのことがわからないし、わかるはずもない。よしんば、その話を人から聞いたり、思い出すことがあっても、それを信じようとはしない。だから、楽しみを当てこむ計算はいつも狂ってしまい、うんざりしてしまう。考える動物が退屈する時、怒りが戸口で待っている。しかしながら、奴隷である退屈さは、主人である退屈さほどつらいものではないように思う。なぜなら、行動はどんなに単調きわまりないものであれ、まだ若干支配すべきものが、つく

になると、おもしろくない。電車の運転士はバスの運転手ほど楽しくない。自分ひとりで自由にやる狩猟はすごく楽しいものである。なぜなら、ハンターは自分で計画をきめ、それに従うこともできるし、変えることもできるから。だれに報告する必要もだれに言い訳する必要もないのだ。獲物を狩り出す勢子たちの前でしとめる楽しみなど、これに比較すればまったくくだらないものだ。それでも、射撃のうまい人は、自分の感動や驚きを制することのできる力を楽しむ。だから、人間は楽しみを求め、労苦を避けると言っている人がいるが、それはまずい説明だ。人間はもらいものの楽しみにはうんざりするが、自分で勝ちとった楽しみはすごく好きなのだ。人間は、しかし、何にもまして行動するのが好きなのだ。征服することが好きなのだ。苦しみを受けたり、耐えるのは好まない。だから、行動のない楽しみを選びとるよりも、自分で行動できる労苦をむしろ選ぶのだ。逆説的言い方を好むディオゲネスは、「労苦こそ良きものだ」と好んで言っている。彼の言わんとしているのはもちろん、自分で選んだ、自分で欲した労苦のことである。耐えることだけなら好きな人間などいない。

登山家は自分自身の力を発揮し、その力を自分自身にあかしている。自分の力を感じると同時に、それを考えている。このような最高のよろこびがあるため、雪景色が輝いて見える。しかし、有名な山の頂上まで電車で行った人は、登山家と同じ太陽をおが

45　エゴイスト

ヨーロッパの諸宗教が犯した誤りの一つは、オーギュスト・コントが指摘しているとおり、人間はいつもエゴイストであり、神の救いがなければ救いがたいほどの存在であると教えたことである。この考え方はあらゆるものを毒し、献身までも堕落させた。その結果、もっとも普及している考えの中にも、またもっとも自由な精神のなかにも、自己を犠牲にする者は自分の楽しみを求めているというあの奇怪な臆見が生まれている。つまり「戦争の好きな者がいる。正義の好きな者がいる。おれは酒が好きだ」。アナーキストでさえも神学者である。反抗は屈辱に対応する。こういう考え方はみんな、同じ樽から出た酒である。

ほんとうのところは、若者たちの競技がよく示しているとおり、人間がふつう好むのは楽しみではなく、むしろ行動であるのを知らねばならない。サッカーの試合はなにかといえば、押し合いになぐり合いに蹴り合い、そして最後には黒いあざができて湿布する羽目になる。ところが、これもすべて熱心に望まれたところなのだ。これがすべてなつかしい思い出となるのだ。考えるだけで胸がおどる。足はすでにかけ出しそうになる。

り出すべきものが必ずあるから。それに引きかえ、まったく出来上がった楽しみを受けとる人は、おのずと性悪な人間となる。だから、金持ちの支配は気分によるもので、憂鬱にならざるをえない。労働者の弱みは、自分が希望する以上に満足しているところからくる。彼が意地悪な人間をつくりだしているのだ。

一九二二年十一月二十四日

の目から次の真理を見えないようにしてしまうのだから。人間は快楽よりも行動を愛する。その行動とは、他のどんな行動にもまして規律のある規則正しい行動、そして何にもまして正義のための行動のことである。そこから、結果として、とほうもない楽しみがたぶん生まれるであろう。しかし、行動が楽しみを追い求めるものだと思うのはまちがいである。なぜなら、楽しみというのは行動にともなって生まれるものだから。愛の悦びは快楽の愛を忘れさせる。そのようにできているのだ、この大地から生まれた子は、犬や馬たちにとって神なる存在である人間は。

反対に、エゴイストはまちがった判断によって、自分の運命を捉えそこなっている。彼はすばらしい快楽が得られると思わないかぎり、指一本動かそうとはしない。このような計算の中では、ほんとうの楽しみはいつも忘れられている。なぜなら、ほんとうの楽しみとは、まず第一に労苦であるから。知恵による慎重な計算の中では、苦しみの方がいつも上回るのだ。心配はつねに期待を圧倒する。だからエゴイストは、しまいには病気や老いやまぬがれられない死を考えてしまう。だからぼくの目には、エゴイストの絶望は、彼が自分自身をよく理解していなかったことをあかししている。

一九一三年二月五日

寛大な精神がうれしくて、打撲も苦しみも疲れもものの数ではなくなる。だから、戦争もよく考えねばならない。戦争はゲームとしてはすばらしいものだ。そこでは人間の残酷さよりも寛大さの方が多く見られる。なぜなら、戦争のなかでとりわけ醜悪なのは、戦争の原因をなす奴隷状態と、戦争の後に来る奴隷状態だからだ。戦争による無秩序にともなうのは要するに、もっともすぐれた人たちが殺されていくこと、ぬけ目のない連中の不正な支配が生まれることである。しかし、本能にまかせて判断していると、ここでもまたまちがいを犯すことになる。デルーレード（一八四六―一九一四。フランスの政治家、作家。愛国者同盟の結成者）のような気のよい人たちは、だしにされてよろこんでいるのである。

こういうことはすべて、よく考えてみるに値する。エゴイストがいくらばかにしても、寛大な感情も快楽と苦痛の差引計算に従うとするから、むだだ。「あんたもおめでたい人だね！　名誉を愛するなんて！　しかもそれが他人のためだなんて！」そしてパスカルは、この男はカトリックの天才だが、パスカルはこういう言葉を書いている。この言葉は見かけだけは深い意味をもっているようだが、それだけだ。「われわれは人が語り伝えてくれるなら、よろこんで命を棄てる」。パスカルはまた、人からもらうものは欲しくないと言い、自分で一匹のうさぎをつかまえるのに大変な苦労をしているハンターをばかにした男でもある。神学的偏見はまことに強いものだといわざるをえない。人間

に座り込んで、もう求めることをしなくなるからである。富には二種類ある。手に入れると座り込んでしまうような富はわれわれを退屈させる。われわれの好む富というのは、更にその次の計画や仕事をもとめる富である。それは農夫が欲しくてたまらなくて、努力して最後にようやく手に入れる畑のようなものだ。なぜなら、われわれの気に入るのは見えない力であるから。休息している力ではなくて、行動している力だから。何もしない人間はなんだって好きになれないのだ。そういう人間に、まったく出来合いの幸福を与えてごらん。彼は病人がやるように顔をそむける。それにまた、音楽を自分で演奏するよりも聴く方が好きな者がいるだろうか。困難なものがわれわれは好きなのだ。だから、行く道に何か障害があるたびごとに、血が湧き、炎が燃えあがる。何の苦労もなく得られたオリンピックのメダルなどだれが欲しがるだろうか。だれ一人欲しがる者はいない。負けるリスクがまったくないとしたら、だれがトランプ遊びなどやるだろうか。老いた王さまが家来たちとトランプ遊びをするとしよう。王さまは負ければ怒るし、家来たちもそのことはよく知っている。だから、家来たちが遊びのこつを覚えてしまえば、王さまは絶対負けない。その結果を見たまえ。王さまはトランプを放り投げてしまう。立ちあがって、馬に乗る。狩りに出かける。しかし、王さまの狩りである。獲物の方が王さまの足もとにかけ込んでくる。ノロジカもまた宮廷人なのだ。

46　王さまは退屈する

若干苦労して生きて行くのはいいことだ。波瀾のある道を歩むことはよいことなのだ。欲するものがすべて手に入る王さまはかわいそうだと思う。神さまたちも、もしどこかに実在しておられたら、少しノイローゼになっているにちがいない。過去の時代において神々は旅人の姿をして、家のドアをたたいたようである。おそらく神々は、飢えて渇きながら、恋こがれて少しのしあわせを感じたのであろう。ただし、神々は自分の力能に思い至るやいなや、こんなことはすべて戯れごとにすぎないのだ、その気になれば時間と空間をなくして自分の欲望を消すことができると思っているのである。要するに神々は退屈していたのだ。その後、神々は首をつるか、水に身を投じたにちがいない。さもなければ、眠りの森の美女のように眠っているのだ。幸福というのはおそらくいつも、ある種の不安、ある種の情念、すなわちわれわれを自分自身に対して目ざめさせるような苦痛の切っ先を前提にしている。

ふつうは現実の富よりも想像力によってより大きな幸福が得られるものである。なぜかというと、現実の富が得られると、人はそれですべてが終わったと思い込み、その場

47 アリストテレス

自分でやること、人にやってもらうのではない。そこにはよろこびのいちばん深い意味がある。ところが、砂糖菓子は何もしないでも溶けて美味しいものだから、多くの人はそれと同じように、しあわせも味わえるだろうと思うから、だまされてしまうのである。音楽の楽しみも、ただ聞いているだけで、まったく歌わないならば、大したものは得られない。だから、機略に富んだ人が、音楽は喉で味わうものであって耳ではないと言ったのである。美しい絵から得られる楽しみでさえも、自分で絵を描いたり収集したりしなければ、ほんのいっときのもので、その楽しみも永くは続かないだろう。ただ判断を下しているだけではだめで、求めて行って自分のものとすることだ。人は芝居を見て退屈するものだ、それも口に出して言うよりも以上に。どうしても自分でつくり出す必要がある。あるいはせめて自分で演ずる必要がある。演ずることもまたつくり出すことなのだ。演ずることで楽しみを満喫したあの余興芝居の思い出は誰にでもある。ぼくが思い出すのは、人形芝居のことしか考えなかったあの幸福な数週間のことだ。ぼくは自分のナイフで、木の根っこに高利貸や軍人やうぶな娘や老婆などを彫っていたのであ

ぼくはたくさんの王さまを知っている。小さな国を治めている小さな王さまのことである。家庭のなかの王さま、愛されすぎ、お世辞を言われすぎ、甘やかされすぎ、世話をやかれすぎた王さまのことである。王さまには欲しいなと思っている暇など与えられないのだ。まわりの注意深い目が王さまの心をすばやく読んでしまう。そこでこれら小さきユピテルたちは、どうしても雷を落としたくて、自分で邪魔物をつくり出している。気まぐれな欲望をこしらえて、一月の太陽のように気が変わり、何をおいてもというほど熱望してみたいものだと思い、結局は退屈からのがれるために、でたらめなやり方に陥るのだ。もし神々が退屈のあまり死んだのでなければ、われわれにこんなつまらぬ国の支配をまかすのではなく、山坂越えてわれわれを導いてください。井戸のような目と鉄床（かなとこ）のような額をもち、道に自分の耳の影が映っただけでもう動かなくなるようなアンダルシア産のしたたかな雌ラバを、われわれの道連れにつけて欲しいものを！

一九〇八年一月二十二日

ある」と彼はいうのだ。これはすごいことばだ。このことばは表現の完璧さのゆえに鳴り響き、学説をよそにしてわれわれの心を捉える。幾度否認してもついに無駄であった、この驚くべき天才哲学者を理解しようとするならば、この点をこそよく見なければならない。何事をやるにしても、ほんとうの進歩をあかしするのは、人がそこでどんな楽しみを感ずることができるかである。そこからわかるのは、仕事は唯一のよろこび、それだけで満たされたよろこびであることだ。わたしが言っているのは、自分で自由にやる仕事のことで、それはつまり、能力を示すわざであると同時に、能力が出てくる源でもある。くりかえすことになるが、人にやってもらうのではない、自分でやることだ。

誰でもあの石工たちが暇をみては自分の小屋を建てているのを見たことがあろう。石工たちが石を一つひとつ選んでいるところを見ているはずだ。この楽しみはどんな手仕事にもある。仕事をしている職人は何かをつくり出し、いつも学んでいるからだ。しかし、まったく機械的な作業は退屈をもたらすばかりでなく、時には大きな混乱となることがある。職人が仕事の分け前にあずかることがなく、ただいつも同じことを繰り返しているだけで、自分のやっていることから何も得ることがなく、それをもとにさらに学ぶこともないような時には。これとは反対に、やらねばならないことが次から次へと出てきて、一つの収穫が次の収穫を約束すること、これが農夫の幸福である。わたしが言

る。他の者は人形に衣装を着せていた。見物人のことなどまったく眼中になかった。見物人には批評することができた。批評するのは、つまらぬ楽しみだが、でも見物人もそこで何かをつくり出すことができたので、それも楽しみではあったのだ。トランプをする者はたえず何かをつくり出している。ゲームの機械的な流れを変えているのだ。ゲームのやり方を知らない者に、ゲームは好きですかなどと訊いてもだめだ。ゲームのやり方がわかるやいなや、政治も退屈ではなくなる。しかし、ゲームのやり方を学ばなければならない。それは何事においても同じなのだ。幸福になる仕方を学ばなければならない。

幸福はいつもわれわれの手から逃げて行くといわれている。人からもらう幸福については、それは正しい。人からもらう幸福などは、まったく存在しないからだ。しかし、自分でつくる幸福というのはけっしてだまさない。それは学ぶことだから、そして人はいつも学んでいる。知ることが多くなればなるほど、学ぶこともますます多くなるのだ。そこからあのラテン語を学ぶ楽しみが生まれる。それには終わりがない、否、むしろ知識の進歩によって楽しみが増大している。音楽をやる楽しみも同じである。だからアリストテレスはあの驚くべきことばを吐いている。真の音楽家とは音楽を楽しむ者のことであり、真の政治家とは政治を楽しむ者のことである、と。「楽しみは能力のしるしで

48 楽しい農夫

働くことはもっとも楽しいものであり、働くことはまた、もっともつらいものである。自由に働くのはもっとも楽しいが、奴隷のように働くのはもっともつらい。もっとも自由な労働というのは、労働者自身が自分のもっている知識と経験にもとづいて調整する仕事のことである。たとえば、ドアをつくる指物師の仕事である。しかし、自分のつくったドアを自分が使用するとなると、若干の相違が出てくる。なぜなら、その場合には将来のことを想定した実験となるからだ。木材の耐久性を調べることもあるし、割れ目ができても予想したことならそれがかえって目を楽しませる。忘れてならないのは、この知性のはたらきは、ドアでもつくらない時には、激情のたねを播くことである。自分の仕事の出来ぐあいを自分の目でたしかめながら、それを続けていくことができ、事物の命令にだけしたがい、事物の教えを楽しく受け入れているかぎり、人はしあわせである。自分自身が操縦する船をつくる仕事なら、もっとさらにしあわせである。舵を動かすたびごとに仕事の出来ばえがよくわかり、気を使ったところはどんな小さなことも見つけてしまうものだ。郊外に行くとよく見かけることだが、自分で一軒家を少しずつ暇

っているのは自由な農夫、自律の野人である。しかしながら、かなり骨の折れるこのような幸福に対しては、あらゆる方向から猛反対が起こる。それはいつも人からもらう幸福が欲しいという、救われることのない考えからである。なぜなら、ディオゲネスの言うように、労苦こそよいものだから。しかし、精神はこの矛盾を担うことをよしとはしない。精神はこの矛盾を乗り越えなければならない。くりかえすことになるが、精神は思惟によってこの労苦を楽しみとしなければならない。

一九二四年九月十五日

せな奴隷である。どんな召使いたちも、自分の思いどおり働くことができ、長くいられる保証があれば、我慢することができる。この規則を守れば、人をよく使うこともやさしいし、他人のための仕事で生きていくのもやさしいのである。ただし、主人は退屈するであろう。だから、賭け事やオペラ女優にうつつを抜かすことになる。社会の秩序が乱されるのは、いつも退屈さからだ。また退屈さからくるばかげた行為からである。

現代人もゴート人やフランク族やアラマン族や他のおそろしい略奪者たちと大した違いはないのだ。大事なことは退屈しないことである。朝から晩までその気になって働いていたら、けっして退屈することはないだろう。こうして集団農業は、退屈した人たちが蜂起してもまばたき程度のものに収まってしまう。しかし、大量生産方式の労働は、同じような解決策をもたないことを言っておく必要がある。ぶどうの木を楡の木にからませるように、工業を農業に結合させる必要があるだろう。すべての工場が田園に位置し、工員はみんな、太陽のもとに自分の土地をもち、自分で耕すのである。このような現代版サラント（「ユートピア」の意）によって、変化を求める気持ちはより平静な気持ちによって相殺されるだろう。この種の試みは、鉄道の転轍手がつくるささやかな庭に見てとれないだろうか。その庭では花が、舗道の石のすき間に生えてくる草のようにねばり強く、貨物の流れのかたわらで咲いている。

一九二二年八月二十二日

にまかせて、手に入る材料を使い、作っている人がいる。宮殿だってこれほどの幸福を与えてはくれない。また君主のほんとうの幸福は、自分で計画しそれを作らせることである。しかし、何にもましてしあわせなのは、ドアの掛け金に自分が打った金鎚のあとを見出す人間である。その時、労苦はまさに楽しみとなっている。人はだれも、まったく単調な、言われた通りやる仕事よりも、困難な仕事でも自分の好きなように作り出し、まちがえる仕事の方を好むであろう。監督が邪魔ばかりしたり、ときどき中断させたりする仕事はいちばんつらい。世にもっとも哀れなものは、なんでもやらされるお手伝いさんで、料理をやっているのに床のそうじをやれと言われた時である。しかし、そういう人たちのなかでも最も元気のいい者は、自分の仕事を支配することができて、そうして楽しんでいる。

したがって農業は、自分の畑を耕すならば、もっとも楽しい仕事である。仕事からその結果へ、また始めている仕事からその次の仕事へと思いは絶えず前進して行く。収穫そのものも人手の痕の刻まれた土地自体ほどには現前せず、それほど絶えず知覚されない。自分で敷きつめた砂利の上を思いどおりに車で通るのは計り知れないほど大きな楽しみである。さらに、いつも同じ畑で働けるという保証があれば、もう儲けの方などどうでもよくなる。だから、土地につながれている奴隷は、他の奴隷に比較すればしあわ

のだ。たとえば、彼らは一つの決められた仕事を終えると、休むことができる。そう思うと生き生きと楽しく働くのだ。一日の終わりに、おそらく半時間休めるというこの考えによって、彼らは働く気になり、早く仕事を片付けることにみんなが同意するのだ。しかし、いったん課題が与えられると、今度は課題そのものが楽しいものとなる。すなわち、つくり出す楽しみ、現実のものにする楽しみ、欲する楽しみ、そして仕事をする楽しみが、その半時間を期待する楽しみよりもはるかにまさるのである。半時間といったところで、やはり牢獄の半時間にすぎない。だから、仕事の後の半時間がそれなりにいいものであれ、それもまた一生懸命やった労働のほてりが心にあるからだと、ぼくは想像する。人間の感じるもっとも大きな楽しみは、おそらく、競技をみればよくわかるように、むずかしい自由な仕事を、みんなで力を合わせてやるところにある。

教育者のなかには、子どもを一生の間怠け者にしてしまうような者がいる。理由はかんたんだ。いつもいつも勉強させたがるからだ。そうすると、子どもの方はだらだらと勉強する習慣を身につけてしまう。すなわち下手な勉強をおぼえてしまう。そこから四六時中勉強に迫られた何か重苦しい疲労感が出てくる。それに対して、仕事と疲れとを分けるようになると、仕事も疲れも心地いいものとなるのだ。だらだらとやる勉強は、ただ歩いて空気を吸っているだけのあの散歩と似ている。散歩をしながら、ずっと疲れ

49 労働

ドストエフスキーの『死の家の記録』のなかに、われわれは徒刑囚たちのありのままの姿を見ることができる。そう言ってよければ、大げさな見栄や欺瞞はすべて剝ぎ取られているのだ。まだ必要にせまられた欺瞞が残っているが、人間の奥にあるものが時どき姿をあらわしている。

徒刑囚たちは働いているが、その仕事はほとんど役に立たないことが多い。たとえば、彼らは古い船を解体して薪を作っているが、この国では薪は一文にもならないのだ。彼らもそのことをよく知っている。また、一日中ずっと何の期待もなく、働いているものだから、怠惰となり、憂鬱となる。仕事も下手だ。しかし、一日分の仕事を、しかも労多きむずかしい仕事を与えるならば、すぐに彼らは上手になり、みごとな腕前をみせ、楽しそうになる。雪かきのような、実際に役に立つ仕事の場合にはもっとますますそうなる。この驚くべきくだりをよく読まねばならない。そこには注釈など一切しないで、事実だけを伝えた描写がある。役に立つ仕事はそれ自体において楽しみであるのが、その中でよくわかる。仕事から得られる利益によってではなく、仕事それ自体においてな

50 始めている仕事

始めている仕事にはこれからやろうとする動機よりもずっと深い意味がある。協同の仕事がやりたいというかなり強い動機があって、一生涯それを頭のなかであれこれ思いめぐらしながら、ついに協同する仕事は何もやらなかったという人がいる。ところが、協同組合の活動には発起人が要る。控え石は、どんな仕事であれ、それを続けなければならない十分な理由なのだ。だから、きのうの仕事のなかに自分の意志の確かなしるしを見出す人はさいわいである。

人間はいつも、何かの善を目指すものだというが、ぼくは、理性的な目標に対しては人間は怠惰なものだと思う。人間の想像力は、まだ全然日の目を見ていない作品に関心を持たせるほど強い力を持ってはいない。したがって、良い仕事だと思いながら、けっしてしない仕事がわれわれの前にはたくさんある。想像力によってわれわれはいつもがっかりさせられている。それもさまざまな方法で。その主な理由は、想像力はわれわれの心に大きな、リアルな動揺をもたらすので、われわれはそれを、事実を告知するものだと思うからである。しかし、この不毛な動きはそれだけのものとして終止するものだ。

っぱなしである。家にもどると、もう疲れがなくなっている。それに対して、人はもっともつらい仕事をしている時、疲れを感じないもので、心も軽やかとなる。そうして全きくつろぎが訪れ、最後にはよい眠りを楽しむのである。

一九一一年十一月六日

のような形象をすべて考えた後、描いたとは、ぼくには断じて思えない。なぜなら、彼はそれをやらねばならない状況に追い込まれて、「でも、これは自分の仕事ではないのだが……」と言っているだけだから。ただ単純に彼は描きはじめた。すると、諸人物があらわれてきた。描くというのはそういうことだ。つまり、私の意味では、自分が何をやっているのか発見することである。

幸福は自分の影のようにわれわれが追い求めても逃げて行くと人は言う。しかしたしかに、想像された幸福はけっして手に入れることができない。でも、つくり出す幸福というのは、想像されないもの、想像できないものなのだ。それは実質的なものでしかあり得ない。そのイマージュだけを描くことは出来ない。物書きのよく知るように、美しい主題などない。いや、ぼくはさらにこう言いたい。美しい主題には気をつけなければならない。眺めていないでそれにすぐに近付き取りかからねばならない。幻影をなくすために。それが希望などは棚にあげて、信念を持つことである。壊すこと、そしてつくり直すこと。おそらくその時、わかるであろう、小説とその小説の書かれる契機となったほんとうの冒険との間には驚くべき相違がつねにあることが。絵かきよ、モデルの微笑に気をよくして時を浪費することなかれ。

一九二二年十一月二十六日

心の揺れはつねに現在のもので、計画はつねに未来のものである。だから、怠惰なものは「いつかやるだろう」と言うのだ。ほんとうは「今やっているところだ」と言うべきだろう。なぜなら、行動はいつも未来の意味を多く含んでいるから。未来は見通すことができない。仕事もまたそうなのだ。なぜなら、仕事によって開示された未来は、われわれが考えていたような未来、つねにもっと美しい未来ではまったくないからだ。ところが、人は誰ひとりとしてそのことを信じようとしない。空想家たちは、自分の考えている計画は他の人びとがやっている仕事よりもずっと美しいとくりかえし言っている。

しかしながら、あの仕事に専念した幸福な人びとをごらんなさい。みんな始めている仕事に精を出している。それは食料品店を繁盛させることであり、切手を集めることである。つまらぬ仕事などはないのだ、いったんやり出したならば。それは人の知るとおりだ。彼らはみんな、仕事を想像するのはもういいと言い、控え石の発見に必死なのである。刺繍もはじめの幾針かはあまり楽しくもない。しかし、縫い進むにつれて、その楽しみが加速度的に倍加する。だからほんとうに、信じることが第一の徳であって、期待することは第二の徳にすぎないのだ。なぜなら、何ひとつ期待することなく始めなければならないからだ。期待がやってくるのは、仕事がはかどって、状況が進展してからである。仕事に即して現実の計画が生まれてくるものだ。ミケランジェロは頭の中であ

国は医科大学と同じように、生きる知恵を教える学校を開校すべきであろう。どうやって教えるのか。ほんとうの学問によって、すなわち事物・自然の観想と、宇宙と同じ広さをもつ深い詩情を教えることによって。人間の眼ははるかな水平線をながめる時、やすらぎを得るように出来ている。そのことはわれわれに大いなる真理を教えているのだ。思想は身体を解き放ち、身体を「大宇宙」つまりわれわれが生まれてきた真の故国にかえしてあげねばならない。われわれのもっている人間の運命と、身体の諸機能との間には深いつながりがあるのだ。動物は、周囲の事物がそっとしておいてくれれば、すぐに横になって眠ってしまう。人間は考える。もしそれが動物のような思考ならば、人間にとって不幸である。自分の苦痛や窮乏がよりいっそう深刻なものとなり、不安と期待とに責めさいなまれる。そのために、身体の緊張が休まることなく、動揺が続き、かっとなったり、抑圧されたり、まったく想像力の欲しいままになってしまう。自分の周囲の事物や人びとをたえず疑い、その動静をさぐっている。だから、その状態から解放されたいと思うと、書物の世界に入り込む。書物の世界もまた、閉じた世界、あまりに目に近い、あまりに情念の近くにある世界なのだ。思考がとらわれて、身体がうめく。なぜなら、思いが縮まるということと、身体が自分自身とたたかうこととは同じことであるから。野心家は何回でも彼の演説をやり直し、恋におちた人間は何度でも同じ願い

51 遠くを見よ

憂鬱な人に言いたいことはただ一つ。「遠くをごらんなさい」。憂鬱な人はほとんどみんな、読みすぎなのだ。人間の眼はこんな近距離を長く見られるようには出来ていないのだ。広々とした空間に目を向けてこそ人間の眼はやすらぐのである。夜空の星や水平線をながめている時、眼はまったくくつろぎを得ている。眼がくつろぎを得る時、思考は自由となり、歩調はいちだんと落ち着いてくる。全身の緊張がほぐれて、腹の底まで柔らかくなる。自分の力で柔らかくしようとしてもだめなのだ。君の意志が君の中にあって、君に対して注意を払い、すべてをあらぬ方へ引っ張り、しまいには自分の首をしめてしまう。自分のことなど考えるな、遠くを見るがいい。

憂鬱は正真正銘の病気なのだ。医者がその原因をさぐり当て、直すことも時にはあるが、この治療そのものが注意を身体に引きもどし、いいつけを守って養生しようと気を使うことによってその効き目も薄れる。だから、賢明な医者なら、哲学者のところへ行かせる。しかし、哲学者のところへ行って、何を見つけるだろうか。読みすぎの人間、近視眼的な思考をする人間、つまり自分よりももっと憂鬱な人間である。

52 旅行

このごろのヴァカンス・シーズンになると、どこもかしこも、あの名所から名所へと急ぐ人たちでいっぱいである。もちろん、短期間にたくさんのものを見たいと思うからである。見てきたところを人に言うためなら、これ以上の方法はあるまい。なぜなら、引き合いに出す土地の名をたくさん持っていた方がいいのだ。それは話の間をもたせてくれる。では、それが自分のためになっているか、ほんとうに見たといえるかとなると、ぼくには彼らのやり方はよくわからない。ものをかけ足で見てまわったら、何でもよく似た同じものに見えてくる。急流の景色はどこで見てもみんな急流である。だから、全速力で世間を馳けめぐる人が、おしまいに始めのころより思い出が豊かになることはめったにない。風景のもつほんとうの豊かさは、その細部のなかにある。見るというのは、これら細部をゆっくり見てまわり、ひとつひとつの前でしばらく立ちどまり、そしてあらためて、もう一度全体を一目でとらえることである。ほかの人たちにはこんなことなどさっと出来て、次のものに走って行って、またこれをくりかえすことができるのかどうか、ぼくにはわからない。ぼくには、とにかく、それはできない。毎日、美しいもの

をくりかえす。体調よくいたければ、思いが旅に出て眺めている必要がある。

学問はわれわれをそこへ導いてくれるだろう、野心にとりつかれた学問でなければ、むだ口をたたく学問、いらいらした学問でなければ。つまり学問がわれわれを書物の世界から解放し、われわれの目を水平線のかなたに向けるならば、である。したがって、学問とは知覚でなければならない、旅立ちでなければならない。一つのものは、そこにみられるほんとうの関係を通して、われわれをもう一つのものへ、さらに他の無数のものへと導くものである。こうした河の渦巻きを見ることが君の考えを風に、雲に、遊星に運んで行く。ほんとうの学問は自分の目のすぐ近くにある小さなものにはけっしてもどらない。なぜなら、知るというのは、どんな小さなものでも全体とつながっているというその構造を理解することであるから。どんなものでもその存在理由を自己のうちにはもっていない。こうして正しい動きによって、われわれは自分自身から遠ざかる。そのことは眼と同じように、精神にも健康をもたらす。そこでは思想は自分の領分であるこの宇宙でやすらぎを得るし、また万物と結ばれている身体の働きとも調和するであろう。キリスト者が、「わがみ国は天にある」と言っているが、彼は自分がどんなにうまく言っているのか気づかなかった。遠くを見たまえ。

一九一一年五月十五日

い断崖絶壁である。

一九〇六年八月二十九日

をながめることのできるルーアンの人たちはしあわせだ。たとえば、サン・トゥーアンのカテドラルを、自分の部屋の中にある絵のように、ながめることができるから。

それに引きかえ、一度だけある美術館を訪れたとか、ある地方を見物したという場合、印象がぼやけてしまい、しまいには輪郭のぼやけた灰色の絵のようなものになってしまうのはほとんど避けられない。

ぼくの好きな旅というのは、一度に一メートルか二メートルしか行かないような旅である。立ちどまっては、またあらためて同じものをちがう角度からながめる旅である。ちょっと右か左に寄って休んでみる、するとすべての景色が一変する、そんなことがしばしばだ。ぼくにはその方が百キロ行くことよりもずっとすばらしい。

もしぼくが急流から急流を見てまわったら、ぼくはいつも同じ急流を見出す。しかし、ぼくが岩から岩を見てまわったら、同じ急流が一歩ごとにちがったものとなる。それからすでに見たものにもどるなら、そのものがほんとうに、はじめて見た時よりも以上にぼくの心をとらえる。そして実際のところ、そのものははじめてのものなのだ。習慣の中に眠り込まないためには、ゆたかで変化に富んだ一つの光景を選びさえすればよい。見る目さえ深まって行けば、風景の方は無尽蔵のよろこびを秘めていることを知らねばならない。それに、どこにいても星空をながめることはできるのだ。星空こそすばらし

でいいのに、われわれは一時間ももち続ける。一時間でいいのに、一日も十日も、数か月も数年ももち続けている。足の痛いある人は、きのうも痛かったことを考える。かつても痛かったことを思い出し、明日も痛むだろうと考える。彼は一生涯うめき続けている。ここでは知恵は大した役に立たないのは明らかだ。なぜなら、今おそっている苦しみを消し去ることはいつだってできないからだ。しかし、精神の悩みである場合には、過去の後悔と未来の恐怖とがなおれば、まだ残っているものがあるだろうか。

女からふられ、夜の目も寝ず、ベッドの中で身をくねらし続け、手の込んだ復讐を思いめぐらしているこの恋におちた男は、もし彼が起きてしまった過去のことも未来のこともほんとうに考えなくなったとしたら、もう何も悩むことはないであろう。失敗してほぞをかんでいるあの野心家は、もし彼が過去を思い出すことも、未来をつくり出すこともないとしたら、どこに苦痛を見つけるのだろうか。自分で〔坂を転がり落ちる〕大岩を押し上げては責め苦をくりかえし続けているあの伝説のシシュフォスをみる思いがする。

そんな風に自分を苦しめているすべての人に、ぼくは言いたい。現在のことを考えよ、と。今一刻また一刻と継続している君の生を考えよ、と。この一分の後には必ずつぎの一分がやってくる。したがって、君が現に生きているのだから、今生きているように生

53 短剣の舞

ストア派の精神の強さはだれでもよく知っている。ストア派は人間の情念について、すなわち憎悪、嫉妬、不安、絶望について考えている。そうしてついには、すぐれた馭者が馬を御するように、みごとに情念を制御している。

彼らの思想の中で、ぼくがいつも気に入っているのは、しかも実際に何度となく役に立ったものは、過去と未来をめぐる論である。「われわれが耐えねばならないのは現在だけである。過去も未来もわれわれを押しつぶすことはできない。なぜなら、過去はもう実在しないし、未来はまだ存在しないのだから」。それはとにかく、ほんとうである。過去と未来が存在するのは、ただわれわれがそれらを考える時だけである。過去も未来も人間の臆見であって、事実ではない。われわれは自分で自分をさんざん苦しめておいて、悔恨や不安をこしらえているのだ。ぼくはたくさんの短剣をつぎつぎとつなぎ合わせていく曲芸師を見たことがある。それはまるでぞっとする木のようなもので、曲芸師はそれを自分の額の上にのせて、バランスをとっていたのだ。それと同じように、われわれは自分の悔恨や不安をつぎつぎに加えてもっている軽率なアーチストなのだ。一分

54　大げさな言い方

日なたぼっこをしたり、重い足どりで家路につく幽霊みたいな人に、時どき道で出会う。こうした極度の老衰や差し迫った死を見た瞬間、たちまちわれわれの心は耐えがたい嫌悪感におそわれる。「どうしてあの人間の形をした物体はまだ生きているのだろうか」と言って、その場を逃げるのである。だけど、そういう人もまた、生きたがっているのである。日なたぼっこをしているのだ。死にたくはないのだ。われわれの思考にとってつらい道である。しばしば思考が、そこでつまずき、傷つき、いらだち、そして思考は誤った道に入りこんでしまうのである。遠からず入りこむ。

そういう光景を目にしたあと、注意深く試行錯誤しながら正しい思考の道をもとめていたとき、一人の友人がぼくの前にあらわれた。まちがった雄弁におののき、目の中に地獄の炎を燃やしている。とうとう吐きすてるように言った。「悲惨なことばかりだ。元気な奴らが病気や死をこわがっている。おそれることに全力をあげている。こわいものは何ひとつ見逃さないのだ。恐怖という恐怖を全部味わっているのだから。あの病人たちを見るがいい。かれらは死んだほうがましなんだ。しかし、そんな気配はまったく

きて行くことは可能なのだ。未来のことがこわいだって？　君は自分の知らないことを語っているのだ。出来事というのは、われわれの期待どおりには絶対行かないものだ。君の苦痛については、まさに今苦痛は大変ひどいものであるがゆえに、必ず軽くなるだろうと言うことができるのだ。すべてのことが変わり、すべてのものが過ぎ去る。この格言のために、われわれはよく悲しんだものだ。時にはなぐさめられることもある、めったにないことだが。

一九〇八年四月十七日

自分が自分らしくない狂気にとらわれていたことを知っているから。一年もたてばそのことを心から笑いとばすであろう。そこからぼくが結論するのは、涙やすすり泣きの衝動や胃や心臓やおなかやはげしい身ぶりや筋肉の不必要な収縮が推論に入ってくるやいなや、われわれは情念によってだまされてしまうことだ。単純な人はなんどでもそれにひっかかる。でもぼくは、このまやかしの光がやがて消え去ることを知っている。ぼくとしては即座に消したいのだ。ぼくにはそれができる。大げさに言わなければよいのだ。ぼくは自分の声が自分の中でどんな力をもっているかよく知っている。だからぼくは自分自身に対して悲劇役者のようにではなく、全くおだやかに話したいのだ。調子についてはである。それからまたぼくは、病気や死は万人共通の自然なことがらであり、これに逆らうのはおそらく、まちがった人間らしくない思考であることも知っている。なぜなら、ほんとうの人間らしい思考はいつも、何らかの仕方で人間の自然な状況に、そしてまた事物の自然な流れに符合しているはずだと、ぼくは思うからである。そのことはすでに、軽率にそのような不平不満に入りこんではならないという十分強い理由となっている。不平不満が怒りをはぐくみ、逆にまた怒りも不平不満をはぐくむことになるからだ。地獄のなかのぐるぐる回りだ。だが、悪魔であるのは自分自身であり、フォークをもっているのも私なのだ。

一九二一年九月二十五日

ない。死を押し返しているのだ。あの不安が苦痛をさらにいっそうひどいものにしている。それほど生きることがつらいのなら、どうして死などを恐れるのか、とお前さんは言う。だが、お前さんも知っているとおり、死と苦しみとを同時に憎むことだってできるものなんだ。こうして最期を迎えるのだ」。

この男の目には、自分の言っていることは絶対確実なように見える。このぼくだって、自分がそうだと思ったら、同じように思い込んだであろう。不幸になるのは何もむずかしくない。ほんとうにむずかしいのは、幸福になることだ。だからといって、幸福になろうとしないことの理由にはならない。まったく逆なのだ。ことわざにもある通り、すばらしいことは何でもむずかしいものなのだ。

ぼくもまた、いろいろな意味で、このような地獄の雄弁によく気をつけねばならない。この力には自明そうにみえるまやかしの光があって、だまされてしまうのだ。いったい何度ぼくは、自分に自分で、救いがたい不幸にあると断言したことか。どうしてかって？　それは、ちょっと暗くなったある女の眼のためだったのだ。おそらくまぶしかったか疲れていたか、あるいは空の雲が低く垂れて暗くなっていたのだ。せいぜい、くだらぬ思いにとらわれていたか、ちょっとむしゃくしゃしていたか、なにか虚栄心の計算のためか、それをぼくは顔色や言葉から察したのだが。なぜなら、われわれはだれも、

そういうわけで、結果だったものが原因となる。ちょうど子どもが、自分で友だちをライオンや熊の姿に扮装させておきながら、その姿がほんとうにこわくなってしまうようなものである。

もしある人が自然な悲しみから、自分の家を柩台のような形に装飾するならば、彼はどこを見ても心の痛みをずきずきと想起するので、結局ますます悲しくなるだけである。それはわかりきったことである。同じことがわれわれの思想についても言えるのである。もしわれわれが、不機嫌のあまり、人間を黒一色に描き、政治を腐敗の姿で描いたとしたら、今度はそういうデタラメ書きでわれわれは絶望に陥る。もっとも賢い人がもっとも巧みに自分をだますことが多い。自分の大げさな言い方はあとをひき、道理にみえるからである。

いちばん厄介なのは、この病気が伝染することである。まるで精神のコレラみたいに。ぼくの知っている人たちの中には、その人たちの前では、近ごろの公務員は全体として、昔よりも正直で勤勉になったなどとはとても言えない人がいる。情念のままにふるまっている人たちにはまことに自然な雄弁と、人の心をとらえる誠実さとがそなわっていて、満堂の聴衆をひきつける。そのような状況では、正しい考えを言おうとする人間が、ばかかひやかしの役を演ずることになる。こうして、泣き言が一個のドグマとして認めら

55 泣き言

この年の始めにあたって、すなわち太陽がもっとも高くまで昇り、もっとも低くまで降りてくる間の、この一年のために、皆さんの上にお祈りすることは、それは何もかもますます悪くなっていくと考えないこと、また言わないことである。「金銭に対するあの貪欲さ、快楽に対するあのすさまじい執念、すぐに義務を忘れるあの厚顔さ、若者たちのあの生意気さ、盗難、前代未聞の犯罪、そしてとうとう季節までもおかしくなって、まだ冬の真っ只中だというのになまあたたかい夜が続いている」。こういう文句は、人間の世界と同じくらい古くからあり、くりかえされてきたことばである。それの意味するところはただ、「自分の胃や自分のよろこびはもう二十歳のそれではない」ということだ。

もしそういう言い方がただ心に感じたままを言ったものにすぎないとしたら、こんな言い方も我慢できる。病気になった他人の悲しみなら我慢できるように。しかし、ことばはそれ自体においてとほうもない力をもっている。悲しみをあおるやら、増大させるやらして、まるで外套でも拡げたように何もかも悲しみで包み込んでしまうのである。

56　情念のみごとな説得力

情念のみごとな説得力にわれわれはたいてい、まいってしまう。情念のみごとな説得力とは、われわれの身体のやすらぎと疲労、興奮と衰弱とに応じ、われわれの想像力が展開するところのあのまやかしの悲しみとよろこび、魔法の幻灯の数々である。情念にそう言われると、われわれはまったく自然と事物や自分の仲間たちを非難するようになるのだ。ほんとうの原因はしばしば、ささいな、取るに足らぬものであるのに、それを見抜き、変えようとしないのである。

いよいよ試験シーズンの到来である。この時期には、灯火のもとで勉強し目を疲れさせ、頭全体に拡がる痛みに悩んでいる受験生も少なくない。そんな悩みは大したものではなく、ほんとうは休息し睡眠をとればすぐになおるのだ。ところが、ナイーヴな受験生はそんなことなどまったく考えもしない。彼がまず確認するのは、のみ込みがおそいこと、思考が五里霧中であること、著者の考えはこちらに伝わる代わりに、紙の中に留まっていることである。そうすると、試験のむずかしさや自分の能力のなさを思って悲しくなる。そして、過去に目を向けながら、あの憂鬱な五里霧中の頭で思い出を一つひ

れ、やがてそれが礼儀作法となってしまうのである。

きのう、ある絨毯職人が話の前おきになにげなくこう言った。「季節感がなくなりましたね。この陽気を冬だと、だれが思いますか。まるで夏のようだから。いったい何がどうなっているのかもうわかったもんじゃない」。彼は同じことを昨夏のひどい暑さのあとでも言っていた。彼だって人なみに、昨夏のひどい暑さは感じたにちがいない。ところが、決まり文句は事実よりも説得力があるのだ。わが絨毯屋を笑っている諸君も、自分自身に気をつけたまえ。なぜなら、すべてが一九一一年の真夏と同じように、はっきり記憶に残るものではないのだから。

そこでぼくの結論。よろこびは権威的ではない、若いがゆえに。一方、悲しみは王座にあって、いつも過度にあがめられている。そこから、言わねばならない。悲しみに抵抗しなければならない、と。なぜなら、よろこびが良いものだというばかりでなく——そのことだって、すでに一応の理由であろう——公平でなければならないからである。いつも雄弁で、いつも権柄ずくな悲しみは、人が公平であることをけっして望まない。

一九一二年一月四日

わがっているようなものである。単なる怒りがしばしば、しまいには激しい情念と化してしまうのは、そういう仕掛け（メカニスム）なのだ。ささいな原因が、ただ心臓と筋肉の急激な動きだけによって一挙に拡大されるのである。しかしながら、こうした動揺をすべて静める方法は、歴史家のように考えて、受けた侮辱や不平不満や要求の総ざらいをすることではまったくない。それはわかりきったことだ。それでは万事が熱に浮かされた時のように誤った照明を受ける。ここでもまた、よく考えて、情念の巧妙な説得力を見抜いて、それを信じ込まないようにしなければならない。「あの見かけだけの友人め、おれを軽蔑してばかりいる」とは言わないで、「こんなに興奮していては、よくわからない。正しい判断がもてない。おれは自分に聴かせる台詞を朗読している悲劇俳優にすぎないのだ」と言うがいい。そうすれば、見物人がいないから、芝居小屋はあかりを消すだろう。派手な装飾もはや下手な絵にすぎないだろう。これがほんとうの知恵である。不正が生み出す詩情に対して自分を守るほんとうの武器である。残念ながら、われわれは熱に浮かされて自分の苦しみを人に与えることしか知らぬ安っぽいモラリストの意見に引きずり廻されている。

一九一三年五月十四日

とつたどりながら、自分は役に立つことも大してしなかったこと、何もかもやり直さねばならないこと、何もはっきりしてこないし整理されてもいないことに気づく、あるいは気づいたと思い込む。そうして未来をながめ、時間が短いこと、勉強がなかなかはかどらないことを考える。それではと本にもどり、頭をかかえ込む。そうではなく、横になって眠らねばならないのだ。悩んでいるため、治療法が見えないのだ。まさに疲れ切っているがゆえに、彼は勉強から離れられないのである。ここで彼に必要なのは、ストア派の深い知恵であろう。この知恵はデカルトとスピノザによってさらに解き明かされているものだ。想像力があかしているものについてはつねに疑い、よく考えて、そこで情念の巧妙な説得力を見抜いて、それを簡単に信じ込まないようにしなければならない。そうすることによって、突然、深刻な悩みは消え去るであろう。なぜなら、ちょっとした頭痛や目の疲れは辛抱できるもので、長続きもしないから。しかし、絶望はおそろしいものだ。ひとりでにその原因をひどくするから。

ここに情念の落とし穴がある。すっかり怒っている人間は、自分自身に対して感動的な悲劇を煌々たる照明のもとに演じてしまうのである。つまり、自分の敵がおかしたあやまち、策略、準備、侮辱、将来に対する計画を描き出す。すべてが怒りによって解釈され、怒りがますますつのる。まるで画家がフリアイ（復讐の二神格）を描き、自分でそれをこ

官は、ある事件を見込みなしとすっきりとした決定をくだすこともできるし、そう決定できなくても、別に食欲がなくなりもせず、安眠が妨害されることもない。混迷した思惟のなかでわれわれが悩むのは、混迷した思惟そのものではない。むしろそういう思惟に対する一種の戦い・抵抗である。あるいはそう言ってよければ、事物が今あるような姿であって欲しくないという思いなのだ。情念のはたらきの中には必ず、取り返しのつかなさに対する抵抗のようなものがある、とぼくは思う。たとえば、ある男が、ばかな女、あるいは虚栄心の強い女、あるいは冷たい女が好きになり苦しんでいるとする。それは彼女が今あるような彼女であって欲しくないと執拗に希求するからである。同様に、破滅が避けられず、本人もそれをよく知っているのに、情念の方は期待をもとうとし、ある意味で思惟に対して、もう一度同じ道をたどり直して、どこかちがう場所に通じる分岐点を見つけるように命じているのである。しかし、道はすべて通り過ぎた道だ。人はまさしくいる所にいるのだ。時間という路上では、後もどりすることも、同じ道を二度行くこともできないのだ。だから、強靱な精神をもつ人間は、自分が今どこにいるのか、何が起きてしまったのか、まさに何が取り返しのつかないことなのかを自分で考えて、そこから未来に向かって出発するような人だと、ぼくは考える。しかし、これはやさしいことではない。小さなことがらでよく慣れておく必要がある。そうしないと、情

57 絶望について

「悪い奴はこんなことくらいではくたばらぬ」と、ある人が言った。正直な人間が自分の名誉が傷つけられたと思い、自殺して、自分が侮辱されたと思っていた人たちからその死を惜しまれたりすることは、昔からよくある話である。このような悲劇はわれわれの記憶からなかなか消えない。そこで、ぼくは考える。正しい、理性的な判断をくだそうとする人間が、どうしてしばしば、ただ他人から攻撃され負けたというだけである種の情念に屈してしまうのだろうか、と。また絶望と戦うためにはどう考えたらよいのだろうか、と。

ある状況について判断をくだし、むずかしい問題を提出し、その解決法をさがすが見つからず、解決のめどが立たず、まるで調教場の馬のようにいつまでも同じ考えのなかで堂々めぐりしている。苦しいのはそれだけだ、思考のはたらきは自分の身をさいなむ棘でもある、と君は言うだろう。いや、とんでもない。まさに、こういう間違った考えに陥らないことから始めなければならない。どうしたらいいか何もわからないような問題などいくらでもある。そんなことは容易にあきらめがつくのだ。顧問や清算人や裁判

かし、眼前にはもうない。ただし、これが曲者なのだが、悲しみはいつも空高く飛翔するものであって欲しいのだ。

一九一一年十月三十一日

念は檻のなかのライオンみたいなものであろう。ライオンは何時間も鉄格子の前で足踏みをして、檻のなかにいるのに、まるで一方の隅にいてけっして他方の隅を見たがらないかのようである。要するに、過去を見つめることから生まれるあの悲しみは何の役にも立たない。それどころか、きわめて有害なものだ。なぜなら、それは無益な反省を求め、無益な探求を強いるからである。スピノザは、後悔することはあやまちをくりかえすことだと言っている。

「しかし——と、憂鬱な思いにとらわれた男はもしスピノザを読んだら言うだろう——私は悲しいのだから、陽気になれと言われてもなれっこありません。不機嫌でもあるし、疲れもあるし、年齢もあるし、天気のせいもあるのだから」。よろしい。自分自身にそのことを言いきかせるがいい。真剣に言うがいい。悲しみをそのほんとうの原因に送り返すがいい。そうすれば、君の重苦しい心は風に吹き飛ばされる雲のように追い払われるであろう。地上は苦難に満ちている。しかし、空は快晴だ。それだけでも儲けものだ。悲しみを身体のなかに送り返すことになって、頭のなかはさわやかであろう。あるいはこう言ってもよい。思考が悲しみに翼を与え、悲しみが飛翔する。それに対して、反省をもってすれば、しかもそれが的を射たものである限り、翼がへし折られて、悲しみは地上をはいまわることしかできなくなる。悲しみは依然として足許にある。し

ではいったい、どうすればよいのか。こうするのだ。悲しい思いになってはならない。希望すべきだ。人にほんとうに与えうるのは、自分のもっている希望だけなのだ。自然を当てにし、未来を明るく考え、生命は必ず勝利すると信じなければならない。これは思っているよりもやさしいことだ。自然にかなっていることだから。生きているものはすべて、生命が必ず勝利すると信じている。さもなければ、すぐに死んでしまうであろう。こういう生命の力によって、君はやがてあのあわれな男を忘れてしまうだろう。それでいい。この生命の力こそ、彼に与えねばならないのだ。実際、彼をあわれみすぎてはならない。冷酷で無感覚でいいというのではない。明るい友情を見せるがいい。だれだって、相手をあわれな気持ちにさせるのは嫌なものだ。病人は自分のせいで人のよろこびが消されはしないのを見れば、その時彼は立ち直り、元気になるのだ。信頼は霊験あらたかな秘薬なのだ。

われわれは宗教に毒されている。われわれは人を何か考え込ませるような説教をぶって、死にかけている人のとどめを刺そうと、人間の弱さや苦しみをうかがっている司祭には見慣れている。ぼくはこういう葬儀屋の雄弁など嫌いだ。生について説教するべきであって、死についてではない。希望をひろめるべきであって、不安ではない。人類の真の宝であるよろこびを、ともにはぐくんで行かねばならない。それこそ偉大な賢人た

58　憐れみについて

親切さのなかには人生を暗くするものもある。それはふつう憐れみと呼ばれているもので、悲しみ以外の何ものでもない。これは人類の災いの一つである。感じやすい女が結核といわれている痩せた男にどう言うか見るがいい。涙ぐんだ目つき、声の調子、語っていることがら、それらすべてがこのあわれな男の病気は回復不能とはっきり断じているのである。しかし、彼は腹を立てたりしない。自分の病気に耐えるように、他人の憐れみに耐えている。いつもそうだったのだ。来る人来る人がみんな、そのたびに悲しみを少しずつそそぎかける。そしてみんな同じ文句を言っていく。「あなたのこんな様子を見ると胸が痛むのよ」と。

もう少し理性的な人もいる。そういう人は言葉に気をつける。その時には、励ましの言葉を聞かされる。「元気を出しなさい。陽気さえよくなれば起きられるよ」と。ところが、顔つきと言葉とがまったくちぐはぐなのだ。これもやはり、涙をさそう泣き言にほかならない。ほんのわずかなニュアンスであっても、病人ははっきりと感じてしまう。おどろきの眼差しが、どんな言葉よりもはるかに多くを語ることになる。

59 他人の苦痛

モラリストが――たぶんラ・ロシュフコーだと思う――「われわれはいつも他人の苦痛に対しては耐えうるだけの力がある」と書いているが、たしかにある真実を語っている。しかし、それは半分だけの真実である。そのことよりももっと深く注意すべきは、われわれはいつも自分の苦痛に対しては耐えうるだけの力がそなわっていることだ。また、ぜひそうでなければならぬ。必然がその手をわれわれの肩に置く時、われわれはがっちりとつかまれてしまう。死ぬかさもなければ何とかかんとか生きるかのどちらかだ。たいていの人は後者を取る。生きる力というのは驚くべきものである。

こうして、洪水に見舞われた人たちは状況に順応した。仮橋にも苦情をいわず、足をかけるのだった。学校やその他の公共施設にすし詰めにされた人も、仮住まいをできるだけ活用し、食べて眠ることができるだけで満足していた。戦争に行ってきた人たちも、これと同じことを言っている。その時すごくつらいのは、戦争をしていることではなく、足が冷たいことである。火を起こすことに無我夢中なのだ。だから、からださえあたたまれば、もう大満足なのである。

ちの伝える奥義であり、また明日の光となるものである。情念は悲しいものである。憎悪は悲しいものである。よろこびは情念や憎悪を殺すであろう。しかしまず、悲しみはけっして高貴なものでもなければ、美しいものでも有益なものでもないと考えることから始めよう。

一九〇九年十月五日

しみまで目覚ませるにいたるということを考えないとしてもである。われわれがエゴイストとなるのも、社会をなして生きているからだ。個人と個人とがぶつかり合うからだ。つまり人が人に対して答えようとするからだ。それにはことばによる応答もあれば、眼差しによる応答、愛情ゆたかな心による応答もある。ひとつの不満が数多の不満を解き放ってしまう。ひとつの恐怖が数多の恐怖を解き放ってしまう。羊の群れがめいめいの羊の中で走り回る。豊かな感受性をもつ人がいつも少し人間嫌いなわけがそこにある。友情がいつも思いやらねばならないことがらである。人間のことばの伝える意味に対する用心から孤独をもとめる感受性の強い人間を、すぐエゴイストと決めつけるのは早計であろう。友人の顔にあらわれた不安や悲しみや苦しみを持ちこたえられないのは、薄情な心ではない。好んで不幸と交際する人々は、自分自身の不幸にそれ以上の注意を払っているのか、それともっと勇気があるのか、それともただ無関心なのかどうかと疑われる。あのモラリストは意地悪なだけだ。他人の苦痛を担うのはたいへんなことだ。

一九一〇年三月二十三日

生きるのが困難になればなるほど、人間はよく苦労に耐え、より多くの楽しみを味わうとさえ言ってもいいだろう。なぜなら、単にありえるというだけの不幸まで考えている暇がないからである。必然が予測を手綱でしばっている。ロビンソン・クルーソーが故郷をなつかしみ始めるのは、自分の家を建ててしまった時である。金持ちが狩猟を好むのは、おそらくこれと同じ理由からであろう。それは足が痛いというような身近な苦痛からであり、またおいしく飲め、おいしく食べられるというような身近な楽しみからであろう。行動が一切を領し、一切を引きずって行く。あるかなりむずかしいことに、自分の全関心、全注意をそそぎ込んでいる人は、まったくしあわせである。過去や未来を考えている人間が、完全に幸福になることはありえない。物の重みを背負っている限りは、幸福でなければ死ぬのである。しかし不安のうちに自分の重みを背負うやいなや、どんな道も厳しくなる。過去と未来が途中でひどく肩に食い込む。

要するに、自分のことを考えてはならないのだ。おもしろいのは、他の人たちが自分自身について論を張ることによって、実はぼくを、ぼく自身へと連れもどしてくれることである。いっしょになって行動することは何でも悪くないが、いっしょになってむだ口をたたき、ぐちをこぼし、非難し返すとなると、それはもうこの世の大いなる禍であろう。人間の顔つきにはおそろしいほど豊かな表現力があり、物が忘れさせてくれた悲

たは涙を、ほんとうの涙を流してしまう。しばらくの間あなたは、へたな大げさな言い方のおかげで、あらゆる人間のあらゆる苦痛を感じてしまう。ところが一瞬後には、そういう自分など、そういう苦痛などは考えおよびもしないところに、旅立っている。鳥がとまっては飛び立つように、悲しみや慰めもまた、とまっては飛び立って行く。それを考えたら、恥ずかしくなる。モンテスキューのように、「私は一時間の読書でまぎらわすことのできなかった悲しみなどない」と言って赤面するだろう。ほんとうの読書をすれば、本の世界に没頭しわれを忘れるのは明らかなことである。

荷馬車に乗せられてギロチンに行く人はあわれである。しかしながら、その男が別のことを考えているとしたら、荷馬車の中にあっても、現在のぼく以上には不幸ではないだろう。彼が曲がり角や揺れを数えているとしたら、彼の頭の中にあるのは曲がり角であり、揺れである。遠くに見えるポスターも、それを読もうとすれば、最後の瞬間にも彼の気をまぎらわしてくれるであろう。そのことについて、われわれは何を知っているだろうか。彼にしても何を知っているだろう。

ぼくは溺死しかけた仲間の話を聞いたことがある。彼は船と波止場との間に落ちて、しばらく船体の下から出られなかったのである。引き揚げられた時には死んだようになっていた。死から帰って来たと言える。彼の記憶はこうである。水の中で目をあけてい

60 慰め

幸福や不幸というのは、想像することのできないものである。ぼくの言いたいのは、本来の意味での快楽でもないし、リューマチや歯痛や宗教裁判の拷問のような苦痛のことでもない。そんなものは、原因さえ考えれば、大体の見当はつく。原因は明確な作用をもっているからだ。たとえば、熱湯が自分の手にかかったとか、自動車にはねられたとか、ドアに手をはさまれたとか、そういう場合はみんな、だいたい自分の苦痛がどんなものかわかるし、他人の苦痛もある程度わかる。

ところが、幸福や不幸をつくる意見の色合というものになると、他人のことでも自分のことでも、何ひとつ予想することも、何ひとつ想像することもできない。すべては思考の流れ次第だ。しかも人は考えたいと思うようには考えないものである。まったく楽しくない考えから、知らない間にのがれ出ているのはなおさらである。たとえば、芝居にわれわれは夢中になる。芝居によってわれわれの心は、荒々しい力で別の世界に引きずり込まれる。だがその力も、絵の背景やどなる人や泣きまねをする女といったたわいない原因に気づくと、ばかばかしいものである。しかし、そういう猿まねをみて、あな

61　死者のための祭儀

死者のための祭儀は美しい習慣である。死者のための祭日はいみじくも、明白なるしによって、太陽がわれわれを見棄てていることがはっきりわかる時期におかれている。あの枯れた花、人が踏み歩く赤や黄色の枯葉、長い夜、黄昏（たそがれ）のようなもの憂（う）い昼、そういったものすべてがわれわれに疲労と休息と、眠りと過去とを考えさせる。年の暮れは一日の終わりのようであり、一生の終わりのようである。その頃未来が示すのは、夜と眠りだけであるから、自ずから思考はすでになされてしまったものの上にもどり、歴史家になる。そういう風に、人間の習慣と、天候と、われわれの思考の流れとの間には調和があるのだ。だから、この頃の季節になると、死者の霊を呼び出し語りかける人が少なくないのである。

しかし、どのようにして死者の霊を呼び出すのか。どのようにして死者の霊によろこんでもらうのか。ユリシーズ（ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』の主人公オデュッセウス）は食べ物を供えていた。われわれは花を持って行く。しかし、どんな供え物も、われわれの思考を彼らの方に向け、会話を活気づけるためのものにすぎない。呼び出したいのは死者たちの思いであって、

た。目の前でロープがゆらゆら動くのが見え、つかもうとすればつかむことができると思いながら、まったくつかみたいという気がしなかった。こういうふうに青い水と、ゆらゆら動くロープを見ていることだけが頭の中にあって、あとは何も考えられなかった。彼の語ったところでは、彼の最後の瞬間とはそういうものだった。

一九一〇年十一月二十六日

になって自分のことを考えることはまずないのだ。自身の目で見つめられた時、われわれの存在はあまりに弱い、あまりに移り気だ。われわれは自分と近すぎるのだ。自己の正しいパースペクティヴ、つまりすべてのものをそれぞれにふさわしく位置づけることのできるパースペクティヴを見つけるのは容易ではない。絶えず彼の欲する正義のことばかり考えている正義の追求者とは、いったいどんな人だろうか。反対に、些細なことを忘れさせるこの敬虔な気持ちから、われわれは死者を彼らの真実の姿において見る。死者たちの助言の力はおそらくもっとも偉大な人間的事実であろうが、それは死者たちがもう存在していないことから出てきている。なぜなら、存在するとは、周囲の世界とぶつかり合い、それに応答することであるから。それはまた、自分で「こうある」と誓ったことを、一日に何度も、一時間に何度も忘れてしまうことであるから。だから、死者たちが何を欲しているかを自らに問うのはすごく意味のあることだ。ほら、よく見たまえ、よく聴きたまえ。死者たちは生きようと欲しているのだ。君のなかで生きようと欲しているのだ。君の生を通して、自分の欲したものがゆたかに展開されることを望んでいるのである。こうして、墓地はわれわれを生へと送り返してくれる。こうして、われわれの思考は、近づく冬を陽気に跳び越えて、やがて来る春まで、若葉の季節にまで到るのである。きのう、ぼくは葉の落ちかけているリラのある幹をながめた。そこには

肉体でないのはまったく明らかである。彼らの思いが眠っているのはわれわれ自身のなかであることも明らかだ。そうは言っても、花や花環や花で飾られた墓などは、やはりそれなりの意味をもっている。われわれは自分の欲するようには考えないので、また思考の流れは、われわれの見ているもの、聞いているもの、触れているものに大きく左右されるから、ある光景を自らに与えて、そこにまとわりついているイマージュを同時に喚起するのはまったく理にかなっている。これこそ、宗教的儀式に価値があるゆえんである。しかし儀式は手段にすぎない。目的ではない。したがって、他の人たちがミサを聞いたり、祈りを唱えたりするように、死者たちを訪ねる必要はない。

死者たちは死んではいない。そのことはまったく確実である。われわれが生きているのだから。死者たちは考えている、語っている、行動している。助言し、欲し、承認し、非難することができる。これらはすべて本当である。しかし、それに耳を傾けなくてはならない。それらはすべて、われわれのうちにある。われわれのうちで確かに生きているのだ。

それなら、と君は言うだろう。死者たちを忘れることなどあるまい、死者のことを考えるのはむだである、自分のことを考えることが、彼らのことを考えることなのだから、と。その通り。しかし、ふつう人間が自分のことを、ほんとうに自分のことを、真面目

62　とんまな人間

いきり立ったような勢いで咳き込んでいる人たちは、喉をくすぐって咳を鎮めようとする。そんな見事なやり方をするから、喉に炎症が起きて、息が切れ、疲れきってしまうのである。だから、病院や療養所などでは、患者にけっして咳をしないように教える。まず第一の方法は、咳をできるだけ抑えること。もっとよい方法は、咳が出そうなまさにその瞬間に唾液を呑み込むことである。なぜなら、これら二つの運動は両立しえないものだから。それからまた、喉のかゆさを不愉快がったり怒ったりしないことだ。喉のえがらっぽさなど大したことないと思えば自然とおさまってしまうのだ。

同じような例として、病人の中には自分の体をひっかく者がいる。そうして苦痛の混じった、一種の混乱した快感を得ているのである。でも後になって、もっとひどい苦痛でつぐなわなければならない。力んで咳をする人たちと同じように、彼らもまた、いわば自分自身に対していきり立っているのである。これはとんまな人間のやり方である。

不眠症も同じ種類の悲劇を見せてくれる。自分で眠れない状態をつくり出しておいて苦しんでいる。少しの間眠れない状態が続いたとて、どうということもないではないか。

もうリラの蕾（つぼみ）がいくつも見られたのだ。

一九〇七年十一月八日

鮮味がなくなった、くだらぬおばかさんになったと思うことである。お婆さんになったその女との生活がどんなものか、想像することだ。過ぎ去ったよろこびを、入念に計ってみることだ。自分の熱情をさし引いてみることだ。仲たがいした時のことをあれこれと想い起こすことだ。しあわせな時には気にもしなかったことが、悲しみのなかにいると、今度はそれが慰めとなるものだ。最後に、何か肉体上の特徴に注目することだ。目とか鼻とか口とか手とか足とか声の調子とか、気に入らないところだ。必ずあるものだ。これこそ英雄的な療法だと言いたい。こみ入った仕事や困難な行動にとび込んだ方がずっとやさしい。しかし、とにかく、自分を慰めることに専念しなければならない。淵に身を投げるように不幸のなかにとび込んではならない。本気になってそのことと取り組んだ者は、思っているよりもずっと早く慰められるであろう。

一九一一年十二月三十一日

ベッドに入っているのはそんなに悪いものではない。しかし、頭が働きすぎるのだ。眠りたいと思ってしまう。眠ろうと試み、そこに全注意力を傾ける。その結果、眠ろうと欲するから、そこに注意力を集中するから、眠れないのである。あるいはいらいらしてくる。時間を数える。貴重な休息の時間をもっとうまく使わないのはばかげたことだと思う。そう思いながら同時に、草の上の鯉のように飛びはねて寝返りを打つ。とんまな人間のやり方だ。

あるいはまた、不満の種があると、夜昼を問わず寝てもさめても、暇さえあればそのことを考えている。まるで陰惨な小説が机の上に開いたままになっているかのように、自分の話を何度も考え直す。こうして、自分の悲しみに何度もひたっている。悲しみをたっぷり味わっている。忘れることを恐れるような思いにまでなっていく。予見されうる不幸を残らず検討する。要するに、自分の痛いところをひっかいているのである。とんまな人間のやり方だ。

美しい恋人にふられた男は、ほかのことは考えようともしない。しかし男は、過ぎた日々のしあわせ、不実な女の美点、その裏切りや不当な仕打ちを何度も考える。自分で自分を鞭打っているのである。他に何も考えられないのだったら、彼はそういうふうに見るのとは別の見方で、自分の不幸を考えるべきであろう。たとえば、もう初々しい新

さえも呪うに十分な理由である。

しかしながら、次のことはよく知って欲しい。そういう言い分には際限がないこと、そして悲しみはさらに悲しみを生み出すこと。なぜなら、そうやって運命を嘆くことによって、君は自分の不幸を大きくして、一切の笑う望みを、あらかじめ自分から奪い去って、そのため自分自身の胃もさらにいっそう悪くなるだろうから。もし君に友人がいたら、そして友人が、何事につけてもつらそうに不満を言っていたら、君はおそらく、彼をなだめようとし、世界をもう一つの見方でとらえる方法を教えようとするだろう。では、どうして君は、自分自身に対してもかけがえのない友となってやらないのか。もちろん、ぼくは真面目に言っている。もう少し自分を好きになってやったら、自分と仲よくしてやったらどうか、と。なぜなら、ものごとは何でも、始めにどんな態度を取るかによって決まってしまうことが多いからだ。ある古人がこう書いている。どんな出来事にも二つの把手があって、さわると手が傷つくような把手を選ぶのは賢明な選択ではない、と。世話にもよく言われている通り、哲学者とは、どんなことがらにおいても、いちばんぴったりして最も人を元気づける言葉を選ぶこと、すなわち、真理の的を射抜くことのできる人間である。したがって、問題は自分のために弁護してやることであって、自分をなじることではない。われわれはみんな、立派な弁護人であり、ゆたかな説

63 雨の中で

しかしながら、正真正銘の不幸もかなりある。だが、想像力につい引きずられて不幸を人々がつけ加えるということもほんとうだ。君は毎日少なくとも一人は、自分のやっている仕事に不満を言う人に出会うだろう。彼の言い分にはかなりの説得力があるようにいつも見える。なぜなら、どんなことでも文句を言うことができるし、完全なものなど何ひとつ存在しないから。

先生である貴兄は、何ひとつ知らぬ、何ひとつ興味をもたないがさつな若者に教え込まねばならない、と言うであろう。エンジニアである貴兄は、無用の書類の海の中につかっている、と言うであろう。弁護士である貴兄は、あなたに耳傾ける代わりに居眠りしながら食べたものを消化している裁判官の前で弁護している、と言うであろう。君の言っていることはおそらく正しい。ぼくはそのままに受け取る。この類いのことはうそではないからこそ、それをいろいろ言いたくなるのだ。それとともに、君の胃の具合が悪かったり、靴の中に水がしみ込んでいたりするのであれば、君の言うことは非常によくわかる。それこそまさに、人生や人間を、否、もし神の存在を信じているならば、神

雨には何のはたらきもないが、人間には大いに力があるから。ただほほ笑むまねをしただけでも、すでに人間の悲しみや退屈さはやわらいでいるのだ。もし自分自身の中を見つめれば、彼らを許してやるたねがたやすく見つかるだろうということを言わぬとしてもである。マルクス・アウレリウスは、毎朝こう言っていた。「きょうも、見栄っぱりや、嘘つきや、不正の輩や、うるさいおしゃべりに会うだろうな。彼らがそんな風なのも無智のせいだ」と。

一九〇七年十一月四日

得力をもっているのだから、この道を選ぶならば、満足する理由をきっと見出すであろう。ぼくはしばしば見てきたが、人が自分の仕事にすぐ不満を言うのは不注意からであり、またちょっと儀礼的な意味からである。もし人が、他から決められていることではなく、自分から好んでやっていることや自分でつくり工夫していることを語るように仕向けるならば、彼らはたちまち詩人となる。しかも楽しく歌う詩人となるのである。

ほら、雨がちょっとふってきた。君はまだ通りにいるので、傘を広げる。それでいい、それだけのことなのだ。「また雨か、なんということだ、ちくしょう！」と言ったところで何の役にも立つまい。そう言ったところで、雨のしずくや、雲や、風が変わることはまったくないのだ。どうせ言うのなら、「ああ！　結構なおしめりだ！」と、なぜ言わないのか。君の気持ちはよくわかる。そう言ったところで、雨のしずくはまったく変わらないだろうから。その通りだ。でも、そう言うことは君にはいいことなのだ。からだ中に張りが出てきて、ほんとうに温まってくる。なぜなら、それこそが、どんなに小さなよろこびでも、よろこびの動作のもつ効き目なのだから。君がこうしていさえすれば、それが雨にあたっても風邪を引かない秘訣である。

だから、人間もまた雨と同じように考えるがいい。そんなこと容易でない、と君は言う。やさしいことだ。雨よりもずっとやさしい。なぜなら、君がほほ笑んだところで、

痛となって、さらに一層いらだってしまうのだ。おどしたり、どなったりすれば、子どもの雪崩はさらに大きくなる。怒りを培っているのは怒りそのものである。だから、そのような場合、肉体的な働きかけが必要なのだ。体をさすってやるとか、目先を変えてやるのである。そういう時、母親の愛情は成功確実な知恵を見せてくれる。赤ん坊を抱いて動いたり、優しくなでたり、揺すってやるのである。痙攣はマッサージすることによってなおる。赤ん坊の怒りは、まただれの怒りでも、一種の筋肉の収縮状態にほかならないのだから、古代の人々が言ったように、体操と音楽によってなおすのがよかろう。しかし、怒りの発作がはじまった時には、どんな立派な理屈を並べてもまったく役に立たない。否、かえって有害なことが多い。それは怒りを挑発するようなすべてのものをよび起こして想像にのぼせるからである。

このような考えは、なぜ戦争は常に勃発する恐れがあり、また常に避けることのできるものであるかを理解するのに役立つ。人間が興奮するからいつも起こる恐れのあるもので、興奮が昂進すると、ほんのささいな理由でさえも戦争を引き起こす。理由が何であろうと、戦争はいつも避けることができるのだ、そこに興奮さえ混ざり込まなければ。ところで市民たる者は、このじつに単純明快な法則を注意深く考えねばならない。なぜなら、市民は苦しげにこうつぶやくから。「ヨーロッパに平和をもたらすために、この

64 興奮

情念と同じことが、戦争についても言える。怒りの発作を説明するのに、利害の対立だとか、敵対関係だとか、怨恨のような原因をもち出して、それを正当化しようとしてもまったくむだである。何か好都合な状況があれば、悲劇はきっと起きないですむ。しばしば偶然の出会いから、口論や喧嘩や殺人事件が起こっている。同じサークルに入っていて、どうしても喧嘩するはずだと思える二人の男が、大きな利益のために長い間かなり遠くはなれた二つの町に住んだとしよう。このようなじつに単純な事実によって、平和が成り立つ。理屈ではとてもこうはいかない。情念はすべて、状況の申し子なのだ。たとえば、アパートの下宿人と管理人のように、二人の人間が毎日会っている場合、最初会った時生じた結果が、今度は何かの原因となったりするのである。いらだちや怒りの小さな衝動が、それをもっと激しく感じさせる動機となってしまう。だから、最初の原因と最後の結果との間にまったくばかげた不均衡が生じてしまうことがしばしばある。

小さな子が泣いたり、わめいたりすると、本人の知らないような純粋に肉体的な現象が起きている。両親や先生はそのことに注意しなければならない。泣いていることが苦

65　エピクテトス

「まちがった臆断をとり除きたまえ。そうすれば君の不幸はなおる」。そのようにエピクテトスは語っている。赤いリボン（レジオン・ドヌール勲章）を待ち焦がれて、それをまだもらっていないことを思うと夜もろくに眠れない人には、この忠告はぴったりする。たかがリボン一個に過大な力をみとめているのである。リボンをありのままに眺め、わずかの絹とわずかのアカネ染料として考えるならば、人はそれで心をかき乱されることもなかろう。エピクテトスの処方箋は厳しいものが多い。この慈悲深い友人はわれわれの肩に手をかけて言う、「君はもう、悲しんでいる。サーカスであの好きな席が、自分にふさわしいと思った席が取れなかったものだから。よし、おいで。サーカスは今だれもいない。このすばらしい石に触れてごらん。座ってもいいんだよ」。どのような恐怖を癒すのも、どのような抑圧的感情を癒すのも治療法は同じなのだ。ことがらの核心にじかにぶつかって、何が問題なのかを見なければならない。

同じくエピクテトスは船の乗客に言っている。「この嵐に対する君のこわがりようと言ったら、まるでこの大海を全部呑みほさなければならないかのようだ。だがね、君、

弱い自分に、いったい何ができるか。一瞬ごとに、新しい紛争の原因が生まれている。日を経るにつれて解決できない問題がいくつも出てくる。こちらで一つ解決されると、あちらで一つ危機が生じる。もつれた糸のように、ほどけばほどくほど絡むばかりである。成るように成ったらいい」と。その通りだ。しかし、なりゆきだけでは戦争にはならない。そのことは無数の例がはっきり示している。すべてのことが整理されてはまた混乱状態に陥っている。イギリスの攻撃に備えて、ブルターニュ海岸に要塞がつくられたことを知っている。しかし、不吉な予言者たちの言葉が聞かれたにもかかわらず、そこでは戦闘はなかった。ほんとうに恐ろしいのは、冷静さを失うことなのだ。ここでは万人が万人、自分自身の王であり、自分の領分における嵐の支配者である。絶大な権力である。市民大衆はこれを行使することを学ばねばならない。賢者が言ったように、まず幸福になりたまえ。なぜなら、幸福は平和がもたらす結果ではない。幸福とは平和そのものであるから。

一九一三年五月三日

以上におそろしいものである。

腎臓結石で外科医にかかる人は、腹部が切開されて血液がどくどくあふれ出るところを想像する。ところが、外科医の方はちがう。外科医は細胞はただの一つも切断しないことを知っている。ただ問題の細胞を他の細胞コロニーから切り離して、そこに道をつけるだけで、少しはこの液体が流れてその細胞をひたすだろうが、それもおそらく手当の下手な手の切り傷よりも出血は少ない。これらの細胞の真の敵がどんな奴なのかを、外科医はよく知っている。このような敵がいるから、細胞はメスも歯が立たない堅い組織をつくり上げているのだ。外科医はこの結石によって自然な排泄の道がふさがれて、そのような敵も、すなわち細菌も動きがとれなくなっているのを知っている。外科医のメスは生をもたらすのであって、死ではない。敵が遠ざかれば、すべての細胞がすぐに生き返る。ちょうど清潔にしている切り傷がほとんどすぐになおってしまうように。患者はこのような思惟をたどることによって、つまり、まちがった臆断をとり除くことによって、もちろんだからといって、結石そのものがなおるわけではないが、少なくとも恐怖からは救われる。

一九一〇年十二月十日

君が溺死するためにはほんの二リットルもの水があれば十分なのだ」。このすさまじい荒波など現実の危険を表わすものではないことを、彼はよく知っていたのだ。「たけり狂う海。奈落の底からの声。荒れ狂う波。命があぶない。波がくる！」と、人は言い、そう考える。だが、それは間違っている。重力と潮流と風とから生じた均衡にすぎないのだ。どんな悪い運命でもない。君を殺すのはこの轟音でもなければ、この暴風でもない。どんな宿命でもない。難破しても救われることもあれば、おだやかな水のなかで溺死することもある。ほんとうの問題はただ一点、君が水から上に顔を出していられるかどうかである。こんな作り話を聞いたことがある。熟練の船乗りたちが、呪われた岩礁に近づいたとき、目をおおって横たわっていたというのだ。こうしてかつて聞いたことばを信じて彼らは死んだ。その同じ浜辺に打ち上げられた船乗りたちの体は、まちがった臆断をあかししている。ただ岩と潮流と波の渦だけを、要するに相互に関連した諸力、完全に説明できる力だけを考えることのできる人は、どんな恐怖からも解放され、おそらくどんな不幸からもまぬがれるであろう。何かを操縦しているかぎり、一度には一つの危険しか見えないのだ。決闘に熟練した人はこわがらない。自分がすることも、相手がすることもはっきり見えるからだ。しかし、彼が運命に身をまかせようものなら、彼をねらっている黒い瞳が、剣よりも先に彼を刺し殺している。こういう恐怖心は、不幸

同様である。こういう何にも反応しないまどろみ状態は、人間にとってもよいものであり、どんなに激しい苦痛を受けていても、ただ不幸な者が力を抜いてさえいれば、必ず休息を与えてくれる。ぼくの言う力を抜くとは、文字どおりの意味である。四肢が何かにすっかり凭りかかって筋肉がまったくゆるんでいなくてはならない。筋肉や四肢を完全に休息に追いやるにはこつがある。それは内部からする一種のマッサージであり、怒りや不眠や不安の原因となる痙攣の正反対である。眠れないと言う人に、ぼくはこう言うことにしている。「死んだ猫のまねをしてごらん」と。

ところで、今こういう動物の状態、これはエピクロス派の徳の奥義であるが、そこまで下降できないならば、その時には強く目ざめた意志が必要である。いわばストア派の徳にまで一気に跳びあがる必要があるのだ。なぜなら、これら二つの徳は非常にすぐれたものであるが、その中間は何の価値もないからである。もし雨や嵐のなかに入ることができないならば、その時は雨や嵐を斥けねばならない。それらを自分から切り離す必要がある。つまり「これは雨なのだ、嵐なのだ。だから、自分ではないのだ」と言うことだ。問題が不正な非難であったり、失望であったり、嫉妬であったりすると、たしかにもっとむずかしいだろう。そういう性悪な奴らは、君にへばりついて離れないのである。しかしながら、肚を決めて最後にはこう言わねばならない。「あれほど失望したの

66 ストア主義

有名なストア派の哲学者たちは、おそらく誤解されてきた。あたかも専制君主に抵抗し、責め苦にも勇敢に立ち向かうことばかりを教えているかのように解されてきたのだ。ぼくは、ただ雨や嵐に対してさえも、彼らの雄々しい叡知の一つとはいえぬ用途に気づいた。ストア派の省察は、人のよく知っている通り、自己を、つらいと思う感情から切り離し、この感情を一個のものとして考え、「お前はものである。お前はおれには属していない」と言い切る毅然たる態度を内容としている。反対に、床几に座した王のような生き方を、まったく知らない人たちは、「遠くから嵐がやって来るのがわかるぞ。私はいらいらして同時に押しひしがれるようだ。さあ、雷よ、鳴れ」などと自分から好んで言い放ち、自分の心の内部に嵐をはいり込ませてしまう。これは考えるだけが一つよけいだが、まさに動物のような生き方である。なぜなら、動物は嵐がやって来ると、見た目にもそれとはっきりわかるほど態度が変わるものだから。植物がかんかん照りにはしおれて、陽がかげると生き返るのと同様である。動物はそのことをあまりよく知らない。われわれがうとうとしている時、自分が陽気なのか、憂鬱なのか、わからないのと

67　汝自らを知れ

きのう、ぼくはある広告に目をとめた。よく見るあの決まり文句である。「人生に成功する偉大な秘訣、確実な方法。人心をつかみ、利用する確実な方法。それはだれでもみんな、所有している生命の流体ですが、その利用方法を知っているのは有名な学者X先生だけです。十フランでお教えします。今後、仕事で失敗するような人たちは、あの十フランのお金がなかったと言われるでしょう、云々」。この数行を載せる新聞は、ただでそれをするわけがないから、成功術の学者先生すなわち磁気流体を売る商人にはどうやらお客さんがついているとみえる。

そのことを考えながら、ぼくの心に浮かんだことは、この先生は本人が思っているよりもおそらくずっと上手ではないか、ということだ。流体のことは別にして、いったい彼はどんなことをしているのか。もし人々にちょっとの自信を与えているとしたら、もう大したものである。それは彼のお客さんたちにとって、自分の前に山のように立ちはだかっていたあのささいな困難を克服するために十分な力なのだ。臆病は大きな障害である。否、しばしば唯一の障害でさえある。

だから、おれが滅入ってしまうのもふしぎではない。それは雨や嵐と同じように自然なことなのだ」と。こういう忠告に、情念にとらわれた人たちはいらいらする。彼らは自分に義務を課し、自分をしばりつけている。自分の苦痛を愛撫しているのだ。ぼくの思うに、彼らは自分のばかげた姿にいらいらして、ますます激しく泣き出しているあの癇の虫でもいるように泣く子どもと似ている。「なんだこれは？　子どもが泣いているだけじゃないか」と言えば、自分を救うことができるだろう。まだ、生き方がわかってないのだ。それに、生き方というのを、人はあまりにも知らなさすぎる。ぼくはこう考えている。しあわせになる秘訣の一つは、自分の気分に無関心になるということだ。そのように軽蔑された気分は、犬が犬小屋にもどって行くように、動物的な生にもどる。それこそが、実践的倫理学のもっとも重要な章の一つであると、ぼくは考える。つまり自分のあやまち、自分の悔恨から、すなわち自己を責めるいっさいのみじめな反省からほんとうの自分を切り離すことである。「この怒りだって、おさまりたくなればおさまるさ」と言うことだ。相手にされない泣く子と同じようなもので、怒りはすぐにおさまるだろう。ジョルジュ・サンドはすぐれた判断力をもった人で、その著『コンスュエロ』のなかでこの強靱な魂を見事に描いている。これは力強い作品だが、読む人があまりに少ない。

一九一三年八月三十一日

首尾一貫したものではない。友人をつくることよりも敵をつくり出すことにもっとずっと熱心であるのがふつうである。この男はおれに悪意をもっているな、と君は思う。相手の方ではおそらく、そんなことは忘れてしまっている。ところが、君自身がそのことをまったく忘れないのだ。ただ、君の顔色が彼に敵意をもつという義務を思い出させるだけだ。人間には自分自身以外に敵はほとんどいないものである。最大の敵はつねに自分自身である。判断を誤ったり、むだな心配をしたり、絶望したり、意気沮喪するようなことばを自分に聞かせたりすることによって、最大の敵となるのだ。ある人間に、「あなたの運命はあなた次第だ」と、ただ言うだけでも十分、十フランに値する教えである。おまけにあの流体のわざがあるというのだ。

だれでもよく知っているとおり、ソクラテスの時代には、デルフォイにアポロンの神託を受けている巫女のような人がいて、どんなことがらについても神託を売っていたのである。ただ、神はあの流体を売る男よりも誠実なお方であるから、神殿の正面にその奥義を書き記してくれた。ことがらが自分に有利なのか不利なのか訊こうと、そこに運命のうかがいを立てにきた者は、神殿の中に入る前に、あの深遠な神託を読むのであった。それはだれにでも益のあるものだった。「汝自らを知れ」。

一九〇九年十月二十三日

しかし、ぼくの見るところでは、それだけのことではないのだ。この先生は、おそらく本人もよく気づかないまま、お客さんたちに注意と反省を、秩序と方法を仕込んでいるようだ。このような流体の投射といったこじつけにあっては、いつも必ず具体的な人や具体的なものを強烈に想像することが問題なのだ。たぶんこの先生は、彼らを少しずつ訓練させて、自分の注意力を集中させるところまでやっていると思う。これだけのことで、この先生はそれだけのお金をかせいだのである。なぜなら、まず第一に、この方法によって人々は、自分自身を考えることから解放される、つまり過去を、失敗を、疲労を、胃のぐあいを考えることをまぬがれるのだから。要するに、一瞬一瞬増大して行った苦悩の重荷から解放されるのである。人をとがめることで自分の人生を浪費している人の何と多いことだろう。第二に、人々は自分の欲することを真面目に考えるようになった。周囲の状況や人々のことを真剣に考えるようになった。とりわけ、夢のなかで時どきやるような一切をまぜかえし、同じことをくどくど繰り返すことはしなくなったのである。その結果、彼らが成功するとしても、不思議ではないのだ。この先生に味方しているような偶然もあるだろうが、それをぼくは問題にしない。逆に、偶然が先生の言う通りにならなかったら、それを言う者はだれもあるまい。ふつう人はだれでもみんな、自分には敵がいると考える。この点でも、間違っているのである。人間はそれほど

その他ごたごたとありがたそうな慰めごとを言っているが、そんなものでは現実は全然変わらんではないか。それはまるで、散歩に行こうと玄関の敷居に出てきて、「こんなに雲があつく垂れこめていては、もう散歩もだめだな。なんとか降らないように願いたいものだ」と思っている男と同じではないか。それなら、雲行きを実際よりも以上に悪いものと見て、傘をもって出かける方がもっといいではないか。そういう調子で、この男は嘲笑していた。ぼくはそれを、ただ笑っていただけだった。なぜなら、彼の言うこの理屈は見かけは立派そうであるが、深みのない芝居の書き割りにすぎないからだ。そこでぼくはすぐに、自分の手で実際に田舎風の壁をさわってみた、ぼくの家の壁を。

おのずと出来上がる未来と、自分のつくり出す未来とがある。現実の未来はその両方から成っているのである。嵐や日食のようなおのずと出来上がる未来については、期待を抱くことは何の役にも立たない。さめた目でよく見、よく知ることが必要である。メガネのレンズを拭くのと同じように、眼を蔽う情念の水蒸気を拭かなければならない。よくわかっていることだ。天上的世界のことがらは、われわれの手では何ひとつ変えることができない。そこからわれわれは、あきらめと幾何学的精神とを学んだ。これこそ人間の叡知の重要な部分にほかならない。地上的世界のことがらにおいては、器用な人間の手によってどれほど多くのことが変えられたことだろうか！　火も、麦も、船も、

68 楽観主義

「神さま、どうか田園監視官ではございませんように」と言ったのは、畑のなかに迷い込み、だれかが来るのが見えてひどく心配した、まったく無邪気な女子寄宿生たちであった。ぼくはこの例、ほとんど馬鹿げたことの典型ともいうべきこの例を、人間的に理解する前に、一度ならず考えてみた。なるほど、そこではいっさいがごちゃまぜになってしまっている。考えとしてよりも言葉として混乱しているのはまちがいない。われわれはみんな、考えることを学ぶ前に、話すことを覚えたからだ。

この話がぼくの心に浮かんだのは、あるかなり頭のいい人物が、「あのわざとらしい楽観主義（オプティミスム）、あの盲目的な期待、あの自己欺瞞」に対して、じだんだ踏んで抗議している時だった。彼が問題としていたのは、アランという男だった。なぜなら、この単純で愚かな哲学者、まだ野性的なこの男は、明白な証拠があるにもかかわらず、人間は誠実であることを欲し、つつましく、愛と理性とをもって生きることを欲するものだと主張したからである。そして、正義と平和が手をたずさえてわれわれのもとにやってくるとか、軍人の徳が戦争をなくすだろうとか、選挙人はもっともふさわしい人を選ぶだろうとか、

できるか、わかるであろう。すなわち美しき希望である。

一九一三年一月二十八日

訓練された犬や調教された馬にしても、人間の所産であって、もし科学が希望を殺してしまっていたら、けっして生み出されることのなかったものであろう。

とりわけ、人間自身がつくり出した秩序においては、信頼というものが事実の一部分をなすので、もしぼくが自分に対する信頼を考慮しないとすれば、大変な計算まちがいをすることになる。自分が倒れると思うと、ぼくはほんとうに倒れる。自分が何もできないと思うと、ぼくはほんとうに何もできない。自分の期待に裏切られると思うと、ぼくはほんとうに裏切られる。そのことによく注意しなければならない。良い天気をつくり出すのも、嵐をつくり出すのもぼく自身なのだ。まず自分の中に、また自分のまわりに、そして人間の世界のなかに。なぜなら、絶望は、希望とともに、雲の形が変わるよりも早く、人から人へと伝染して行くものだから。ぼくが信頼すれば、彼は誠実となる。ぼくがあらかじめ非難するなら、彼もぼくのものを盗みとるようになる。彼らはみんな、ぼくがやった通りの貨幣で返ってくるのだ。それからこんなことも考えたまえ。希望は、平和や正義みたいに、望みさえすれば実現できるほどのものの上に築かれるのだから、これを保持するにも意志に頼るしかないのだということを。それに対し、絶望は、どっしりと構え、絶望しているというただそれだけの力でひとりでに強められていく。こうして、どう考えたら、宗教の中で失われているが、救わねばならないものを救うことが

すぐに、手をたたくという行為から生まれる熱狂にとらわれ、遊びに夢中となるだろう。もう一つの試みは、少年に話をさせ、ただちょっと「すごいなあ」とほめてやりなさい。少年は臆病さにうち克つと、途方もないことまで言うようになる。こういう教えに、君の方が恥ずかしくなるだろう。なぜなら、この教えはだれにとっても有益なものだが、同時にまた、だれにとっても辛辣なものだから。だれでも身体の器官を制御しないで、のべつまくなしに話しはじめたら、たちまちばかなことまで言いすぎて、後から自分の性質を呪ったり、自分自身に絶望するであろう。以上のことから、動揺興奮している群集を判断するがいい。ありとあらゆる不幸が予想されるはずだ。もちろん、ありとあらゆるばかげた振舞も。この点において、君がまちがいをすることはあるまい。

しかし、悪をその原因によって知る者は、けっして呪ったり絶望したりしない術を学ぶのである。どんな試みにも、どんな種類のものであろうとも、失敗は必ずある。肉体的なトレーニングを積んでいないからだは、すぐにかっとなる。デッサンであろうが、剣術であろうが、乗馬であろうが、会話の仕方でも、すぐに照準がそれて、当然的を射そこなってしまう。そのことに驚いてしまい、悲観主義者の言い分が正しいように思ってしまう。しかし、なぜなのかを理解する必要があるのだ。ここで何よりもまず考えねばならないことは、すべての筋肉が結合しあっていること、したがって、その中の一つ

69　結び目をほどくこと

きのう、ある人物がぼくのことを一言で断じてしまった。「度しがたい楽観主義（オプティミスム）」。その男がそれを悪い意味で言っていたことはまちがいない。彼が言わんとしたのはこうだから。ぼくは生まれつきのオプティミストであり、そのことがずいぶん気に入っている、しかし徒（あだ）な希望はどんなにめぐみ深くとも真実とみなされたことはないのだ、と。それは現実に存在するものと、そうあって欲しいものとを混同することである。もしひとりでに、人が働きかけることなく存在するものだけを考えるならば、悲観主義は正しい。なぜなら、人事の経過というものは、放っておけばたちまち悪い方へと向かうから。たとえば、気分に身をまかす者は、たちまち不幸になり意地悪になる。これは避けることができない。なぜなら、そもそもわれわれの身体というのは、監視する者、統治する者がいなくなるやいなや、すぐにすべては悪に向かうように出来ているからだ。子どもたちが集まって遊んでいる時、そこにルールがないと、すぐめちゃくちゃになるのをよく見るがいい。ここに見られるのは、興奮するとすぐいら立ってしまうという生物学的法則である。試しに、幼な子と手をたたき合うという遊びをやってみるがいい。その子は

70 我慢強く

汽車に乗ると、いつもこう言う人の声が聞こえる。「何時にならないと着かないんだ。この列車の旅の長い退屈なことといったらないよ」と。困ったことに、彼らは本気でそう思っている。まさにこの点において、わがストア派哲学者のことばは十倍も正しいことになるであろう。こう言ったのである。「まちがった臆断をとり除きたまえ。そうすれば君の不幸はなおる」。

もし別の視点でものを見たら、鉄道の旅はもっとも生き生きした楽しみの一つであると見られるようになるであろう。もし天と地の色がさまざまに変化し、地平線の奥深くに中心のある大車輪の上に事物があらわれ消えていく一大パノラマが見えるとしたら、もしそういう見せ物があるとしたら、みんな見ておこうと思うであろう。もし発明家が列車の震動や旅のすべての物音までも再現してくれるとしたら、それはもっといっそう美しいものに見えるであろう。

ところで、このようなすばらしいものがすべて、汽車に乗ったとたんに、ただで手に入るのである。そうだ、ただなのだ。なぜなら、君は運賃を払うけれども、谷や山や川

でも動けば、それと協力すべき筋肉がまず目覚めて動くのではなくて、他のすべての筋肉が動きはじめることである。そこつ者はほんのわずかな動きにも全体重をかけてしまう。それに、だれだって皆、最初はへたなものだ、釘一本を打つだけのことでさえも。練習によって身につく技量には限界がない。あらゆる芸術とあらゆる手仕事がそれをあかししている。美しいデッサン、つまりこの身ぶりをみごとに描いた線は、おそらくすべてのもののなかでもっとも説得力のある証拠であろう。なぜなら、この手は重く、性急で、いらだち、全身の重みを支えているのだが、判断と物とに同時に従属して、軽くつつましやかな、まるで浄化されたようなこの線を描くことができるのであるから。また、どなって喉を痛めるこの同じ人が歌を歌う人でもあるのだ。なぜなら、だれもみんな、ふるえたり結びついたりするこの筋肉の束を、親から譲りうけているのだから。結び目をほどく必要がある。それはなまやさしい仕事ではない。だれもがよく知っているとおり、怒りと絶望はまず第一に克服しなければならない敵である。それには信じなければならない。希望をもたねばならない。そしてほほ笑まねばならない。こうしながら、仕事を続けねばならない。そういうわけで、もし不撓不屈のオプティミスムを原則中の原則として自らに課さないならば、すぐに最悪の悲観主義が現実のものとなってしまう。人間のおかれている状況とはそういうものなのだ。

一九二一年十二月二十七日

ばめのように通り抜けてしまう冷静な人物のことである。同じように、行動の仕方を学びたいなら、列車など押さない方がいい。君の力を借りなくとも列車は動くから。宇宙全体を一瞬から一瞬へと動かしているあの荘厳かつ泰然自若の時間など、押さない方がいい。ものごとにしてみれば、君を乗せて運ぶことなど瞬き一つと同じなのだ。自分に親切であること、自分の友人となることを学ばねばならない。

一九一〇年十二月十一日

を見るのには払わないから。人生にはこうした生き生きした、しかも一銭もかからない楽しみがいっぱいある。でも、人はそれを十分には楽しんでいない。あらゆる国の言葉で、あちこちに貼り紙を出す必要があろう。「目を開いてごらん。楽しみを味わいなさい」と書いて。

そのような主張に、君はこう答える。「私は旅行をしているのであって、見物しているのではない。重要な仕事のために、私はしかるべきところにできるだけ早く行かねばならないのだ。私が考えているのはそのことだけだ。私は一分一秒を、車輪の回転をかぞえているのだ。いまいましいのは、何度も何度も停車することだ。それから、だらだらと客の荷物を押して行くあののんきな駅員だ。私は頭のなかで、自分の荷物を押しているんだ。汽車を押しているんだ。時間を押しているんだ。そんなことをしても意味がないと、君は言うだろうが、私にしてみれば、少しでも血の気があるならば、こうなるのは自然のことで、考えずにいられないことなのだ」と。

たしかに、血の気があることはいいことだ。でも、この地球上で勝利を収めた動物は、もっとも怒りっぽい動物ではなかった。理性的な動物、しかるべき時まで情念を抑制する動物であった。だから、恐るべき剣士とは、床を踏みならしたり、どこへ行くのかわからないうちに飛び出したりする人物ではない。道が開かれるのを待っていて、突然つ

ののき、なにかかにか癖があり、すぐかっとなってしまうものだ。からだの形にしたがい、疲労にしたがい、また外部からの作用にしたがって、身ぶりや口ぶりを示すものである。しかしながら、この人間の身体というのはまた、お祝いの花束のように、変わらぬ気持ちや敬意や楽しいことばを、ぼくにもたらすはずである。これこそぼくが受ける権利があると思っているものだ。しかしながら、ぼく自身、他人に対してはきわめて注意深いのだが、自分にはほとんど注意を払っていないのだ。ぼくは自分の知らないメッセージを、機械的なしぐさを通して、眉をしかめることによって送り出している。太陽と風に応じてぼくの顔が変わる。こうしてぼくは相手に、ぼくが彼の中に見出して驚いているまさにそれと同じものを差し出している。つまり一個の人間、すなわち精神を導く役を負う動物を。しかもその動物たるや、いつも過大評価されたり、過小評価されたりして、一つの合図をするにも他に十も合図をしてしまう。否、むしろ、取捨選択できずに全身で合図をしてしまう。こういう混合物のなかで、ぼくは、砂金採集家のように、砂利や砂を棄てて、どんなに小さくとも砂金を見分けねばならない。探すのがぼくの仕事だ。だれも自分の口から出る話を、耳にはいる話に対してするようにはふるいにかけない。だからぼくは、よろこんで礼儀作法にしたがうのだ。否、それ以上のことをやっている。ぼくは人に対してかなりの信頼をおいている。鉱滓（かなくそ）は捨てて、彼のほんとうの

71 親愛の情

「人に満足することは何とむずかしいことだろうか」。ラ・ブリュイエールのこの厳しいことばを読めば、われわれはただちに慎重にならざるをえない。なぜなら、良識（ボン・サンス）によれば、社会生活のもたらす現実の状況には順応すべきであるし、ふつうの人間を非難するのは正しくないからである。それは人間嫌いの発作である。したがって、ぼくはほんとうの原因もたずねないで、入場料を払ったのだから楽しませてもらおうという見物人のような気持ちで人を見てはならないと考えている。それどころか、反対に、気むずかしいこの存在のありようを自分自身のうちに顧みて、あらかじめすべてのことを最悪に考えておく。話している相手は胃が悪いかもしれない、頭痛がするのかもしれない、お金のことや家族の不和で悩んでいるのかもしれないと想像する。空模様があやしいぞ、灰色と青色とがまじった三月の空だ、日は射しているが身にしみる寒い北風だ、と思えば、毛皮と傘の用意をする。

それでいいのだ。その点について、人間の身体のあの気まぐれさに思い到るならば、もっとよく考えられるはずだ。人間の身体は何かがほんのわずか触れただけでも震えお

一九二二年四月八日

思考を待っている。ところでぼくは、人々の予想を上回るもう一つの効果にここで注意したい。このような親愛の情をぼくの方が見せると、武装して髪を逆立てて迫ってきたこの臆病者の士気がすぐに消えることである。要するに、流れてきた雲のように、たちまち落ち合った二つの気分のうち、一方の気分がほほ笑みはじめるだけでよいのだ。もし君の方からほほ笑まないとしたら、君はほんとうのばか者となる。

人からいろいろ悪く言われないような人間、悪く思われないような人間など存在しない。人からいろいろよく言われないような人間、よく思われないような人間などもいないのだ。人間の性情というものは、人によろこばれないことなど何とも思わないようにできている。なぜなら、いらだつと変に意気高揚となるが、その気持ちが気おくれのすぐ後からついてくる。だから、きらわれていると思うと、それがじきに物事をいっそう悪くする。しかし、君はこういうことがよくわかったのだから、そういう戯れごとに落ち込まないようにすべきである。この経験は驚くべきものであるから、ぜひ一度経験することをおすすめしたい。自分自身の気分を支配することよりも他人の気分を直接支配する方がやさしいのである。話し相手の気分を用心深く操ることのできる者は、この方法によって自分の気分をなおす医者となる。なぜなら、会話のなかでは、ダンスのなかと同じように、人はそれぞれ相手を映す鏡となっているからである。

なぜなら、ほんとうに怒った時、われわれはまず、自分の肉体的激怒とぴったり一致する無数のことがらを想像する、しかもそれがあざやかであればあるだけますます怒りの証拠にもなる。そして同時にわれわれは、名優の演技のように、自分自身の心を打つ抑揚たっぷりでもっともらしい演説をつくり出すから。もしだれかほかの人がわれわれのまねをしているうちに興奮して、われわれの相手役をつとめようものなら、それこそ見事な悲劇が展開されよう。そこではたしかに、ことばから思想が生まれているのであって、思想があってそこからことばが出ているのではない。演劇のあらわす真理はおそらく、登場人物たちが自分の言ったことばについてたえず省察するところにあるのだろう。彼らのことばは神託のようなもので、その意味を自分で探っているのだ。

仲のよい夫婦のあいだで、いらだちまぎれにふと口をついて出たことばが、愚の骨頂を呈することがよくある。そういう見事な即興のことばなど一笑に付すことができなければならない。ところが、たいていの人はこの感情のオートマティスム〔自動操縦構造〕をまったく知らないのである。まるでホメロスの英雄たちのように、すべてをそのままに受け取る。そこから憎悪が生まれる。言わば想像的憎悪と呼ぶことのできるものである。憎悪を抱いている人間の確信の強さには感心する。訴訟の仲裁者は興奮のあまりいきり立っている証人の言うことなどほとんど聞かない。ところが、人間は訴訟の当事者

72 罵詈雑言

もし蓄音機が突然君に罵詈雑言を浴びせたとしたら、君は笑い出すであろう。もしある不機嫌な男が、何かの理由でほとんど声の出ないほど不機嫌になって、その怒りを満足させるために罵詈雑言をいう蓄音機をかけたとするなら、たまたまひどく傷つけることがあっても、そういう罵詈雑言が自分に向けられたものであるとは、だれも思わないであろう。しかし、罵詈雑言を浴びせるのが人間の顔である時には、それはみな以前から考えていたことであると、少なくともその時にはそう考えていたと、だれでも思いたくなるものだ。情念のゆたかな説得力によってだまされてしまうのである。人間の口から出る内容のないことばが、たいていの場合、何か意味のあるような恰好をしているためだ。

デカルトは『情念論』という本を書いている。これは彼の著作のなかでもっとも美しいものであるが、読む人があまりにも少ない。そこで彼が説明しているのは、まさに、どうやってわれわれの身体が、からだの形を通して、習慣のひだを通して、簡単に思惟を装うことができるのか、である。われわれ自身についてもまた、言えることである。

時として、たまたま人を傷つけてしまうような弾があるのは、まことに滑稽である。だれかがぼくのことをロシア語でののしっても、ぼくはかまわない。でも、たまたまロシア語を知っていたらどうなる？　実際のところ、ののしりのことばはすべて、訳のわからないことばである。そのことをよく理解するとは、悪口には理解すべきどんな意味もないと理解することだ。

一九一三年十一月十七日

になると、たちまち自分自身を信じ込んでしまう。何もかも全部信じ込んでしまうのだ。われわれが犯すもっとも驚くべきあやまちの一つは、長い間隠れていた考えが怒りによってあらわれると思い待っていることである。そんなことは千に一度だって起こりえないのだ。人間は自分の思っていることを言いたければ、自分というものを保っていなければならない。それは言うまでもないことだ。ところが、反駁へ熱中するあまり、かっとなって急ぎすぎて、そのことを忘れてしまうのだろう。『赤と黒』のなかでピラール神父が、その問題を見越している。彼は友人に言う、「私は不機嫌になりやすい質でね、ひょっとすると私たちはことばをかわさないようになってしまうかもしれない」と。無邪気さもここまでくれば何をか言わんやである。え、何だって？　もしぼくの怒りが蓄音機のどなり声だとしたら、つまり胆汁や胃袋や喉のはたらきだとしたら、そしてぼく自身そのことをよく知っていたら、そのへたくそな悲劇役者の長広舌の真っただ中に、口笛を吹いてやじったらいけないとでもいうのかね。

まったく意味のない叫びである罵りの問投詞は、何ら人を傷つけることなく取り返しのつかぬことを言わずに、怒りに出口を与えるために、いわば本能的に発明されたのかもしれない。とすると、あの馭者たちはしたがって、右往左往する人ごみの中で、自分ではそれと知らずに哲学者となっているのである。ところが、こうした空砲のなかに、

それでも、痕跡がある。だれもみんな痕跡があるのだ。われわれはあまりにも簡単に、あまりにもささいな原因で泣き言をいう。しかも、ほんとうの苦痛を迎える状況になると、その苦痛をいかにも見せびらかさねばならないと思っている。この点については、教会の堂守くさいまちがった判断が広まっている。上手に泣くことのできる人は何でも許してもらえるというのである。だから、墓の前でどんな悲劇が演じられるか見るがいい。弔辞を述べる者は悲しみに打ちのめされたようで、ことばがのどにつまっている。もし古人が見たら、われわれを憐れむであろう。こう思うであろう、「何だ、これは？慰めのことばではないではないか。人生を生きる道案内ではないではないか。悲劇を演じているにすぎない。死と悲しみとを教えているだけではないか」と。あの野蛮な頌歌「Dies Irae(神の怒りの日)」を、古人はどう思うだろうか。この頌歌を悲劇のところへくり入れるだろうと思う。彼はこう言うだろう、「なぜなら、憂鬱なパッシオンを味わっていられるのは、自分自身が苦痛のただ中にいないからだ。そのかぎりでは、ぼくにも有益な教えである。でも、ほんとうの苦痛が訪れたら、その時自分のなすべきことはただ一つしかない。人間らしく振舞い、強く生きること。おのが意志と生命とを一つにして、不幸と敢然とたたかうことだ。ちょうど戦士が敵と相対するのと同じように。そして、死者たちのことを、できるかぎり友情とよろこびをもって語ることである。と

73 上機嫌

もしぼくが、たまたま道徳論を書かねばならなくなったとしたら、ぼくが書くべき第一のものは上機嫌についてであろう。どこやらの残忍な宗教がわれわれに、悲しみこそ大いなる美しきものであり、賢者は自分の墓を掘りながら死について瞑想しなければならない、と教えている。ぼくは十歳の時、トラピスト大修道院を訪ねた。修道士たちが毎日少しずつ掘っているその墓や、生者を信仰に導くため死んだ人をまる一週間置いておく死者のための礼拝堂を見たのである。この陰鬱なイマージュとあの死骸の匂いは、その後長い間ぼくにつきまとって離れなかったのである。要するに、修道士たちはあまりに多くをあかししようとしたのだ。だが、正確なことはもうわからない。なぜなら、いつ、どんな理由で、ぼくがカトリックを離れたかは忘れてしまったから。しかし、その時以来、ぼくは思った。「人生の蘊奥（うんのう）がそこにあるなどということは絶対ありえない」と。ぼくは自分の存在を賭して、この悲しく哀れな修道士たちと戦っている。こうしてぼくは、まるで何かの病から解き放されるかのごとく、彼らの宗教から解き放されたのだった。

74　一つの治療法

みんながそれぞれ自分のやっている治療法を、入浴だの、シャワーだの、食餌療法だのを話した。すると、もう一人の男が言った。「ぼくはね、二週間前から上機嫌という一つの治療法をやっているのだが、とても具合がいいよ。こういう時があるよね。考えることがどうも棘々しくなる時とか、むしゃくしゃして何でもかでもけちをつける時とか、他人のなかにも自分のなかにももはや何ひとつ美しいものや良いものが見出せない時とか。考えがこういう方向に向いた時が、上機嫌療法が必要な時なのだ。それはね、要するに、不運に見舞われた時はいつも、とりわけ、この治療法をやっていなかったら、それこそ相手にのろいの言葉を浴びせてしまうようなくだらぬことがらに出会った時、上機嫌に振舞うことなんだ。これをやると、そういう小さな悩みが逆に大いに役立つのだ。ちょうど坂道をのぼるおかげで足が強くなるのと同じように」と。

その男はさらに続けて言った。「寄り集まっては不平を言ったりぐちをこぼすわずらわしい連中がいる。ふつうの時なら、そういう連中は避ける。ところが、上機嫌法をやっている時は逆で、彼らをさがす。彼らはちょうど、あの室内トレーニング用のエキス

ころが、あの連中ときたら、絶望しているのだから。もし死者たちが彼らを見たら、恥ずかしがるであろう」と。

その通りである。司祭たちの嘘を退けた後、われわれにはまだ、しなければならないことがある。堂々と生きること、自分自身の心に激しい苦痛を与えないこと、そして伝染によって、大げさな悲劇的なことばによって、他人に苦痛を与えないことである。さらにもっとよいことがある。なぜなら、すべてのことは互いにつながっているのだから。人生の小さな不幸について、それを吹聴したり、見せびらかしたり、誇張したりしないことである。他人に対して、また自分に対しても親切であること。他人が生きるのを支えてあげること、自分が生きて行くのも支えてあげること。これこそ、ほんとうの愛徳（シャリテ）である。親切とはよろこびにほかならない。愛（アムール）とはよろこびにほかならない。

一九〇九年十月十日

うつ生命があふれ出てくる。食欲が進み、命の洗濯ができて、人生がよいものに感じられる。でも、」と彼は言う、「ここでもうやめます。みんな、もうはればれした顔をしているから、もはやぼくの上機嫌法は君たちに用はない」と。

一九一一年九月二十四日

パンダーと同じだ。最初はもっとも弱いエキスパンダーを引いて、慣れるとだんだん強いのが引けるようになる。同じようにして、ぼくは友人や知人たちを不機嫌の強さの順に、だんだん強くなるように並べる。そして順々に、彼らを用いてトレーニングをする。彼らがまだ、いつもよりだいぶ気むずかしくて、どうやってもみごとな罵詈雑言を浴びせてくる時にはこう思うのだ。『よし、これは手応えがあるぞ。負けるな、わが心(モンクール)よ。行け！　ほら、あの不平をさらにかきたてるのだ』と。

彼はさらに続けた。「上機嫌法のためには、人間でなくても、物でもよい、よいと言うのは実際は悪いことなのだが。こげついたシチュー、固くなったパン、かんかん照り、すごい埃(ほこり)、支払いの終わっていない勘定、ほとんどからっぽの財布、これらが貴重な試練となるのである。こう思うのである。ボクシングにおけるように、フェンシングにおけるように、ほら、すごい一撃がくるぞ。かわすか、それともまともに受けるかだ、と。ふつうの時には、子どもみたいにわめき始める。そして、わめき出したことが恥ずかしくて、もっと強くわめくのである。ところが、上機嫌法をやっていると、ものごとの展開がまったくちがってくる。そのことが気持ちのいいシャワーのように感じられる。身ぶるいをし、さっと肩をすくめる。それから、筋肉をのばし、柔らかくする。筋肉を、ぬれた下着のように、次々とぬぎすてる。すると、せきを切った泉のように、豊かに波

ように。そういうばかげたことはすべて、すぐ忘れてしまうので、「何を考えているのですか」というきわめて単純そうな質問にも正確に答えることはけっしてできないのである。こうして思惟がめぐりめぐっているうちに、くだらない考えや、たわいない考えに到ることがよくある。それはしかし、精神の健やかさなのだ。だから、もしどちらかを選ばなければならないとしたら、ぼくは偏執的よりも無頓着な方が好きだ。

子どもや人間にものを教えている人たちは、はたしてこの点について十分に考えたことがあるだろうか。彼らの言っていることを聞いていると、何かまるでセメントで固められたようなびくともしない考えを身につけることが肝要なことのように思われてくるのである。記憶力を強化する滑稽な訓練によって早くからその方向に習慣づけられてしまう。だから、一生涯の間へたな詩や内容のない格言を数珠のように持ち歩き、一歩ごとにつまずいている。それから、連禱のそれぞれの専門に閉じこめられ、何度も反芻するように教え込まれる。この教えは年齢が行くと危険なものとなる。教えられた考えに対して辛辣な気分が生まれはじめるからだ。かつて地理を詩でもって暗誦したように、今度は心のなかで自分の悲しみをくりかえし唱えるようになる。

反対に、思考力を解き放ちたまえ。精神の健やかさのための規則を与えよう。「同じ考えをけっして二度考えるな」。それに答えて、心気症の患者は言うだろう、「自分で

75 精神の健やかさ

きのう、ぼくは誇大妄想にとらわれたある種の狂人に関する記事を読んだ。いつも同じ見方でものを見てしまうために、しまいには自分が迫害されていると思い込み、やがて危険なものとなり、閉じ込めることが必要になる。これを読んで、ぼくは悲しい思いにとらわれた(狂人のことを考えること以上に悲しいことがあるだろうか)。しかしながら、その時、昔聞いたことのあるすぐれた答えを思い出した。ある賢者のいる前で、被害妄想におそわれ半狂乱となった男のことが話題となった時のこと。この男はおまけに、足がいつも冷えていたのだ。すると、その賢者のいわく、「血のめぐりが悪い、思惟のめぐりが悪い」。このことばはよく考えてみる価値がある。

ほんとうのところ、われわれはだれも、狂人の思惟をほしいままにしている。ちょうど夢を見たり、さまざまなイマージュを滑稽な形で結びつけてしまうように。とりわけ、心の中のことばがつっかえるのだ。発音の間違いによって、しばしば、ばかげた考えに陥ってしまう。ただし、われわれはそこにいつまでもとどまってはいない。ふつうの人の場合、考えはめまぐるしく変わって行く。ちょうど小さい羽虫があちこち飛びまわる

がなおっているのがわかった。思考のめぐりが回復していたのだ。

一九〇七年十月九日

はどうにもならないのですよ。脳細胞がそのように出来上がっていて、どうしたって血がそういうふうに流れるのだから」と。それはだれでもわかっている。しかし、われわれは脳細胞にマッサージを与える方法をよく知っている。考えを変えるだけでよいのだ。もしその気になれば、むずかしいことではない。脳みそを浄化するため成功確実な方法には二通りある。一つは、自分のまわりをよくながめ、さまざまな光景をシャワーを浴びるごとく、全身で受けとめることである。光景はいくらでもある。もう一つは、結果から原因にまでさかのぼることである。これは憂鬱なイマージュを追い払う確実な方法である。なぜなら、原因と結果のつながりを考えることによって、われわれは旅に連れ出され、すぐにかなり遠くへ出かけるからである。それは変わったやり方で神託にうかがいを立てることである。それは、あたかもどういう考えから、巫女のピュティアはこのおれがしまいには守銭奴になると予言したのかとは考えないで、どうして彼女の口から、他の言葉でなくこの言葉が出たのか理解しようと欲するようなものだ。ぼくの思惟は母音と子音とをめぐり、一から他へと到る自然な坂道をめぐっている。音声学のすべてが繰り広げられる。ある人が少しこわい夢を見た。ぼくから夢のほんとうの原因——これはしばしば、ちょっとした体の不調と結ばれた知覚のなかにある——をさがすようにすすめられたので、彼は思い当たるところを片っぱしから調べた。その時ぼくは、彼

ない人たちのことである。

したがって、ものごとの原因から理解しなければならない。そしてぼくは、その原因もまた、デカルトのなかに見出すのである。なぜなら、デカルトはこう言っているからだ。われわれの生まれて最初の愛、もっとも古い愛とは、あの十分な栄養に満ちた血液、あの澄みきった空気、あの心地よい暖かさ、要するに乳呑み子が成育するためのいっさいのもの以外何があるというのか、と。生まれてまもなく、われわれはこの愛のことばを覚えた。まず自分の自分自身に対する愛によって学び、あまい乳を受け取る生命の器官のあの運動、あの屈折、あの甘美な調和によって表現した。おいしいスープを口に入れてうなずくあの首の動かし方は、あの最初の同意の仕方とまったく同じ仕方であった。それから、見たまえ、正反対の現象を、すなわち熱すぎるスープには子どもの頭と全身とがあんなにもいやだと言っていることを。同様にしてまた、胃や心臓や全身が害となるいっさいの食物に対して拒否反応を示し、最後には嘔吐によってそれを突き返してしまう。この嘔吐とは、軽蔑と非難と嫌悪のもっとも強い表現で、もっとも古くからある表現なのである。だからデカルトは、ホメロスのような簡潔さと力強さをもって、憎悪はどんな人間においても消化をさまたげるものだと言っている。

このすばらしい考え方は拡大することができる。意味を深めて発展させることができ

76 乳への讃歌

ぼくはデカルトのなかに、愛の情念は健康によいものであるが、憎悪は反対に、悪いものだというあの考えを見つけた。よく知られた観念だが、あまりなじみがないものだ。もっと正確に言えば、だれもそれを信じていない。もしデカルトがホメロスや聖書とほぼ同じように世間の嘲笑に超然として存するものでなかったら、それも一笑に付されるであろう。しかしながら、もしも人間が憎悪がもとでやっているすべてのことを、愛によって行なうことにふと気づいたとしたら、つまり、そういう愛と憎悪とが混ざったもの、それが人間であり、行為であり、制作なのだが、その中からいつも美しいもの、愛すべきものを選ぶようになったとしたら、大いなる進歩であろう。それこそ、悪しきものを抑えることのできるもっとも強力な手段である。要するに、へたな音楽を口笛を吹いてやじるよりも、すばらしい音楽に拍手喝采する方が、もっとすぐれた方法であり、もっと正当で、もっと有効な方法である。それはなぜか？　愛は魂の自然〔生理学〕から見ると強靱なものであり、憎悪は魂の自然から見ると弱いものであるから。しかし、情念に囚われている人間というのは、そもそも情念について書かれたことを、一言も信じ

77 友情

友情のなかにはすばらしいよろこびがある。よろこびが伝染するものであることに気づけば、そのことはすぐに理解される。ぼくがいることで友人が少しでもほんとうのよろこびを得るなら、そのよろこびを見たぼくが、今度はまたよろこびを感じるのである。このようにして、お互いに与えたよろこびが自分に返ってくるのである。と同時に、よろこびという隠されていた宝が、手の届くところに現われてくる。そして二人とも、「自分のなかに幸福があったのに、今まで全然手をつけることがなかったのだ」と思うのである。

よろこびの源泉は心の奥深くにある。それはぼくも認める。しかし、自分に対しても、すべてのものに対しても不満な人たちを見ることほど痛ましいものは何もないのだ。彼らは互いにくすぐり合って笑わせ合っているだけである。しかしまた、注意すべきは、よろこんでいる人もひとりだけでいたら、やがて自分のよろこびを忘れてしまうということだ。彼のよろこびはやがてすっかり眠り込んでしまう。そしてついには一種の茫然自失、ほとんど無感覚にいたるであろう。心の内部の感情があらわとなるためには、外

る。この考え方には飽きがこないのだ。意味の限界がないのである。愛の最初の讃歌は、母の乳へのあの讃歌であり、子どもはこれを全身をもって歌っている。子どもは貴重な食物を迎え入れ、抱きしめ、そしてあらゆる手段を使ってその最良部分を引き出しているのである。そして、乳を吸う時のこの熱狂的歓喜は、生理的な意味において、この世にあるすべての熱狂的歓喜の最初の手本であり、ほんとうの手本である。キスの最初の例が乳呑み子のなかにあることを知らない者がいるだろうか。乳呑み子はこの根元的敬虔の念については何ひとつ、けっして忘れることがない。この子はだからまた、十字架にキスをするのである。なぜなら、われわれの表わすしるしは身体から出てこなければならないのだから。そして同じように、人を呪う時の身ぶりは、汚れた空気を肺が拒否したり、すえた牛乳を胃が吐き出したりするような、身体をまもるすべての組織の示す古くからある身ぶりなのだ。軽率な読書家よ、もし料理のなかに憎悪の味付けがしてあるなら、君の食事からどんな利益が期待できるというのか。どうしてデカルトの『情念論』を読まないのか。なるほど、君の本屋もその本がどんなものかさえ知らないし、君の心理学者も似たり寄ったりだ。すべてはほとんど、いかに読むかを知るにある。

一九二四年一月二十一日

分を忘れることだと言っている。あまりにも単純な見解。自分自身から蝉脱(せんだつ)すればするほど、人はますます自分自身となるのだ。また、ますます強く自分は生きているのだと感じるようになるのである。君の薪を君の穴ぐらの中で朽ちてゆくままにしてはならぬ。

一九〇七年十二月二十七日

部の身ぶりが必要なのだ。もしある専制君主がぼくを投獄して権力を尊重させようとしたならば、ぼくは毎日ひとりで笑うことを健康法とするであろう。足を強化するためトレーニングをするのと同じように、ぼくは自分のよろこびを強化するためトレーニングをするであろう。

ここに一束の乾いた枝があるとする。この枝は見かけは枯れたようで、土みたいだ。実際、そこに放置されたら、土となるだろう。しかしながら、この枝は太陽から吸収した隠れた熱を秘めている。ほんのわずかな焔でも近づけて見たまえ。たちまちパチパチと音を立てて燃える炭火となるだろう。ただ、戸を揺り動かし、囚われている者を目ざめさせる必要があったのである。

そういうふうにして、よろこびを目ざめさせるためには何かを開始することが必要なのである。幼な子がはじめて笑うとき、その笑いは何ひとつ表現していないのだ。しあわせだから笑っているのではない。むしろぼくは、笑うからしあわせなのだ、と言いたい。幼な子は笑って楽しんでいる、ちょうど食べて楽しむのと同じように。しかし、まず食べる必要がある。そのことは、ただ笑いにだけ当てはまることではない。だから、考えていることを知るためにはことばが必要である。ひとりでいるかぎり、人は自分がほんとうに自分となるわけにはいかない。モラリストの馬鹿者たちは、愛することは自

ないのだ。わからないというのが、賭け事の規則なのだから。賭け事が退屈をなおす唯一の救済手段であるといわれても、ぼくは驚かない。なぜなら、退屈とは、とりわけ思案してもむだであることをよく知りながら、あえてあれこれ思案することであるから。

恋に陥り夜眠れない男が、あるいは失敗した野心家が、いったい何を悩んでいるのだろうかと思うのはもっともである。この種の病は思考のなかにすべてある。また一方では、身体のなかにすべてあるとも言えるけれども。眠りをさまたげるこの興奮状態は、ただ何ひとつ決定しないというあのむなしい決断、つまり決断拒否によるのだ。この決断拒否はその度ごとに身体のなかまで力が及んでいて、そのため身体は草の上に投げられた魚のごとく寝返りを打つことになる。決断拒否のなかには荒ぶる力があるのだ。「よし、決まった。すべてをぶち壊してやる」。ところが、思惟のおかげですぐに妥協策が講じられる。両方の側の結果が頭のなかで浮かんできて、何ひとつ進展が見られない。現実の行動をする時には、選択しなかった側のことは忘れられて、厳密に言えばもはやその選択肢は存在しないというメリットがある。なぜなら、行動によってすべての関係が変わってしまったからである。ところが、頭のなかで考えているだけでは何も変わらない。すべてのことが元のままである。どんな行動のなかにも賭けの要素がある。なぜなら、思惟が問題の穿鑿を窮める前に、思考をやめざるをえないからだ。

78 決断拒否

デカルトは、決断拒否はあやまちの中で最大のものであると言っている。彼はくりかえしそう言っている。だが、それを一度も説明していない。人間の本性についてそれ以上大いなる光を、ぼくは知らない。人間のすべての情念が、そして情念から生まれるあらゆる不毛な衝動・身ぶりが、そこから説明されるのである。人は偶然にすべてを賭ける勝負事が気に入っている。思い切って決断することができるからだ。この偶然の勝負事には魂の高貴な部分を占めている力があるが、人はあまり知らない。それは事物の本性に対する挑戦のようなものだ。この挑戦とは、すべてをほとんど同じものとしてしまうものであり、そこからわれわれは、ほんの小さなことで、ああでもないこうでもないと果てしなく考えつづけることになる。賭け事においては、いっさいが厳密な意味で同じなのである。だから、選択しなければならない。こういう抽象的なリスクは、省察に対する挑発のようなものである。一か八かやってみなければならない。勝負はすぐに答えを出す。われわれの思考を毒するあの悔恨など抱いていられない。悔恨など抱いていられないのは、その理由がないからだ。「もしわかっていたら」などとはけっして言え

分の考えていることがわかっているのだろうか。しかし、幾何学者の天才は、それはわかっていると決める。ただ変更や取り消しはできないとだけ断言する。一つの理論もよく見れば、決定され誓われた誤りしかないことがわかるだろう。この賭けにおける精神の力は、単に決めたにすぎないものを実証できたとはけっして思わないことにある。何ひとつ信じないでいつも確固たりうる秘訣だ。Il a résolu.〔彼は決心した。彼は解決した〕。これは美しい言葉である。一つの言葉のなかに二つの意味〔決断と解決〕がある。

一九二四年八月十二日

恐怖は裸の情念であって、もっともつらいものだが、それは決断拒否の強い思い、そう言ってよければ筋肉組織の有様以外の何ものでもない、とぼくはしばしば思った。行動を命じられているのに、それができないという感覚である。眩暈でも起こそうものなら、恐怖の顔がさらに研ぎ澄まされて迫ってくる。なぜなら、害悪はただ疑いにうちかつことができないところからくるのだから。人が恐怖で悩むのはいつも頭がよすぎるからである。この種の病において最悪なのは、退屈さの場合も同じだが、自分はもうそこから逃れられないものと自分に断を下してしまうことである。まず間違いなくそうである。自分を機械と思い込み、自分を貶めてしまうのである。原因も救済手段も示されたあの至上の、絶対の判断のなかに、デカルトのすべてが集約されている。戦いがもとめている徳。デカルトは従軍することを欲したのだ。ぼくにはそれがよくわかる。テュレンヌ元帥（一六一一―七五。二十年戦争、フロンドの乱などで活躍した名将）はいつも行動していた。そうして、決断拒否の病がなおり、敵をその病にかからせていたのである。

デカルトは思考において、これとまったく同じことをやっている。思考において大胆、そしていつも自分の命令によって動いている。いつも決断しているのである。幾何学者の決断拒否は、まことにもって滑稽であろう。なぜなら、この決断拒否は果てしなくつづくからである。一本の線には点がいくつあるのか。平行な二本の線を考えるとき、自

一見説明しがたい驚くべき力を持っていた。それは、起床にも就寝にも便器の使用法についてもすべてに法則を立てていたからである。ルイ十四世には絶対権があったから、これらの法則を課していたと言うべきではない。反対に、ルイ十四世自身が法則であったから、絶対権をもっていたのだと言わねばならない。側近の者たちはみんな、いつも自分が何をしなければならないかを、ほとんど正確に知っていた。ここにはエジプト風の安らぎをいくらか想わせるものがある。

戦争には人のきらうすべてのものがある。しかし、そこで推論はまちがってしまうのだ。人びとは実際は戦争のなかにすぐに平和を見出すからである。ほんとうの平和、つまりわれわれの膚のなかに住んでいる平和を。だれもみんな、自分が何をなすべきかをよく知っている。理性が不幸を想い起こさせてもむだで、ちっとも人をこわがらせはしない。理性によって快活の下地が隠されてしまうことはないのだ。人はみんな、はっきりと内容の決められた役割を見ている。すなわちそれぞれの分け前を。そして延期することのできない行動を知っている。すべての思いが、まずそこに走り、からだが後から付いていく。こういう同意から、すぐに暴風雨に見舞われた時と同じで、じっと我慢するという人間的状況が出来上がってしまう。権力がそんなに多くのものを獲得することに驚くだろうが、要求するものが多いから、獲得するものも多いのである。たとえば、

79 儀式

もし決断拒否があやまちのなかで最悪のものであるとしたら、儀式、役割、服装、流行がこの世を支配している神々であるのがよくわかる。思いつきでやることには何でもいらだってしまう。他のやり方が、他の言い方があると思うからではなく、それはむしろ、身体のなかで二つの行為の混淆が人をいらだたせるのである。そのことにわが僕(しもべ)である筋肉が動転してしまい、するとたちまち、わが専制君主である心臓もまた、あわてふためいてしまう。不意に催促された人間は、いわば病人のようなものだ。こういったわけで自由は人を意地悪にする。子どもがそれを示している。規則のない遊びをやっていると、子どもの遊びは必ず乱暴なものになってしまう。この点については、もし悪しき本能がいつも弓のように張られていて、掟がそれを抑えていると考えるとしたら、それは大間違いである。しかし、法則というのは気に入られている。反対に、法則がないのはいやなもので、決断拒否に陥り、いらだってしまう。それによって常軌を逸した行動に走るのである。裸の人間は狂気の沙汰である。服装はもう立派な法則である。どんな法則でも服装のように気に入られている。ルイ十四世は、彼に近づく人々に対して、

のである。ここで苦痛が生まれるのは、あとで救われた時に強い安心感を得るためにほかならない。芝居見物と同じである。そこから、きのうは赤で安心できたのに、きょうは青でないと安心できないということになる。その点で世間の考えが一致しているというのである。この一致こそあかしなのだ。そこから落ち着きが生まれる。安心はほんとうに人を美しく見せる。なぜなら、黄色が金髪の女にほとんど合わないのは確かだし、緑が茶色の髪に合わないのも確かなのだから。しかし、不安や羨望や悔恨からくるしかめ面は、だれにも似合わない。

一九二三年九月二十三日

修道院の規律がこれと同じである。決断拒否をなおすにはじつによく効く。ただお祈りをすすめるだけではだめなのだ。何時に、何の祈禱をせよ、と命令しなければならない。権力の命令はいつも、まったくつっけんどんな、どんな理由も言わぬ命令である。そこには権力に特有の知恵があるのだ。たった一つでも理由を与えようものなら、たちまちちがった考えが、無数の思考が生まれてくるだろう。なるほど、考えるのは楽しいことである。だが、考える楽しみは決断する術によって支払われる必要がある。デカルトはこの種の人間の典型である。デカルトが従軍したことはよく知られている。彼は自分の楽しみからそうしたと言うのは正しくない。自分にまとわりつきすぎているさまざまな思考から自由となるための方法だったのだ。

人は流行のことは笑って真剣に考えたがらない。しかし、モードはきわめて真面目なものなのだ。「精神」すなわち人間は、それを軽蔑しているようでありながらも、まずネクタイを締める。軍服や修道服は心を落ち着かせるために驚くべき効果が見られる。それは安らかな眠りをもたらす衣服である。甘美な怠惰を、もっとも甘美な怠惰を、つまり考えなくて行動できる精神の怠惰をもたらす襞である。モードも同じ目的を追っている。ただ、選ぶというよろこびを巧みに残してある。もっともこのよろこびはまったく架空のものだ。色は魅力的であるが、自分が選ばねばならないとなると、不安になる

の礼儀作法である。これこそ贈り合うことによって増えて行く宝である。この宝を通りにも、電車のなかにも、新聞の売店にも蒔いたらよい。一粒たりとてむだにはなるまい。それの蒔かれた至るところで、上機嫌は芽を出し、その花が咲く。どこかの十字路で馬車が何台も交錯し合う時、ただもう悪口やののしりのことばの浴びせ合いである。馬は力いっぱい引っ張るから、混乱状態がおのずと、ますます深刻となるのである。当惑する事情はすべてそういうものだ。ほほ笑んでみよう、肩の力を抜いてみよう、君を右や左に引きずりまわす怒りを少しゆるめようという気持ちになれば、すぐに解消する。反対に、歯ぎしりしながら手綱の両端を引こうものなら、にっちもさっちも行かなくなる。マダムが歯ぎしりし、料理女が歯ぎしりし、子羊のもも肉が焼けすぎる。さあ、怒り狂ったことばが飛びかう。あの〔さまざまな伝承に見られる鎖につながれた〕プロメテウスたちが解き放され、自由となるためには、しかし、しかるべき時にほほ笑むだけでよかったのである。ところが、そんな簡単なことを、だれも考えない。みんな綱を力いっぱい引っ張ろうとするから、その綱によって首を締められてしまう。

社会生活によって不幸がさらに増加する。レストランに入るとする。隣のお客につい敵意のこもった眼差しをひとめ送る。メニューにも、ボーイにも同じ眼差しを送ってしまう。もうおしまいだ。不機嫌が顔から顔へすぐ伝わり、君のまわりにあるものすべて

80 新年おめでとう

お年玉の季節に交換されるあの贈り物はなんでも、よろこびよりも以上に憂鬱な気分をもたらすことがよくある。なぜなら、だれだって、いろいろとお金の勘定をしなくても新年を迎えられるほど金持ちではないからである。商人をもうけさせるために、あちこちからいただいたり、あちこちに贈ったりしたごみの山を、密かに嘆いている人も多いだろう。つき合いの多い両親をもったある小さな娘が、ある年の暮れにもらった最初の贈り物である吸取紙を見て、「さあ、吸取紙が来たよ」と言ったことばを、まだぼくはよく覚えている。こういう気違いじみた贈り物にはかなり冷淡な気持ちがこめられていたり、また押し殺した怒りがこめられていたりする。義理でやると、何もかも台なしにしてしまう。それと同時に、チョコレート・ボンボンは胃にもたれて、人間嫌いな気持ちを抱かせてしまう。なに、さっさと人にあげてしまおう、さっさと食ってしまおう。ほんの一時のことじゃないか。

真面目な話にもどる。君が上機嫌であることをお祈りする。これこそ交換し合うべきものである。これこそみんなの心を豊かにする、まず贈る人の心を豊かにするほんとう

81　お祝いのことば

正月になるとさかんに交換されるあの新年のあいさつや、お祝いのことばは、しるしにすぎない。それはそれでよい。しかし、しるしには非常に重大な意味がある。人間は何百年も何千年も、しるしに従って生きてきたのである。あたかも宇宙全体が、ひとつの意志をもっていて、雲や雷や鳥たちの姿で現われて、豊かな狩猟を告げたり、ひどい旅を告げたりしているかのごとくである。ところが、宇宙はこれの後にはそれが来るということしか告げることができない。だから、誤謬はただ、この世界を、是認したり非難したりする顔を持ったもののように解釈したことだけである。われわれはほとんど、宇宙には一つの意見があるだろうか、どんな意見なのだろうかと思うような迷いからは醒めている。しかし、われわれの同胞たちには一つの意見があるだろうか、どんな意見なのだろうかと思う迷いからはけっして醒めることがないだろう。けっして醒めることがないという理由は、この意見ははっきりと示されるやいなや、われわれの意見を根底から変えてしまうからである。

注目に値することがらがある。黙っている意見に対してよりも、それなりの根拠をも

が衝突する。コップは割れる。ボーイは今夜女房をなぐる。こういうものごとのメカニスム、こういう伝染の仕方をよく捉えるがいい。そうすれば、君はマジシャンだ。よろこびの贈り主（ドナー）だ。至るところにお恵みを垂れる神さまだ。ひとこと、親切なことばを、心からの感謝のことばを言ってごらん。冷淡なのろまに対しても親切にしてあげたまえ。君はこの上機嫌の波に乗ってどんな小さな浜辺にも行ける。料理を聞くボーイの調子がちがう。椅子を通り抜けるお客たちの様子がちがう。こうして、上機嫌の波が君のまわりに大きくなって、すべてのものを軽くする、まず君自身の心を。これには限界がない。しかし出発点をつかみたまえ。一日の初め、年の初めをよくしたまえ。この狭い通りの何とさわがしいこと！　何と多くの不正！　何と多くの暴力！　血が流れる。裁判官が介入する必要がある。こういうこと全部が、ただ一人の馭者が慎重であれば、手をほんの少し振れば、避けることができたのである。それゆえ、良き馭者であれ。馭者席ではくつろいだ気持ちで、馬は意のままに操ること。

一九一〇年一月二日

はたらきは、もっといっそう顕著である。ある種のまなざしにはいつも魔女のような呪縛力がこもっている。

あの礼儀正しさを示し合う祝日にもどる。これはたいせつな意味のある祝日である。郵便配達人が届けるあの年賀カード上の未来をながめる季節に、われわれにはどうなるのか知ることのできないこれからの数週間、数か月が悲しみの気分で染まってしまうのは非常によくない。人はみな、その日には良き予言者であること、人はみな、友情の旗を掲げることは適切なしきたりだ。風にひらめく旗を見ると、人間はうれしく思うものだ。その男はほかの人の気分がどうであったか、旗を立てた人がどんな気分だったか全然知らない。もっとさらにいいことは、顔にはっきり現われたこのよろこびは、すべての人に有益である。それがぼくのほとんど知らない人の顔なら、なおいっそういい。なぜなら、その時にはぼくはしるしについてあれこれ穿鑿しないから。しるしを、あるがままに解するからだ。それがいちばんいいことなのだ。よろこびに溢れたしるしは、そのしるしを送り出した人がよろこびを受け取りやすくなっているというのは深い真実である。よろこびに溢れたしるしは模倣されるので、果てしなく送り返されて行くからである。子どものよろこびは、子どものためだけのものだとは言わないほうがいい。深く考えなくとも、そこにどんな愛情も感じなくとも、われわれは子どものしるしには大い

った、明確なことばによる意見に対して、人はいっそう強く抵抗するものだ。後者の意見はアドヴァイスであり、たいてい、くだらぬと思うほうがいい。ところが、前者については無視することができないのだ。まったくつまらぬところで、われわれを捉える。どうやって捉えられたかわからないから、われわれはどうやったら逃れられるのか知らない。この世のどんなものに対しても非難の顔をひけらかしている人たちがいる。そういう場合には、できるだけ逃げるほうがいい。なぜなら、人間は人間をまねてしまうから。このぼく自身、顔つきが変わり、意識しないうちに、ぼくもまた非難することになろう。何を非難するのか？　何なのか全然わからない。ただ、ぼくのすべての考えが、すべての意図がこの悲しみの色に染まってしまう。そういう考えそのもの、意図そのものなかに、ぼくは理屈をさがすのである。理屈はさがすと、必ず見つかるものだ。なぜなら、すべてのことが複雑になっていて、危険はどこにでもあるからだ。だから、道を一本横切るだけのことでも、最後は行動しなければならない、つまり身を危険にさらさねばならない。そこでぼくは、恐る恐る渡る、すなわちさっさとは渡れない、自由には渡れないのだ。途中で自分が車にひかれそうだと考えた人間は、その考えに助けられるどころか、逆に立ちすくんでしまう。もっと長期間にわたることがら、もっと複雑で、もっと不確実なことがらにおいては、敵意のこもった顔つきから感じるこういう予感の

82 礼儀正しさ

礼儀正しさを学ぶのは、ダンスを学ぶのと同じである。ダンスを知らない人は、ダンスの規則を覚えて、それに合わせてからだを動かすのがむずかしいと思っている。しかし、それは物のうわべだけのことにすぎない。固くならず、なめらかに、したがって恐れずに踊れるようにならなければならない。同じようにして、礼儀作法の規則を覚えることは大したことではない。規則にかなっていたとしても、それはまだ礼儀作法の入り口に立ったにすぎないのだ。身ぶりがどれ一つとっても的確で、しなやかで、堅苦しさや動揺のないのが必要だ。なぜなら、ちょっとでも動揺があると、それがまず伝わってしまうから。相手に不安を与える礼儀作法があるだろうか。

声の響きそのものが無作法な人間に、ぼくは何度も出会ったことがある。歌の先生だったら、のどを締めつけているとか、肩に力が入りすぎているとか言うだろう。肩の動かし方ひとつで、礼儀にかなった行為が無作法になってしまうのである。情熱的すぎる。落ち着きがわざとらしい。力みすぎている。フェンシングの先生たちはいつも言っている、「力が入りすぎているぞ」と。フェンシングは、言わば礼儀正しさのスポーツであ

なる注意を払っているものである。だれもみんな、ここでは乳母となっている。だれでもみんな、ここでは子どもを理解せんがために真似るという遊びを始め、そうして子どもを教育しているのである。

この祝日は君にとっていい日であろう。君自身がそれを望もうとも望まなくとも、である。しかし、もしそれを望んだなら、もし君が礼儀というこの偉大な考えをあらゆる角度から検討するなら、その時にはこの祝日はほんとうに君のための祝日となるであろう。なぜなら、君の考えをしるしに従って整えれば、君は来たるべき数か月の間、悪意のこもったしるしは何も、人のよろこびを損なうかもしれないような前兆は何ひとつ送り出すまいという何らかの固い決心をするだろうから。こうしてまず、君自身、これらの小さな不幸に対して強くなるだろうから。こうした不幸はとるに足らぬことなのだが、悲しげにそれを演説すると、そこから何かが出てくるのだ。そうして、君は希望におけるこの幸福によってたちまち幸福になるであろう。それこそ、ぼくが望んでいることである。

一九二六年十二月二十日

論じ合っているのを聞いたことがある。その口調はたけり立った憎悪の口調だった。こうして、情念は病気よりもずっと早く広まるものだから、もっとも無邪気な意見のなかに激高があらわれても、ぼくは驚かない。それはしばしば一種の恐怖心にほかならない。この恐怖心は自分の声が荒々しく響くため、また自分の力が思うようにならない自分の前で空転するのを見て、ますます増大する。狂信的行為が最初無作法な態度をとることは大いにありうることだ。なぜなら、自分ではそれほどの気もなく言ったことを、しまいには本人もそう思いこむものだから。したがって、狂信的行為は臆病さから出てくる一つの結果であろう。自分の思っていることをうまく主張できないことに対する恐れである。そして結局、その恐怖を我慢できないものだから、自分に対する激怒、そしてすべての人に対する激怒となる。この激高によって絶対おかしいと思われるような意見が恐るべき力を得ることになる。臆病な人間をよく見るがいい。そういう人たちがどうやって決心するのかを見たまえ。痙攣も奇妙きてれつな考え方であることを知るであろう。こうして、まわり道をしたおかげで、茶碗一つ手にもつその持ち方に、いかにその人の気品が出るものかわかるのである。フェンシングの先生は、コーヒー茶碗のなかで、余計な動きひとつなしに、スプーンをまわす回し方を見ただけで、剣士の腕を見抜いたのである。

一九二二年一月六日

って、これはそのままどんな礼儀作法にも通ずる。粗暴さや荒ぶる力を感じさせるものはすべて、無作法である。そういうきざしだけで十分なのだ。険悪な雰囲気だけで十分なのだ。無作法はいつも、言わばおどしのようなものだと言ってもさしつかえあるまい。そういう時には、女性の優美さはすぐ退却し、助けをもとめる。自分の力をうまくコントロールできなくて震えている人間が、大胆になってかっとなったら、いったい何を言いだすものやら？　したがって、大声で話すのはよくないことだ。サロンで見かけたジョレス（一八五九―一九一四。フランスの政治家。『ユマニテ』紙の創刊者）の姿は、他人の意見や習慣にはほとんど気を使わず、ネクタイが曲がっていることもしばしばだった。ところが、その声は礼儀作法そのものだった。耳にどんな力みも感じさせない歌っているような優しさがあったのだ。信じがたいことだ。なぜなら、だれの記憶にも鋼鉄のようなあの固い論証、仮借なき戦闘的論理と、あの低く吼えるような声、ライオンの咆哮があったからである。ほんとうの力は礼儀作法に反するものではない。それは礼儀作法を引き立てるものである。つまり「力の力」「力の上に加えられた力」である。

　無作法な人間は一人でいる時でもやはり無作法なのだ。ほんのわずかな動きにも力が入りすぎてしまう。ひきつった情念が感じられてしまう。そしてあの自分に対する恐怖すなわち臆病が感じられてしまうのだ。ぼくは、ある臆病な男が公の席で文法について

軽率なおしゃべりがもとで、思いがけずだれかを傷つけてしまうのはつらいことである。礼儀作法をわきまえた人間とは、害が救いがたいようにならないうちに、気まずさを感じ、品よく話を逸らす人間のことである。しかし、言うべきことと、言ってはならないこととをあらかじめ察するようになり、そして確信が持てないときは、その家の主人に話の方向を一任してしまうようになると、そこにはさらに豊かな礼儀作法があるといえる。これらはすべて、思いがけずだれかを傷つけることがないようにするためである。なぜなら、そういう人が危険な人物をちょうどいいところで怒らせる必要があると判断したならば、彼はそれをやってよいのだから。もうその時には、彼の行為は礼儀作法ではなく、本来の意味で道徳にかかわるものだから。

無作法はいつもへまをやらかす。だれかにその人の年齢を感じさせるのは意地悪である。しかし、その気はなかったのに、身ぶりや顔つきから、また思慮のないことば遣いからそうなったとすれば、それは無作法なのである。人の足を踏みつけるのは、もしわざとやったのなら、暴力である。そのつもりでなかったのなら、無作法である。無作法な行為は思いがけなく飛んでくる流れ弾丸である。礼儀作法をわきまえた人間はそれを避ける。自分の突こうと思うところにしか突きを入れない。突きはそれだけ鋭いわけだ。礼儀をわきまえるというのは、必ずしもへつらうことではない。

83 処世術

廷臣の慇懃さもあるが、これは醜いものだ。それに、あれは礼儀作法などとは言えない。意図的になされたことはすべて、礼儀作法の埒外にあると、ぼくは思う。たとえば、ほんとうに礼儀正しい人間は、軽蔑すべき人間や悪意のある人間に対しては断固とした態度をとり、しまいには手荒なまねをすることさえありうるだろう。それは無作法ではないのだ。計算ずくの親切もまた礼儀作法ではない。下心のあるへつらいも礼儀作法ではない。礼儀作法と言えるのはただ、とくに意識することなく行なった行為、とくに示そうというつもりもなく何かを示した行為のことである。

最初の衝動にかられている人間、すなわち思い浮かんだことを何でも言ってしまう人間、最初の感情に夢中になる人間、自分が何を経験しているのか気づかないうちから、遠慮会釈なく驚きや嫌悪感や楽しさを示してしまう人間、そういう人間は無作法な人間である。こういう人間はいつも言い訳を言っていなければならないであろう。なぜなら、そんなつもりはないのに、己が意に反して、他の人たちの心を乱し、心配させるからである。

かにすべきではない。

一九一一年三月二十一日

礼儀作法とは、身についた物腰であり、ゆとりである。無作法な人間とは、まるで皿や置物をひっかけでもするみたいに、自分のしたいと思っていることとは別のことをしてしまう人のことである。自分の言いたいと思っていることとはちがうことを言ってしまう人、あるいはぶっきらぼうな口調になったり、不必要な大声を上げたり、ためらってしまったり、早くてわからない言い方をしてしまい、自分が伝えたいと思っていることとちがうことを伝えてしまう人のことである。礼儀作法はしたがって、フェンシングを学ぶように、学ばれるものである。気障な奴とは、わけもわからないのにわざと大げさな言い方で伝える人間のことである。臆病な奴とは、気障なまねはしないのだが、どうやったらいいのかわからない人間のことである。というのも、彼は言葉や行為がどんなに大切なものか知っているからだ。だから、見たまえ。彼は話すまい、行動を起こすまいとしてちぢこまり、緊張してこちこちになっている。自分の身のうえに途方もない力を及ぼしているのだ。そのために、からだが震え、汗ばみ、顔は真っ赤、そしてありのままの自分よりかえっていっそう無器用になっている。反対に、優雅な物腰とは、表現と動作の安らかな幸福である。それはだれをも傷つけることのないもの、だれをも不安にすることのないものだ。幸福になるためには、この種の美点をそなえることがきわめて大切である。「ほんとうの生き方」を考えるとき、これらの美点はけっしておろそ

て尊大な態度はとるな。しかもそれは、自分より力の強い者に対した時に限る」。しかし、ほんとうのことを語るにしても声は張り上げない方がおそらくいいだろう。そして真実のなかでも良いことを選んで言ってやる方がいいだろう。

ほとんどどんなことがらにおいても、褒めてよい点があるものだ。なぜなら、ほんとうの動機などいつもわからないものであり、卑怯ではなく控え目な態度とみなしても、抜け目のなさではなく友情とみなしても何ひとつ損にはならないのだから。とりわけ、若者に対しては、推測にすぎないときは、すべてを最もよい方にとってあげたまえ。彼らをりっぱな姿に描き出してやりたまえ。彼らは自分をそのように思い込み、やがてそのような人間になるであろう。それに反し、批判することは何の役にも立たないのだ。たとえば、もし彼が詩人だったら、そのもっとも美しい詩句を覚えて引用してやりたまえ。もし彼が政治家だったら、悪いことをしなかったのを褒めてやりたまえ。

ここで今ぼくは、ある幼稚園での話を思い浮かべた。ちびのいたずらっ子が、これまで悪ふざけといたずら書きばかりしていた。ところが、ある日習字帳の三分の一ページほどきれいに書いた。女の先生が席の間をまわって良い点をつけていたが、あれほど苦労してやった三分の一ページにはまったく気づかなかったので、このちびのいたずらっ子は、「えっ……。ちくしょう！　なんてことだ！」と言った。そのものずばり言った

84　楽しませること

ぼくは「ほんとうの生き方」のことを語ったことがある。だが、それについては少し説明する必要があるだろう。「ほんとうの生き方」の中に、ぼくは「楽しませるべし」という規則を入れたい。この規則をぼくに言ったのはよく知っている男だった。彼はとても威勢のいい奴で、自分の性格までもつくり変えてしまった。こういう規則を言うと、はじめ意表をつかれてしまうものだ。楽しませるなんて、嘘をついたり、へつらったり、おべっかを言う人のことではないか、と思うのである。この規則の意味をよく理解してもらおう。それはどういうことかと言うと、嘘を言わないで卑劣にもならないで、機会が訪れる度ごとにいつも楽しませることである。ところで、ほとんどいつだってそれはできるはずである。かん高い声で真っ赤になって人のいやがる真実を言い張るのは、ただ気持ちが動揺してしまったからだ。それは手当の仕方を知らぬ一時的な病気にすぎない。あとになって、もっと勇気を出せばよかったと思ってもだめだ。あやしいものである、もし思い切って危険をおかしたか、前もって充分考えた上でしたのでなければ。そこから、ぼくはこういう教訓を引き出す。「心からそれを欲したのでなければ、けっし

って、すべての摩擦がやわらぐところにあるのだ。ところが、このような礼儀作法を教えているところはほとんどどこにもない。いわゆる礼儀正しい社交界のなかで、ぼくは腰の低い人はたくさん見たが、ほんとうに礼儀正しい人間には今まで一人も出会ったことがない。

一九一一年三月八日

のだ。なぜなら、この幼稚園はパリのフォーブル・サン＝ジェルマン界隈（かつての貴族街）にあったわけではないから。すると、先生は彼のところにもどってきて、良い点をつけてくれた。何も説明なしに。問題となっていたのは習字であって、よい言葉遣いではなかったからである。

しかし、この話はむずかしい例である。いつだって、ためらうことなく、ほほ笑んで、礼儀正しく思いやりのある態度を見せることのできる例はほかにたくさんある。人ごみのなかでちょっと押されたくらいなら、まず笑ってすますものと決めておきたまえ。笑えば、押し合いは解消する。なぜなら、ちょっと怒りすぎたな、とだれもみんな恥ずかしくなるからだ。そうすれば、君はおそらく、大いなる怒りを、すなわち小さな病気をまぬがれる。

ぼくの考えている礼儀作法とはそういうものなのだ。つまり荒ぶる情念をなだめる体操なのだ。礼儀作法をわきまえるというのは、すべての身ぶりを通して、すべての言葉をつくして、「いらいらしないように。われわれに与えられた人生のこの瞬間を台なしにしないように」と示すこと、言うことである。では、それは福音書の宣べている親切ではないのか？　とんでもない。ぼくはそこまでは行かない。親切は無遠慮になって人を侮辱することがあるものだ。ほんとうの礼儀作法とは、むしろよろこびが伝わって行

あるいは内臓が洪水に見舞われたようになり、だれでも知っている不快な症状になる。こういう症状に対して、筋肉の規則正しい運動は、たしかに最良の治療法となる。音楽がダンスの先生の姿をして現われるのはここなのだ。この先生は、安物の小さなヴァイオリンを使って、内臓の血液循環を最良の状態に調整してくれる。こうしてダンスは、だれでも知っているように、臆病をなおしてくれる。筋肉を適度かつ滑らかな形で伸ばすことによって、別な具合に、心臓の負担を減らしてくれるのである。

この間ある男が、頭痛に悩んでいた男だが、ぼくに言った。食事の間はものを噛んでいるので頭痛が治まった、と。「じゃあ、アメリカ人みたいに、チューインガムを噛んだらいい」と、ぼくは言ってやった。彼がそれをほんとうにやったかどうか知らない。苦痛におそわれると、われわれはすぐに弁証法的な考え方に陥ってしまう。痛みのある箇所に病気を想像するのだ。この病気は皮膚の下に入り込んだ想像上のもので、われわれはそれを魔法を使って追い払いたがるのである。怪物に噛まれているようなこの苦痛が、筋肉の規則正しい運動によってほんとうに消えるとは信じないのだ。しかし、一般には、噛みつく怪物もいなければ、それに似たなにものもいないのである。へたな隠喩（メタファー）にすぎない。長時間片足で立ちつづけてごらん。激しい苦痛を生じるにもそれをなくすにも、大して姿勢を変える必要のないことがわかるだろう。どんな場合でも、た

85　名医プラトン

体操と音楽は、名医プラトンの用いる二大療法であった。体操とは、筋肉が筋肉自身に対してなす適度なトレーニングである。それは筋肉を伸ばすため、筋肉をその形に応じて内部からマッサージするためである。痛めている筋肉はほこりで一杯のスポンジに似ている。筋肉を直すには、スポンジをきれいにするのと同じように、液体をいっぱい含ませて搾ることを何度かくりかえすのである。生理学者たちは、心臓は中が空洞になった筋肉である、とよく言っていたものだ。しかし、筋肉は無数の血管叢からなっていて、この血管叢が筋肉の収縮と弛緩とによって圧縮と膨脹をくりかえしているのであるから、それぞれの筋肉は、言わば海綿質の心臓であって、大切な力の原動力であるこの心臓の動きは、意志によって調整されうると言っても悪くあるまい。だから、体操によって自分の筋肉をつかさどることのできない者、いわゆる臆病な人たちは、からだの中に血液の乱れを生じ、言わば不整脈があらわれて、それがやわらかい部分に向かうのである。そのために、理由もないのに顔を赤らめたり、大脳があまりに圧迫された血液でいっぱいになったりする。そういう時にはちょっとした錯乱状態をひき起こしている。

86　健康を維持する方法

心が落ち着いているからといって、ふつうは、具体的な報酬が得られるわけではない。しかし、それは必ず健康にはいい働きがある。幸福な人間は世間が自分のことを忘れても平気である。死後四十年もすれば名誉の方が彼を探しにくるであろう。しかし、病気は欲望よりもずっと身近なもので、ずっと恐ろしいものだから、これに対しては幸福が最大の武器となる。そうは思っていない憂鬱な人間は、幸福は結果であって、原因ではないと、どこまでも言い張る。そんな考え方は単純すぎるというものだ。体力があるから、体操が好きになる。しかしまた、体操を望むから、体力ができるのである。要するに、こう言ってよければ、闘いや排泄を具合よくする内臓の態度があり、本人の首をしめ、仇をなす別な、反対の態度もある。なるほど指を広げるようには、自分の内臓を伸ばしたりマッサージするわけにはいかない。しかし、よろこびは内臓のよい状態の明白なしるしであるから、楽しく思ってやっていることはなんでも、きっとわれわれを健康にしてくれるものだと思う。

では、病気になってもよろこんでいなければならないのか。君は言うだろう、そんな

いていは、ある種のダンスをしてやればいいのである。だれでもよく知っているように、筋肉を伸ばすのは、また大きなあくびをするのはよろこびなのである。しかし、体操によってそれをやって、筋肉をときほぐす運動を開始しようとはだれも考えない。だから、眠ることのできない人たちは、眠たいまねをしたらいいだろう。からだの緊張を楽しくときほぐして行くまねをしたらいいだろう。ところが、実際はまったく正反対なのだ。彼らはいらいらのまねをし、不安のまねをし、怒りのまねをしているのである。ここには傲慢の根がある。人は傲慢になると、いつもいやというほど罰せられるものである。したがって、ぼくがやろうとしているのは、ギリシャの名医ヒポクラテスの帽子（キャップ）を借りて、その健康法にならって、ほんとうの謙遜を、つまり健康法の妹であり体操と音楽との娘を、描くことだ。

一九二二年二月四日

横切って、最悪の陣地に行かねばならなかったのである。

病気にかかってしまったのは過失ではない。これに対しては軍隊の規則も名誉も、何も文句が言えないのだ。心の中で期待に胸をおどらせて、病気の兆候を、死病であっても待ちかまえなかった兵士などいない。あの残虐きわまる生活のなかで、しまいには病気で死ぬのは実に心地よいことだと思うようになるのである。そういう思いは、どんな病気に対しても非常に強い抵抗力となる。よろこびが身体を、その隠れたところで按配する加減といったらすばらしいもので、どんな名医だってそれには及ばないのだ。万事を悪化させる、あの病気になるだろうという心配はもうない。よく言われるように、死を、神の恩寵として待ちうけていた昔の隠者たちが、百歳まで生きたことは、ぼくにとって驚きでもなんでもない。何にも興味をもたなくなってから老人たちが長生きすることに、われわれは感心する。この長寿の原因はおそらく、彼らが死ぬ恐怖を感じなくなったからであろう。これはよく理解しておけば必ず役に立つことである。同じように、騎手は怖いと思ってかたくなると、落馬することもよく理解しておけば必ず役に立つ。偉大で強力な策略である一種の無頓着はあるものだ。

一九二一年九月二十八日

こと無茶だ、できっこないよ、と。ちょっと待って。軍人の生活は、弾丸に当たることは別にして、健康にいいとは、昔からよく言われてきたところである。自分の軍隊経験から、ぼくはそれがわかった。三年間、まだ露のおりているなかを三周ほどまわり、ほんの小さな物音にも自分の穴にとんで帰るアナウサギの生活をしたからである。三年間というもの、疲れたということと眠りたいということ以外なにも感じなかった。ところで、その頃ぼくの胃の具合は現代病で、頭ばかり使いからだを動かさない人間がみんなそうなるように、二十歳の頃から死病に悩まされつづけていた。やがて自分のからだが今のように健康になると、それは田舎の空気と行動的な生活のおかげだ、と言われた。しかし、ぼくには原因はほかにあることがわかってきた。歩兵隊伍長が、彼はぼくに「もう怖くないさ。トランス状態（神がかりの状態、脱魂的状態）なのだから」と言っていた男だが、ある日ぼくの塹壕にうれしそうな顔をしてやってきた。「今度こそおれは病気だ。熱がある。軍医もそう言った。あすまた診てもらうのだ。たぶんチフスだろう。もう立っていられない。目がまわる。とうとう病院行きだ。二年半も泥にまみれていたのだから、おれがこの好運をいただくのは当然さ」と彼は言った。しかし、よろこびのために彼の病気はなおりかけているのが、ぼくにはよくわかった。翌日になると、もう熱どころではなかった。フリレー（戦場となった、フランス東北部の小さな村。そこの電話交換局で、アランは一九一六年に数か月間指揮をとった）の心地よい廃墟を

ことができないのである。詩人たちはこう言う。幸福ははるかなところにあるかぎり、将来にあるかぎり、すばらしいものに見えるが、幸福をつかんだとき、それは何らいいものではない。まるで虹をつかまえたい、あるいは手のひらで泉の水をすくいたいと思うようなものだ、と。しかし、この言い方は大ざっぱすぎる。幸福は追い求めることはできない、ことばだけでそれをやるのは別だが。自分の周りの幸福を求めている人が滅入ってしまうのは、それがほんとうに欲しいという気がまったく湧かないからである。トランプ遊びをすることにぼくはまったく関心がない。トランプをやらないからだ。ボクシングやフェンシングも同じだ。音楽だって同じく、最初のさまざまな困難を乗り越えた者でなければ楽しむことができない。読書だって同じ。バルザックのなかにはいり込むにはかなり勇気がいる。最初はバルザックに退屈するからだ。怠惰な読者に見られるしぐさは、なかなかおもしろい。まず本のページをぱらぱらとめくる、数行読む、そして放り投げる。本を読む楽しみはあらかじめ推しはかることがまったくできない。それは経験豊かな読書家でさえも驚くほどだ。学問は遠くから眺めていてもおもしろくない。学問の世界にはいり込むことが必要だ。始めは無理にやらねばならないこともある。乗り越えねばならないものはいつもある。仕事を規則正しくすること、そして困難を、さらなる困難をも乗り越えること、これがおそらく幸福に至る正道である。そして、行

87 克服

ある人が幸福を求める。するとたちまち彼には幸福を見つけることができないという宣告がなされてしまう。それはふしぎなことでもなんでもない。幸福はあのショー・ウィンドーに飾られている品物のように、人がそれを選んで、お金を払って、持ち帰ることのできるようなものではない。そういう品物はよく見ると、ショー・ウィンドーのなかでも自分の家のなかでも同じように青いものであったり赤いものであったりする。それに対し幸福は、人がそれを自分の手の中に入れなければ幸福ではないのだ。幸福を世界の中に、自分自身の外に求めるかぎり、何ひとつ幸福の姿をとっているものはないだろう。要するに、幸福については、論理的に推論したり予見したりすることができないのだ。今、幸福をもっていなければならない。君が将来幸福であるように思うとしたら、それはどういうことかをよく考えて見たまえ。それは今、君はすでに幸福をもっているからだ。期待を抱くこと、それはつまり幸福であるということなのだ。

しばしば詩人たちは物事を説明するのがへただ。なぜなのか、ぼくにはよくわかる。音節や韻を合わせることがかなりむずかしいので、どうしてもありふれた考えから出る

突然やってくる報酬である。

一九一一年三月十八日

動が共有される時、たとえばトランプ遊びのなか、音楽のなか、戦争のなかにおいて、そこで初めて幸福は生き生きと輝くのである。

しかし、「自分からやる」「根気よく続ける」「困難を乗り越える」という同じ符牒(しるし)をやはり持ちながらも自分一個の域を出ない幸福もある。たとえば、守銭奴や収集家の幸福だ。それに、この二種類の人たちは類似点が多い。とりわけ、守銭奴が古い金貨に執着したりすると、貪欲が悪徳とみなされるのはなぜか。一方では、店のショー・ウィンドーのなかに七宝や象牙、名画、稀覯本などを並べている人がむしろ感心されるのに——。守銭奴は自分の金貨を他の楽しみと変えようとしないといって笑われる。でも、本の収集家だって本をよごしたくないのでまったく読まない人がいる。ほんとうの意味では、これらの幸福は他の幸福と同じように、遠くから見てそれを味わうことのできるものではない。切手の好きな切手収集家がそうだ。ぼくには、それが全然わからない。同じく、ボクシングの好きなボクサー、狩猟の好きなハンター、政治の好きな政治家もそうだ。自由な行動だから幸福なのである。自分で規則をつくりそれに従っているから幸福なのである。一言でいえば、サッカーであれ学問研究であれ、規律を認容しそれにしたがうから幸福なのだ。そしてそういう義務は遠くから見るかぎり、おもしろくない。それどころか不愉快なものだ。幸福とは、報酬など全然求めていなかった者のところに

なぜなら、そういうものはまだ種に隷属している[1]、あるいはわれわれに、われわれの要求に依存しているから。絵画よりも音楽のほうがすぐれていることを弁論する者はだれもいないだろう。だが、原画（オリジナル）とコピーについて議論することは意味がある。オリジナルのなかには自由な精神のしるしがあり、それ自身の源から発展してきた性格のしるしがある。一方、コピーのなかには奴隷根性の痕跡と外からの発想による発展がある。ゲーテもシラーも、たがいの筆の端々にこのような相違を感じていたにちがいない。驚嘆すべきことは、互いに議論をかわし、しばしば完全性（真理）や理想について話し合いながらも、それぞれ固有の天分を忘れたことは、一瞬たりともなかったことである。どちらも相手に忠告をあたえているが、それは結局、「まあ、ぼくならこうしただろうな」ということだ。同時にまた、自分が相手にあたえている忠告は、相手にとってはゼロにひとしいとはっきり言わずも心得ている。そして相手は返事のなかで、自分独自の道を求めようと肚を決め、忠告者にたいしてもまた忠告をきっぱりと送り返している。

思うに、詩人というのは、そして芸術家はみんな、自分には何ができて、何ができないかを、幸福から告知されている。なぜなら、幸福とはアリストテレスの言うように、力のしるしであるから。ところで、この規則はすべての人に当てはまるものと、ぼくは信じている。およそこの世において退屈している人間ほどおそろしいものはない。底意

88 詩人たち

ゲーテとシラーのあいだには美しい友情がある。彼らが書き合っている手紙のなかにそれが見られる。互いに相手に対して、一個の精神がもう一個の精神に期待しうる唯一の援助をあたえている。それは相手の精神をみとめて、ただ彼がほんとうに彼自身であることだけを求めるものだ。人間をあるがままに見ることはたいしたことではない。そのレヴェルにはいつも達していなければならない。しかし、彼がほんとうに彼であって欲しいと思うこと、これこそ真実な愛である。だからこの二人の詩人たちは、それぞれが自分の外への探究心を伸ばしつつ、彼らの間には少なくとも、次のような共通理解があった。相違は美しいものだということ、また価値の秩序が設けられるのは、バラと馬との間ではなく、一本のバラと美しいバラ、一頭の馬と美しい馬との間であること。趣味の優劣を議論するなかれ、とはよく言ったものだ。ある者がバラが好きだといい、ある者が馬が好きだという場合、その通りである。しかし、美しいバラとは何であるか、美しい馬とは何であるかについては、議論することができる。一致点がありうるから。しかしながら、これらの例は、正しい考え方にしたがっているが、まだ抽象的である。

は思った。人に考えを強いるな、自由にさせてやりたまえ、怖がるのはやめたまえ。自由な人間は柔和な者で、武器など持たない。

一九二三年九月三日

訳注

（1）そういうものはまだ論理的特殊性である、つまりカテゴリー的、概念的である。

地の悪い人たちはみんな、退屈さに不満を感じているのだ。底意地が悪いから不満を感じているのではない。むしろ、彼らがどこへ行こうと彼らにつきまとっているこの退屈さは、彼らが自分のもっている完全性(真理)をまったく発揮していないこと、またしたがって、盲目的な、機械的(メカニック)な諸力のいうままに行動していることを示す符牒(しるし)なのだ。それにおそらくこの世には、もっとも深刻な不幸と純粋な悪意とを同時に表明するような人間など、凶暴な狂人以外にはいないだろう。そうは言っても、底意地が悪いと言われている人たちのなかに、またわれわれ自身のうちにも囚われた者の凶暴性と同時に、何かメカニックな、道を踏み外しているようなものがあるように思う。反対に、幸福感から為されたものは人を益するものだ。このことは芸術作品がはっきりとあかしているところだ。描かれた線がこのうえなく巧みな時に、それは幸福だという力強い言い方がある。ところで、人を益するわざというのはみな、それ自身美しい、また人間の顔を美しくするものだ。美しい顔というのは人に不安をあたえない。これは普遍的真理だ。そこからぼくは、あえて考える、完全性(真理)の間にはどんな対立もないだろう、衝突し合うのは不完全なものどうし、あるいは悪徳どうしではないか、と。恐怖心はそのことの顕著な例である。したがって、人に考えを強いるやり方、暴君や臆病な者はいつもそのやり方をするが、それはつねに御しがたい愚かさであり、狂気の温床である、とぼく

ている。ある者は幸福など徳から軽蔑されるものだと言わんとしている。これを言うのはむずかしいことではない。また、ある者はみんなの幸福こそ自分自身の幸福が生まれている真の源泉であると教えている。おそらくこれ以上空疎な意見はないだろう。なぜかというと、周りの人たちの間に幸福をそそぐことほど無益な仕事はあるまい。穴のあいた革袋に酒をそそぐようなものだ。ぼく自身よく経験したことだが、自分が自分であることにうんざりしている人、そんなひとを楽しませることはけっしてできない。反対に、物乞いのように施しをせがむのでない人、そういうひとには何かをあたえることができる。たとえば、自分を音楽家にした人間に音楽をあたえることができる。要するに、砂のなかに種を蒔いても何の役にも立たない。このことをよく考えながら、ぼくはあの有名な種を蒔く人の譬え（イエスの譬え、マタイ一三章）がよくわかったと思う。この譬えは何も持たない者は何ももらうことができないと断じているのである。自分一人で力を発揮し幸福になる者は、したがって、他の人たちによってさらに幸福となり力を発揮するであろう。たしかに幸福な人たちはよい取引を、たのしい交換をするであろう。人に幸福をあたえるためには自分自身のうちに幸福をもっていなければならない。だから、腹の据わった人間は、この角度からきっぱりと見なければならない。それによって彼は、何の役にも立たない愛から解放されるのである。

89　幸福は徳である

オーバーを着ることよりももっと、われわれの力から生まれたのでないような幸福がある。たとえば、遺産を相続する幸福、あるいは宝くじに当たる幸福など。また名誉もそうだ、名誉は偶然のものにすぎないからだ。しかし、われわれ自身の力から生まれる幸福は、反対に、われわれの存在に染み込んでいる。そのような幸福は羊毛が緋色染料で染められるよりも以上にわれわれの存在に染み込んでいるのである。古代の賢人は難船から救われてすっぱだかで陸に上がると、「おれは全財産を身につけているのだ」と言った。同じように、ワーグナーは音楽を身につけている。ミケランジェロは彼の描いた崇高な絵画をすべて、身につけている。ボクサーもその拳と脚とそのトレーニングの全成果とを身につけているのだ。メダルやお金をもつのとはまったく別の仕方ではあるが。だが、しかし、お金のもち方にもいろいろなものがある。いわゆる金儲けを知っている者は、全財産を失ってもまだ、自分自身があるから金持ちである。

古賢たちは幸福を求めている。隣人の幸福ではなく、自分自身の幸福を。今日の賢者たちは異口同音に、自分自身の幸福などあえて探求するほど高貴なものではないと教え

90　幸福は気前のいい奴だ

幸福になりたいと思って、そのための努力をしなければならない。どっちにころんでもいいという見物人の態度を決めこんで、ただドアを開いて幸福が入れるようにしているだけでは、入ってくるのは悲しみである。放任された単なる気分は、悲しみやいらだちにすぐ変わる。これこそが悲観主義の本領発揮だ。なに一つやることのない子どもを見ているとよくわかる。しかもすぐにわかることだ。子どもにとって遊びの魅力はほんとうにすごいもので、空腹やのどの渇きをかきたてる果物の魅力でさえもそれには及ばないのだ。しかし、ぼくがそこに見たいのはむしろ、遊びによってしあわせになろうとする強い意志だ。それは子どもでないほかの者たちだって同様である。そして意志はここに手がかりを見つける。だって、ただもう力いっぱい、動きまわり、コマをまわし、走り回り、大声を上げているだけでよいのだから。だれだってそうしようと思えばできることだ。だって、すぐにやれることだから。社交界の楽しみのなかにも同じような意志決定が見られる。この楽しみは規則にしたがう楽しみであり、衣装や態度から始めなければならない。そのことが規則を支えることになる。田舎に行く都会人は、田舎に行

したがってぼくは、自分一個の、自己の魂に親密な幸福は、けっして徳と対立するものではなく、むしろ、力を意味するあの美しい徳ということばが示しているように、そのような幸福自身が徳であると考えている。なぜなら、全き意味において最も幸福な人は、着物を投げ棄てるように、別の幸福などまったく平然と舷側の外へ投げ棄てる人であるのは自明だからだ。しかし彼のほんとうの豊かさは棄てない。棄てることができないのだ。突撃する歩兵や墜落する飛行士でさえもそれはできない。彼らの魂に親密な幸福は、彼らの生命と同じほど深く、彼ら自身と釘で打ちつけられている。彼らは武器でたたかうのと同じように、自分自身の幸福でたたかっている。そこから、倒れる英雄のなかにも幸福があると言えるのである。それはここで、もともとはスピノザのことばであった、あの励ます形を使って言わなければならない。彼らは祖国のために死んだから幸福だったのではない。反対に、幸福だったから死ぬ力があったのだ、と。願わくは、十一月の花環（死者の祭り）がこの心で編まれんことを。

一九二二年十一月六日

内部へのリアクションによってすぐに強く感じられる幸福である。これは絶えず生きている法則だが、絶えず忘れられている。このようにして、礼儀正しい人たちはただちに報酬を得ている。彼ら自身は報酬を得ていることに気づかないが。若者たちにとって最大の、最良の阿諛・諛悦は、しかもこれは必ず成功するものだが、それは年配の人たちの前でこの幸福の輝きを、すなわち美を絶やさないことである。この諛悦は、言わば若者たちが創り出すグラース(grâce＝優雅、美しさ、気品、恵み)である。人がグラースと呼ぶのは、この豊かな言葉の多くの意味のうちでも、無償の幸福・僥倖、つまり泉から湧き出てくるがごとくその人の存在そのものから(その人のわざではなく)湧出する幸福・恩寵である。好意となるともう少しの注意と意志がある。このわざは、若さの魅力だけでは十分でないときに働きをなすものである。しかし、どんな暴君であろうとも、よく食べるとか退屈を見せないことは、必ず暴君の御機嫌を取り結ぶことができるものである。したがって、憂鬱な暴君が、他人のよろこびなど好まないように見える暴君が、しばしば、心のなかでよろこびが何ものにもまして強く輝いている人たちに、ころりとまいってしまうのである。作家たちもまた、書くよろこびによって人を楽しませる。書くよろこびとか表現のめでたさとは至言である。飾りというものはすべて、よろこびなのだ。われわれ人間が求め合っているのは、ただ自分自身にとって最大のよろこびをも

くのが何よりも楽しいのである。行動が欲望を生み出すのである。われわれは自分のできないことを、ほんとうにやりたいとは思わない、とぼくは思う。そして希望しても助けてもらえなかったら悲しくなると思う。したがって、もしだれもみんな幸福を、貸したものを返してもらうように考えて待っているならば、私生活は必ず悲しみとなってしまう。

だれも家庭の暴君なら見たことがあるだろう。そしてエゴイストは、自分の幸福のために自分の周囲の人たちは生きているのだと考えるように思いたがる。それはあまりに単純な見方だ。ものごとはそうは行かないのだ。エゴイストは憂鬱な人間なのだ。なぜなら、彼は幸福を待っているからだ。たとえ小さな不都合が、それは必ずあるものだが、そういうものが何一つなくても、退屈がやってくる。したがって、エゴイストが自分を愛する人たちや怖がる人たちに課しているのは退屈と不幸でつくった法律なのだ。反対に、上機嫌というのは実に気前のいい奴なのだ。上機嫌は、何かをもらうというのではなく、むしろ人に与えている。なるほど、われわれは他人の幸福を考えねばならない。その通りだ。しかし、われわれが自分を愛する人たちのためになすことができる最善のことは、自分が幸福になることである。このことに人はまだあまり気づいていない。

礼儀作法が教えているのはそのことである。礼儀作法は外見の幸福である。外部から

91　幸福になる方法

子どもたちには幸福になる方法をよく教えねばならない。ぼくの言いたいのは、不幸に直接見舞われたとき幸福になる方法ではない。そんなものはストア派にまかせる。まあまあ何とかやって行けて、人生の苦しみといったところで、精々、ちょっとした退屈さや、ちょっとした厄介さだけのときに幸福になる方法である。

そのための第一の規則は、自分の不幸は、現在のものも過去のものも、絶対他人に言わないことである。他人に頭痛、嘔吐、胸やけ、腹痛をくわしく説明することは、どんなに言葉を選んで言ったとしても、失礼だと思われて当然である。不当な仕打ちを受けたことや失望したことについても同じことが言える。子どもや若い人たちに、そしてまた大人たちにも説明しなければならない、彼らがあまりにも忘れてしまっていると思われることを。すなわち自分について不平不満を言うことは、他人を悲しませるだけだ、つまり結局のところ、人に不快な思いをさせるだけだ。たとえそういう打ち明け話を聞きたがっていても、たとえ人を慰めるのが好きなように見えても、である。なぜなら、悲しみは毒みたいなものだから。悲しみが好きになるときもあろう。だが、悲しんでよ

たらすものだけである。だから、礼儀作法というのは「処世術」というすてきな名前をいただいたのである。

一九二三年四月十日

いるためであろう。人の言うように、策謀家は自分から苦しみをもとめている。だが、この苦しみは楽しみに変わる。音楽家の苦しみや画家の苦しみと同じである。しかし、策謀家がいちばんまさっているのは、あらゆる小さな苦しみから解放されていることだ。策謀家にはそういう苦しみを話す機会も暇もないからだ。大事なことは次の点だ。君が苦しみを語らなければ、ぼくの言うのは小さな苦しみだが、君は長くそれを考えてはいないということだ。

ぼくの考え出したこういう幸福になる方法のなかに、さらにまた、悪い天気をうまく利用する有益なアドヴァイスを入れたい。今これを書いている時、雨が降っている。瓦に雨の音がして、無数の雨樋が切れ目なく歌っている。空気が洗われて、まるで濾過されたみたいだ。雲は切れ切れになった華麗な衣装のようだ。こういう美しさがわかるようにならねばならない。ところが、ある人は言う、雨が降ると収穫物が台なしになる、と。また、もう一人は言う、何もかもが泥で汚れてしまう、と。そして三番目の人物は、草の上に座れるとたいへん気持ちがいいのだが、と言う。もちろんだ。だれでもそれはよく知っている。君が不平不満を言ったところで何ひとつなくなりはしないのだ。しかもぼくを家の中までも追って来る苦情の雨が降りかかる。それで、である。とりわけ雨の降る時こそ、晴れ渡った顔付きをしたいものだ。だから、天気の悪い時には

かったとは言えまい。最後に、ほんとうに納得するのは、いつも心のいちばん奥にある思いなのだ。だれでもみんな、生きることを求めている。死ぬことではないのだ。だから、生きている人びとをさがしている。つまりぼくの言うのは、自分に「これでよし」と言っている人たち、自分のよろこびを顔に出している人たちのことだ。各人が灰の上で泣き真似をする代わりに、それぞれの薪を火にくべたら、人間の社会は何とすばらしいものになることだろう！

これらの規則は、礼儀正しい上流社会の規則であったことを知るがいい。その社会では思いついたまま話すことがなかったので、退屈していたのは確かである。わが市民階級（ブルジョワジー）は交際のことばとしてどうしても必要な率直な物言いをとりもどすことができた。それはたいへん結構なことである。しかしながら、それは、「みなさん、ご自身の不幸なお話をどんどん出していいですよ」というわけではない。そんなことをしたら、退屈さがさらにいっそう深刻化するだけだ。それゆえ、交際は家族の外に拡がる必要がある。なぜなら、家族どうしの仲では、しばしば、打ち解けすぎて、心を許しすぎて、少しでも他人を楽しませようという気があれば考えもしないようなささいなことで不平不満を言うからである。権力をめぐって策謀をめぐらす楽しみはおそらく、そうしている時には必要に迫られて、聞かされたらうんざりするような無数の小さな不幸を忘れて

92　幸福にならねばならない

不幸になるのは、また不満を抱くのはやさしいことだ。ただじっと座っていればいいのだ、人が楽しませてくれるのを待っている王子のように。幸福を商品のように待ちかまえ値ぶみするそういう見方では、すべてのものが倦怠の色で染まってしまう。必ず威厳を誇示する。なぜなら、権力意識のようなものがあって、どんな捧げ物でも軽蔑してしまうからだ。しかし、そこにはまた、子どもが庭をつくるように、つまらぬもので幸福をつくり出す器用な職人たちに対するいらだちと怒りとがあると、ぼくは思う。ぼくは逃げる。自分自身に退屈している人たちをなぐさめることはできない。そのことを、ぼくは経験からよく知っているからである。

反対に、幸福は見た目にも美しいものである。これこそもっとも美しい光景である。子どもの美しさよりももっと美しいものがあるだろうか。しかも、子どもは遊びにすべてを打ち込んでいる。だれかが遊んでくれるのを待ってはいない。なるほど、すねた子どもは別の顔を、すべての楽しみを拒絶した顔付きを見せる。幸いにも、子どもというのはすぐに忘れる。ところが、だれもが知っているとおり、ふくれっ面をやめない大き

いい顔を。

一九一〇年九月八日

の言うのは自分のためにかちとる幸福だが、それはもっとも美しい捧げ物であり、もっとも恵み深いものであることを、たえず考えねばならないであろう。

ぼくはさらに、幸福になる決意をした人たちを、報酬として何か市民の月桂冠のようなもので表彰することを提案したい。なぜなら、ぼくの考えでは、これらの死骸や廃墟やばかげた浪費や警戒のための攻撃はすべて、幸福になることのできなかった人たち、幸福になろうとした人たちに我慢のならなかった人たちの引き起こしたわざだからである。ぼくの子どもだった頃は、重量型に属していた。なかなか負けない子、なかなか動じない子だった。腹を立てるのもおそかった。だからしばしば、憂鬱と退屈とでやせ細ったある軽量型が、ぼくの髪を引っぱったりつねったりしてばかにしたものだった。しまいには途方もないぼくの拳骨を一発くらって、けりがついたものであった。現在、ぼくは戦争を予告したり準備したりする醜い小人の姿をした地の精をよく知っているが、彼の言い分などけっして穿鑿しない。人が平穏に生きていることに我慢のならないあの悪意にみちた妖精どもについては、よく知っているからである。だから、平穏なフランスは、平穏なドイツと同じように、ぼくの目から見ると、意地悪な腕白どもの拳骨にうるさくつきまとわれて、しまいにはかっとなる頑健な子どものようである。

一九二三年三月十六日

な子どもがいる。彼らの理屈がなかなかのものであるのはよく知っている。幸福になるのは、いつだってむずかしいことなのだ。多くの出来事を乗り越えねばならない。大勢の敵と戦わねばならない。負けることだってある。乗り越えることのできない出来事や、ストア派の弟子などの手におえない不幸が絶対ある。しかし力いっぱい戦ったあとでなければ負けたと言うな。これはおそらく至上命令である。幸福になろうと欲しなければ、絶対幸福になれない。これは、何にもまして明白なことだと、ぼくは思う。したがって、自分の幸福を欲しなければならない。自分の幸福をつくり出さねばならない。

幸福になることはまた、他人に対する義務でもあるのだ。これはあまり人の気づいていないことである。人から愛されるのは幸福な人間だけである、とはいみじくも喝破したものだ。しかし、こういう報酬は正当なものであり、受けるに値するものだということが忘れられている。なぜなら、不幸や退屈さや絶望はわれわれみんなが吸っている空気のなかにあるのだから。だからわれわれは、そういう毒気にうちかった人たち、そしてすばらしい手本を示すことによって、言わばみんなの人生を浄化してくれた人たちには感謝の念とオリンピックのメダルとをささげねばならない。だから、愛のなかで絶対幸福になるという誓い以上に強い意味は何もないのだ。愛する人たちの退屈、悲しみ、不幸以上に乗り越えがたいものがあるだろうか。人はだれも、男も女も、幸福は、ぼく

なぜなら、あのうなり声こそわれわれの心のなかにある確かな病気であって、しかもそれは、われわれの外にありとあらゆる種類の病気をもたらすものだから。したがって、礼儀作法（ポーテス）は政治（ポリティック）にふさわしい規則である。この二つのことばは親類である。礼儀をわきまえた者、それこそが政治家である。

その点について、不眠症の例は示唆的である。あの何とも言えない気分のことはだれでもよく知っている。そういうふうに生きていること、それ自体が耐えがたいように思われるのである。ここでは、仔細に考える必要がある。自己支配は生きていることをあかしする一つの形である。否、それ以上なのだ。自己支配は、生存を組み立て、生存を保証している。そのことはまず、行動によってわかる。丸太を輪切りにしている人の夢は、いともたやすくよい方向に変わって行く。猟犬の群れは獲物を追いかけている時にはけんかなどしないものだ。思惟の病に対する第一の治療法は、したがって、丸太を輪切りにすることである。しかし、はっきりと目ざめた思惟は、それ自身のなかにすでに気持ちを和らげる力をもっている。選びとることによって排除している。ところで、不眠症の病根はここにあるのだ。眠りたがっているのに、自分に対して、動くな、選ぶな、と命じているからだ。こうして自己支配ができないために、すぐにからだと心とが一緒になって、機械的（メカニック）な、無意識の流れにしたがってしまう。犬どもがけんかを始める。あ

93　誓わねばならない

悲観主義は気分によるものであり、楽観主義（オプティミスム）は意志によるものである。気分にまかせて生きている人はみんな、悲しみにとらわれる。否、それだけではすまない。やがていらだち、怒り出す。子どもの遊びを見ればわかる。子どもの遊びは規則がないと、けんかになってしまう。自分自身をさいなむあの無秩序な力以外にここではどんな原因もないのである。ほんとうを言えば、上機嫌など存在しないのだ。気分というのは、正確に言えば、いつも悪いものなのだ。だから、幸福とはすべて、意志と自己克服とによるものである。いずれの場合も理屈は奴隷みたいなものだ。命令にしたがって動くだけだ。気分には驚くべき思考システムがあって、それが狂人にあっては拡大されて見られる。被害妄想にとらわれている不幸な人のおしゃべりには、いつも真実味と雄弁とがある。オプティミスムから生まれた雄弁は、人の気持ちを和らげる類いのものであって、憤慨の饒舌とは好対照をなすものである。その雄弁を聞くと心が和らぐ。真価を発揮するのは口調（トーン）であって、ことばそのものなど小唄ほどにも意味がないのだ。気分のなかでいつも聞こえてくるあの犬どものうなり声、あいつはまず第一に、やめさせねばならない。

べて、誤ったものだという経験を活かすことだ。こういう毅然たる判断によって自己支配を欠く思惟はすべて、夢想レヴェルに格下げされる。そして棘をもたないあの幸福な夢が準備される。逆に、夢を開く鍵はなんでもかでも重大視してしまう。それこそ不幸を招く鍵である。

一九二三年九月二十九日

らゆる運動が痙攣的であり、あらゆる観念が刺戟的である。そうなってしまうと、最大の友人までも疑うようになる。しるしというしるしはすべて、悪い方に解釈されているのである。自分自身、ばかをやっていて阿呆らしいと思うようになる。だが、こういう見かけはなかなか強いので、丸太を輪切りにするどころではない。

そこから非常によくわかることは、オプティミスムは誓約をもとめていることである。最初はどんなにおかしな考えに見えようとも、幸福になることを誓わねばならない。主人の鞭によってあの犬どものうなり声をすべてやめさせねばならない。最後に、用心のために言っておく。憂鬱な思考はすべて、自分をだます魂胆だと思ってさしつかえない。そう考えてよいのだ。なぜなら、われわれは何もしないでいると、すぐに自ずと不幸をつくり出してしまうものだから。退屈さがそれをあかしている。しかし、われわれの考えは、それ自体では棘々しいものではない。また、われわれがいらだつのは自分自身の心の動揺である。そのことを最もよく示しているのは、からだの中のものがすべて弛緩したあの半睡状態という幸福な状態である。だが、これは長続きしない。こうして眠りが告げられたなら、ほんとうの眠りはすぐにやってくる。ここで自然のはたらきを促進させている眠りの方法は、とりわけ、中途半端に考えようとは絶対しないことだ。思考に没頭するか、それとも全然考えないか、どちらかである。自己支配を欠く思惟はす

解説

1 アランを読む

アランはものに即してしか考えない。アランの思惟は即興である。しかし、彼の文章には「詩」がある。「今これを書いている時、雨が降っている。瓦に雨の音がして、無数の雨樋が切れ目なく歌っている。空気が洗われて、まるで濾過されたみたいだ。雲は切れ切れになった華麗な衣装のようだ。こういう美しさがわかるようにならねばならない」(アラン)。

＊＊＊

「これは、私の判断では、世界中でもっとも美しい本の一つである」。アンドレ・モーロワはPLEIADE版アラン『プロポ』第一巻(一九五六年)の序文の冒頭でそう言っている。アラン『幸福論』はまさに、「世界中でもっとも美しい本の一つである」と、ぼくは思う。

えるべきだ」。

ぼくの恩師シモーヌ・ペトルマンが(ペトルマンはアランの教え子である)、ある時こう言った。「アランは私よりも無限に聡明で、無限に賢く、無限に勇気がある」と。また「私は悲しい顔をしたアランを見たことがない」とも。実際、アランは言っている、「悲しくなるのに哲学などいらない」と。また、「不幸になるのは何もむずかしくない。ほんとうにむずかしいのは、幸福になることだ」と。

先日、友人のロベール・ブルニュが、「アランの楽観主義は、破局など存在しないということだ」と言っていた。アランの思想をみごとに捉えたことばである。

アランのことばは、アランのプロポ(哲学断章)は、ぼくに『イリアス』の英雄たちを想起させる。ことばの力強さ、思想の簡潔さにおいて。アランはこう言っている。

「……ほんとうの苦痛が訪れたら、その時自分のなすべきことはただ一つしかない。人間らしく振舞い、強く生きること。おのが意志と生命とを一つにして、不幸と敢然とたたかうことだ。ちょうど戦士が敵と相対するのと同じように」。

「幸福になるのは、いつだってむずかしいことなのだ。多くの出来事を乗り越えねばならない。大勢の敵と戦わねばならない。負けることだってある。乗り越えることので

アラン『幸福論』は体系的に読まねばならないような本ではない。また一度読んでそれで終わりという本でもない。

アラン『幸福論』は「友人」に似ている。自己と親密な存在で、けっして裏切ることのない友人に。「自分に親切であること、自分の友人となることを学ばねばならない」(アラン)。一冊の本が友人となりうるのは稀有のことである。

アランは人に、読者に、何かを強いることがない。この意味においても、アランはすごい思想家である。「自由」を体現した人間である。「人に考えを強いるやり方……それはつねに御しがたい愚かさであり、狂気の温床である……。人に考えを強いるな、自由にさせてやりたまえ、怖がるのはやめたまえ。自由な人間は柔和な者で、武器など持たない」(アラン)。

＊＊＊

人はアランの中に何を読むのか。おそらく魂の高貴さ・高邁さ(générosité)であろう。「魂は信じやすいものを信じることによって死ぬ」。「仕事のとほうもなさと人間の弱さを考えたなら、人は何もできない。したがって、まず行動し、自分のやることだけを考

＊＊＊

著者アラン。本名エミール・シャルティエ Emile Chartier、一八六八年モルターニュ・オ・ペルシュ生まれ。一九五一年ル・ヴェジネ歿。四十年間(一八九二―一九三三)、リセ(高等中学校)の哲学教師を務めた。アンドレ・モーロワ、シモーヌ・ヴェイユらはアランの教えを受けた。また、新聞に「プロポ(哲学断章)」を毎日書いた。一九〇六年から一九一四年まで『ラ・デペシュ・ド・ルーアン』紙に、一九二一年から一九三六年まで『リーブル・プロポ』紙に。一九一四年には(第一次大戦の時)、一兵卒として兵役を志願し、砲兵として従軍した。主な著作には『マルスあるいは裁かれた戦争』『芸術論』『神々』『思想と年齢』『海辺の対話』などがある。

アランの『幸福論』。原題は Propos sur le bonheur.「幸福についてのプロポ」。「プロポ」というのは、紙葉一枚二ページに書かれた断章で、アランのつくり出した文学形式である。書きたい日も、書きたくない日もアランは毎日プロポを書いた。二時間で一気に書き上げた。修正することなく。そこには、だから、一つのリズムがある。無理なところのない、自然なリズムが。

本書は、したがって、「幸福論」ではない。アランは論じてはいない(日本では、アラ

きない出来事や、ストア派の弟子などの手におえない不幸が絶対ある。しかし力いっぱい戦ったあとでなければ負けたと言うな。これはおそらく至上命令である。幸福になろうと欲しなければ、絶対幸福になれない」。

いわゆるアラン哲学など存在しない(アランに哲学がないというのではない)。アラン用語もない(ある人は、「アランの独創性(オリジナリティ)はオリジナルであることの拒否である」と言った)。アランはだれもが使っている、手あかのついた言葉を使用している。しかし、その言葉の与える意味は、新鮮で生き生きしている。

アランのプロポには「人生(ラヴィ)」の味がある。

2　アランを訳す

パリのBibliothèque nationale(国立図書館)で、ぼくはアランのマニュスクリ(手稿)をたくさん読んだ。アランのマニュスクリには何かふしぎな力があった。勢いが、どっしりしたうねりがあった。手稿をながめていると、アランがうしろから現われ、ほほ笑みながら話しかけてくるような思いに何度もとらわれた。その時は、翻訳のことなど忘れていた。ぼくにとって、いちばん楽しい時だった。

大木健訳、アラン『幸福論』(一九七二年、評論社)はすぐれた翻訳である。たいへん多くの示唆をいただいた。

＊＊＊

本書は天理大学の筏圭司先生、Institut Alain のロベール・ブルニュ、Bibliothèque nationale のフロランス・ド・リュシーさんに負う。感謝したい。とりわけ、筏氏との友情、交わりに感謝したい。アランをめぐるぼくの仕事は、いつも彼の支えの上にあった。最近、彼と書き合った哲学的書簡は、おそらく四百通を超えているだろう。また、岩波書店編集部の高村幸治さん、山腰和子さんにも感謝したい。

一九九七年十月九日
フランス、ヴィロフレーにて

神谷幹夫

ン『幸福論』としてすでに定着しているようなので、訳題はそれに従った)。

アランの『幸福論』は初版が一九二五年(Edition des Cahiers du Capricorne)、六〇プロポ。第二版が一九二八年(N. R. F.)、九三プロポ。本書はこの第二版 Alain, *Propos sur le bonheur*, 1928, Gallimard の翻訳である。ただし、アランが初版本の上に書いた、モール・ランブラン夫人への献辞をアランのマニュスクリから入れた。文庫版 Alain, *Propos sur le bonheur*, Gallimard, Folio, 1995(Robert Bourgne 編)および一九五四年版も参照した。

アランのテクスト上の諸問題については、アラン学者ロベール・ブルニュの調査・判断に従った。

アラン『幸福論』第二版のゲラ刷り、すなわちアランによる校正(かなりの加筆)も読んだ。アランがどこで文章を追加しているのかわかった。

アラン『幸福論』には、すでに八種類の日本語訳がある(最初の翻訳は一九四〇年に出ている)。ここには『幸福論』のすぐれた価値と同時に、アランを理解することのむずかしさが読める。アランは、「プラトンを理解するためにはプラトンとならねばならない。それは絶望的な試みだ」と言った。ある意味で、同じことがアラン理解についても言えるだろう。

59 他人の苦痛 *Les maux d'autrui* 197
60 慰め *Consolation* 200
61 死者のための祭儀 *Le culte des morts* 203
62 とんまな人間 *Gribouille* 207
63 雨の中で *Sous la pluie* 210
64 興奮 *Effervescence* 214
65 エピクテトス *Epictète* 217
66 ストア主義 *Stoïcisme* 220
67 汝自らを知れ *Connais-toi* 223
68 楽観主義 *Optimisme* 226
69 結び目をほどくこと *Dénouer* 230
70 我慢強く *Patience* 233
71 親愛の情 *Bienveillance* 236
72 罵詈雑言 *Injures* 240
73 上機嫌 *Bonne humeur* 244
74 一つの治療法 *Une cure* 247
75 精神の健やかさ *Hygiène de l'esprit* 250
76 乳への讃歌 *L'hymne au lait* 254
77 友情 *Amitié* 257
78 決断拒否 *De l'irrésolution* 260
79 儀式 *Cérémonies* 264

80 新年おめでとう *Bonne année* 268
81 お祝いのことば *Vœux* 271
82 礼儀正しさ *La politesse* 275
83 処世術 *Savoir-vivre* 278
84 楽しませること *Faire plaisir* 282
85 名医プラトン *Platon médecin* 286
86 健康を維持する方法 *L'art de se bien porter* 289
87 克服 *Victoires* 292
88 詩人たち *Poëtes* 296
89 幸福は徳である *Bonheur est vertu* 300
90 幸福は気前のいい奴だ
Que le bonheur est généreux 303
91 幸福になる方法 *L'art d'être heureux* 307
92 幸福にならねばならない
Du devoir d'être heureux 311
93 誓わねばならない *Il faut jurer* 314

19 あくびの技術 *L'art de bâiller* 70
20 気分 *Humeur* 73
21 性格について *Des caractères* 76
22 宿命 *La fatalité* 79
23 巫女の心 *L'âme prophétique* 82
24 われわれの未来 *Notre avenir* 86
25 予言 *Prédictions* 89
26 ヘラクレス *Hercule* 92
27 欲すること *Vouloir* 95
28 人はみな，己が欲するものを得る
Chacun a ce qu'il veut 98
29 運命について *De la destinée* 102
30 絶望しないこと *Ne pas désespérer* 106
31 大草原の中で *Dans la grande prairie* 109
32 隣人に対する情念 *Passions de voisinage* 112
33 家族の中で *En famille* 115
34 心遣い *Sollicitude* 117
35 家庭の平和 *La paix du ménage* 119
36 私生活について *De la vie privée* 122
37 夫婦 *Le couple* 126
38 退屈 *L'ennui* 129

39 スピード *Vitesse* 132
40 賭け *Le jeu* 135
41 期待 *Espérance* 139
42 行動すること *Agir* 142
43 行動の人 *Hommes d'action* 146
44 ディオゲネス *Diogène* 149
45 エゴイスト *L'égoïste* 153
46 王さまは退屈する *Le roi s'ennuie* 156
47 アリストテレス *Aristote* 159
48 楽しい農夫 *Heureux agriculteurs* 163
49 労働 *Travaux* 166
50 始めている仕事 *Œuvres* 169
51 遠くを見よ *Regarde au loin* 172
52 旅行 *Voyages* 175
53 短剣の舞 *La danse des poignards* 178
54 大げさな言い方 *Déclamations* 181
55 泣き言 *Jérémiades* 184
56 情念のみごとな説得力
L'éloquence des passions 187
57 絶望について *Du désespoir* 190
58 憐れみについて *De la pitié* 194

アラン　幸福論

1998年1月16日　第1刷発行
2011年9月26日　第21刷発行

訳者　神谷幹夫

発行者　山口昭男

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

案内 03-5210-4000　販売部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・精興社　製本・中永製本

ISBN 4-00-336562-3　　Printed in Japan

プロポー覧

1 名馬ブケファラス *Bucéphale* 9
2 いらだつこと *Irritation* 12
3 悲しみのマリー *Marie triste* 15
4 ノイローゼ *Neurasthénie* 19
5 憂鬱 *Mélancolie* 22
6 情念について *Des passions* 25
7 恐れは病気だ *Crainte est maladie* 29
8 想像力について *De l'imagination* 32
9 想像上の苦痛 *Maux d'esprit* 35
10 アルガン *Argan* 39
11 医学 *Médecine* 43
12 ほほ笑みたまえ *Le sourire* 46
13 事故 *Accidents* 50
14 悲劇 *Drames* 54
15 死について *Sur la mort* 57
16 心のしぐさ *Attitudes* 61
17 体操 *Gymnastique* 64
18 祈り *Prières* 67

《東洋思想》

易経 全二冊 高田真治 後藤基巳訳
論語 金谷治訳注
孟子 全二冊 小林勝人訳注
老子 蜂屋邦夫訳注
荘子 全四冊 金谷治訳注
新訂 孫子 金谷治訳注
荀子 全一冊 金谷治訳注
韓非子 全四冊 金谷治訳注
史記列伝 全五冊 司馬遷 小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳
史記世家 全二冊 司馬遷 小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳
春秋左氏伝 全二冊 小倉芳彦訳
千字文 小川環樹 木田章義注解
大学・中庸 金谷治訳注
三民主義 全一冊 孫文 安藤彦太郎訳
文芸講話 毛沢東 竹内好訳
章炳麟集 清末の民族革命思想 西順蔵 近藤邦康編訳

ガンディー 獄中からの手紙 森本達雄訳
真の独立への道 ブッダの真理のことば・感興のことば MKガーンディー 田中敏雄訳
インド思想史 J・ゴンダ 鎧淳訳

《仏教》

ブッダのことば スッタニパータ 中村元訳
ブッダの真理のことば・感興のことば 中村元訳
般若心経・金剛般若経 中村元 紀野一義訳註
法華経 全二冊 坂本幸男 岩本裕訳注
浄土三部経 全一冊 中村元 早島鏡正 紀野一義訳註
大乗起信論 宇井伯寿 高崎直道訳注
臨済録 入矢義高訳注
碧巌録 全二冊 入矢義高 溝口雄三 末木文美士訳注
無門関 伊藤文生 西村恵信訳注
法華義疏 全二冊 聖徳太子 花山信勝校訳
往生要集 全二冊 源信 石田瑞麿訳注
教行信証 親鸞 金子大栄校訂
歎異抄 金子大栄校注

親鸞和讃集 名畑應順校注
正法眼蔵 全四冊 道元 水野弥穂子校注
正法眼蔵随聞記 懐奘編 和辻哲郎校訂
道元禅師清規 大久保道舟訳註
一遍聖絵 聖戒編 大橋俊雄校注
蓮如文集 笠原一男校注
日本的霊性 鈴木大拙 篠田英雄校訂
新編 東洋的な見方 鈴木大拙 上田閑照編
ブッダ最後の旅 大パリニッパーナ経 中村元訳
明恵上人集 久保田淳 山口明穂校注
仏弟子の告白 テーラガーター 中村元訳
尼僧の告白 テーリーガーター 中村元訳
ブッダ神々との対話 サンユッタ・カーヤー 中村元訳
選択本願念仏集 法然 大橋俊雄校注
法然上人絵伝 全一冊 大橋俊雄校注
禅林句集 足立大進編
高僧伝 全四冊 慧皎 吉川忠夫 船山徹訳

読書子に寄す

――岩波文庫発刊に際して――

岩波茂雄

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繋縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んでも今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうるわしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫の最新刊

和辻哲郎
日本倫理思想史（二）

壮大な日本倫理思想の通史。本巻では、戦国から江戸中期、伝統の破壊と新たな身分制社会確立の時代の倫理をつぶさに読み解く。（全四冊、注・解説＝木村純二）（青一四四-一六）**定価一〇七一円**

ヘンリー・ジェイムズ／河島弘美訳
ワシントン・スクエア

完璧な父と内気で平凡な娘、現れた美貌の求婚者――一九世紀ニューヨークを舞台に、鋭敏な描写で人間心理の交錯を映し出す、ジェイムズ（一八四三―一九一六）初期の佳作。（赤三一一-一二）**定価八八二円**

ヘッセ／手塚富雄訳
シッダルタ

ヘッセの深いインド研究と詩的直観とが融合して生み出された東洋の心の結晶とも言うべき人生探求の物語。原文の格調高い調べを見事な日本語に移した達意の訳。（赤四三五-六）**定価六三〇円**

H・ルフェーヴル／河野健二、柴田朝子、西川長夫訳
パリ・コミューン（上）

パリの市民・労働者によって樹立されたコミューンは、政府軍の攻撃により七二日間で壊滅した。コミューンを祭りとしてとらえて考察した画期的著作。（全二冊）（青四九五-一）**定価一〇七一円**

……今月の重版再開……

里見弴
道元禅師の話

（緑六〇-七）**定価七三五円**

田山花袋
東京の三十年

（緑二一-一二）**定価七三五円**

ジョルジュ・サンド　篠田知和基訳
フランス田園伝説集

（赤五二-五-二）**定価六三〇円**

坂部　恵編
和辻哲郎随筆集

（青一四四-八）**定価八一九円**

定価は消費税5%込です

2011.8.

《歴史・地理》

新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 —中国正史日本伝1 石原道博編訳

新訂 旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝 —中国正史日本伝2 石原道博編訳

ヘロドトス 歴史 全三冊 松平千秋訳

ガリア戦記 カエサル 近山金次訳

タキトゥス ゲルマーニア 泉井久之助訳註

タキトゥス 年代記 —ティベリウス帝からネロ帝へ 全二冊 国原吉之助訳

ギボン自叙伝 —わが生涯と著作との思い出 村上至孝訳

元朝秘史 全二冊 小澤重男訳

政治問答 他一篇 ランケ 相原信作訳

古代への情熱 —シュリーマン自伝 村田数之亮訳

一外交官の見た明治維新 全二冊 アーネスト・サトウ 坂田精一訳

インディアスの破壊についての簡潔な報告 ラス・カサス 染田秀藤訳

ラス・カサス インディアス史 全七冊 長南実訳 石原保徳編

コロンブス航海誌 林屋永吉訳

コロンブス 全航海の報告 林屋永吉訳

偉大なる道 —朱徳の生涯とその時代 全二冊 アグネス・スメドレー 阿部知二訳

大森貝塚 —付 関連史料 E・S・モース 近藤義郎 佐原真編訳

クリオの顔 —歴史随想集 E・H・ノーマン 大窪愿二編訳

朝鮮・琉球航海記 —一八一六年アマースト使節団とともに ベイジル・ホール 春名徹訳

回想の明治維新 —一ロシア人革命家の手記 メーチニコフ 渡辺雅司訳

インカの反乱 —被征服者の声 ティトゥ・クシ・ユパンキ述 染田秀藤訳

北京年中行事記 敦崇編 小野勝年訳註

紫禁城の黄昏 R・F・ジョンストン 入江曜子・春名徹訳

シルクロード 全二冊 ヘディン 福田宏年訳

さまよえる湖 全二冊 ヘディン 福田宏年訳

老松堂日本行録 —朝鮮使節の見た中世日本 宋希璟 村井章介校注

崇高なる者 —十九世紀パリ民衆生活誌 ドニ・プロ 見富尚人訳

海東諸国紀 —朝鮮人の見た中世の日本と琉球 申叔舟 田中健夫訳注

ヨーロッパ文化と日本文化 ルイス・フロイス 岡田章雄訳注

ギリシア案内記 全二冊 パウサニアス 馬場恵二訳

オデュッセウスの世界 M・I・フィンリー 下田立行訳

十八世紀ヨーロッパ監獄事情 ジョン・ハワード 川北稔・森本真美訳

東京に暮す —一九二八～一九三六 キャサリン・サンソム 大久保美春訳

ミカド —日本の内なる力 W・E・グリフィス 亀井俊介訳

増補 幕末百話 篠田鉱造

明治百話 全二冊 篠田鉱造

幕末明治 女百話 全二冊 篠田鉱造

徳川時代の宗教 R・N・ベラー 池田昭訳

革命的群衆 G・ルフェーヴル 二宮宏之訳

西洋事物起原 全四冊 ヨハン・ベックマン 特許庁内技術史研究会訳

日本滞在日記 —一八〇四—一八〇五 レザーノフ 大島幹雄訳

歴史序説 全四冊 イブン＝ハルドゥーン 森本公誠訳

アレクサンドロス大王東征記 全二冊 アッリアノス 大牟田章訳

クック 太平洋探検 全六冊 増田義郎訳

ダンピア 最新世界周航記 全二冊 平野敬一訳

高麗史日本伝 —朝鮮正史日本伝2 全二冊 武田幸男編訳

シェサ・デ・レオン インカ帝国史 増田義郎訳

シェサ・デ・レオン インカ帝国地誌 増田義郎訳

インカ皇統記 全四冊 インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガ 牛島信明訳

ローマ建国史 全三冊 リーウィウス 鈴木一州訳

川合康三訳注
白楽天詩選（下）

ホルヘ・マンリーケ／佐竹謙一訳
父の死に寄せる詩（うた）

内村鑑三
後世への最大遺物 デンマルク国の話

深町英夫編訳
孫文革命文集

中村健之介編訳
ニコライの日記（中）
―ロシア人宣教師が生きた明治日本―

唐詩に新風を吹き込んだ白居易。各地の風物をうたい、友情の文学を確立し、引退後は名誉と自由を両得。その「閑適」「知足」の精神は、以後の文人の理想。（全二冊）〔赤四四一二〕**定価九四五円**

この世の生の儚さと死後の名声等を主題としたスペインの詩人ホルヘ・マンリーケ（一四四〇頃―七九）の詩（本邦初完訳）。作者不詳の「死の舞踏」（本邦初訳）を併録。〔赤七三五一一〕**定価六三〇円**

我々は後世に何を遺してゆけるのか。金か、事業か、思想か？注・解説を大幅に拡充し、略年譜を付す。「デンマルク国の話」を併収。改版（注・解説＝鈴木範久）〔青一一九一四〕**定価五六七円**

アジア初の共和国を建国した孫文の革命家としての言説を集成。多種多様な言説を年代順に配列し、丁寧な解題をそれぞれに付して革命思想の全貌を浮き上がらせる。〔青二三〇一三〕**定価一一九七円**

日清戦争終結、高まる反露感情――寄せ来る時代の波のなかで日本宣教に奮闘する「ニコライ堂のニコライ」。深い情熱と率直な眼で記された稀有な記録。（全三冊）〔青四九三一二〕**定価一一九七円**

……今月の重版再開……

中野重治
梨の花 **定価九四五円**〔緑八三一三〕

石川啄木
時代閉塞の現状 食うべき詩 他十篇 **定価五二五円**〔緑五四一五〕

ゴーチェ／田辺貞之助訳
死霊の恋 ポンペイ夜話 他三篇 **定価六三〇円**〔赤五七四一一〕

宮崎滔天／島田虔次・近藤秀樹校注
三十三年の夢 **定価一二六〇円**〔青一二二一一〕

彼岸